大分県文化財調査報告書第168輯

玉沢地区条里跡

国道442号道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２００４

大分県教育委員会

序　　文

本書は、県教育委員会が大分県大分土木事務所の依頼を受けて実施した国道442号道路改良工事に伴う玉沢地区条里跡の発掘調査報告書です。

遺跡の所在する大分市稙田地区は、大分市の西部に位置し、七瀬川流域に形成された平野部に水田が広がっています。平成12年度からは、稙田新都心西部土地区画整理事業が着手され、郊外型の新商業地としての再開発が進められています。

玉沢地区条里跡の発掘調査は、平成13年度及び平成14年度の２か年にわたり実施されました。その結果、古代から近世にいたる水田跡等が検出されるなど、稙田地区の水田開発や歴史を考えるうえで貴重な資料を得ることができました。

本書が埋蔵文化財に対する保護・啓発、さらには学術研究の一助として活用されれば幸いです。

最後に、この発掘調査に多大な御支援と御協力をいただきました関係各位に対し衷心から感謝申し上げます。

平成16年３月31日

大分県教育委員会教育長

深　田　秀　生

例　　言

1．本書は大分県土木建築部の依頼で調査した、国道442号道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査（第４次・第５次発掘調査）の報告書である。

2．調査は、大分県教育委員会が実施した。

3．調査にあたり、大分市教育委員会、大分市玉沢土地区画整理事業事務所、県土木建築部大分土木事務所の協力を得た。

4．遺構の実測・撮影はすべて調査担当者が行った。

5．出土遺物の整理は、文化課文化財資料室で整理作業員が行った。

6．図面の整理は、文化財資料室で調査員が行った。

7．出土遺物・図面・写真原板等は文化課文化財資料室で保管している。

8．本書で使用した方位は真北である。

9．本書第４次調査報告の執筆・編集は、高橋　徹が担当した。

10．本書第５次調査報告の執筆・編集は、高橋信武が担当した。

目　　次

序文

例言

目次

遺跡の位置と環境…… 1

第４次発掘調査

Ⅰ　調査に至る経過

1　調査に至る経過…… 5

2　調査団の構成…… 5

Ⅱ　調査の概要

調査の概要…… 6

Ⅲ　玉沢条里遺跡土壌のプラント・オパール分析結果からみた水田開発史…… 21

Ⅳ　まとめ…… 24

第５次発掘調査

Ⅰ　調査に至る経過

1　調査に至る経過 …… 25

2　調査団の構成 …… 25

Ⅱ　調査の概要

調査の成果 …… 25

Ⅲ　調査の記録

１区の調査 …… 26

Ⅳ　まとめ …… 45

挿図目次

第１図　遺跡周辺図　明治33年作成 …… 1
第２図　遺跡周辺地図　国土地理院 …… 3
第３図　第４次・第５次調査区の位置 …… 4
第４図　調査位置図 …… 6
第５図　調査位置図 …… 8
第６図　Ⅰ区遺構図 …… 9
第７図　Ⅰ区北壁（最上段）、東壁（第２段～第５段）土層図 …… 10
第８図　１区出土遺物実測図 …… 13
第９図　１区出土遺物実測図 …… 14
第10図　Ⅱ～Ⅳ区遺構配置図 …… 15
第11図　Ⅱ区遺構配置図 …… 16
第12図　Ⅱ区土器出土状況実測図 …… 16
第13図　Ⅱ区出土遺物実測図 …… 17
第14図　溝実測図 …… 18
第15図　Ⅳ区遺構図 …… 19
第16図　溝出土杭実測図 …… 20
第17図　溝およびⅣ区出土遺物実測図 …… 20
第18図　プラント・オパール定量分析手順 …… 21
第19図　１区東壁チ土壌のプラント・オパール密度から推定した埋没植物量 …… 23
第20図　畦畔状遺構土壌のプラント・オパール密度から推定した埋没植物量 …… 23
第21図　玉沢地区条里跡第５次調査区の位置図 …… 26
第22図　１区１面 …… 27
第23図　第５次調査区１区の土層図 …… 28
第24図　１区２面 …… 29
第25図　１区２面 …… 30
第26図　１区２面 …… 32
第27図　土杭実測図 …… 33
第28図　１区出土遺物実測図 …… 33
第29図　１区３画 …… 35
第30図　１区３面の遺構（ＳＤ６と周辺）実測図 …… 36
第31図　１区３面東部遺構 …… 36
第32図　玉沢条里跡第Ⅴ次調査２区１面の遺構配置図 …… 37
第33図　２区土層図 …… 38
第34図　玉沢条里第５次調査２区２面の遺構配置図 …… 39
第35図　２区出土遺物実測図 …… 39
第36図　溝状遺構 …… 40
第37図　不整形落ち込み部分図 …… 40
第38図　３区検出遺構配置図 …… 41
第39図　３区水田部分の断面図 …… 41
第40図　３区土層図 …… 42
第41図　３区ＳＫ１～ＳＫ４の実測図 …… 43
第42図　３区ＳＫ５（２面）実測図 …… 44
第43図　排土採集遺物実測図 …… 44
第44図　水田区画のわかる地図 …… 45
第45図　前図の拡大図 …… 46

写真図版目次

第４次

第４次調査遺跡全景……49
第４次調査１区全景……50
第４次調査畦畔状遺跡……51
第４次調査１区東壁図層……51
第４次調査Ⅱ～Ⅳ区全景……52

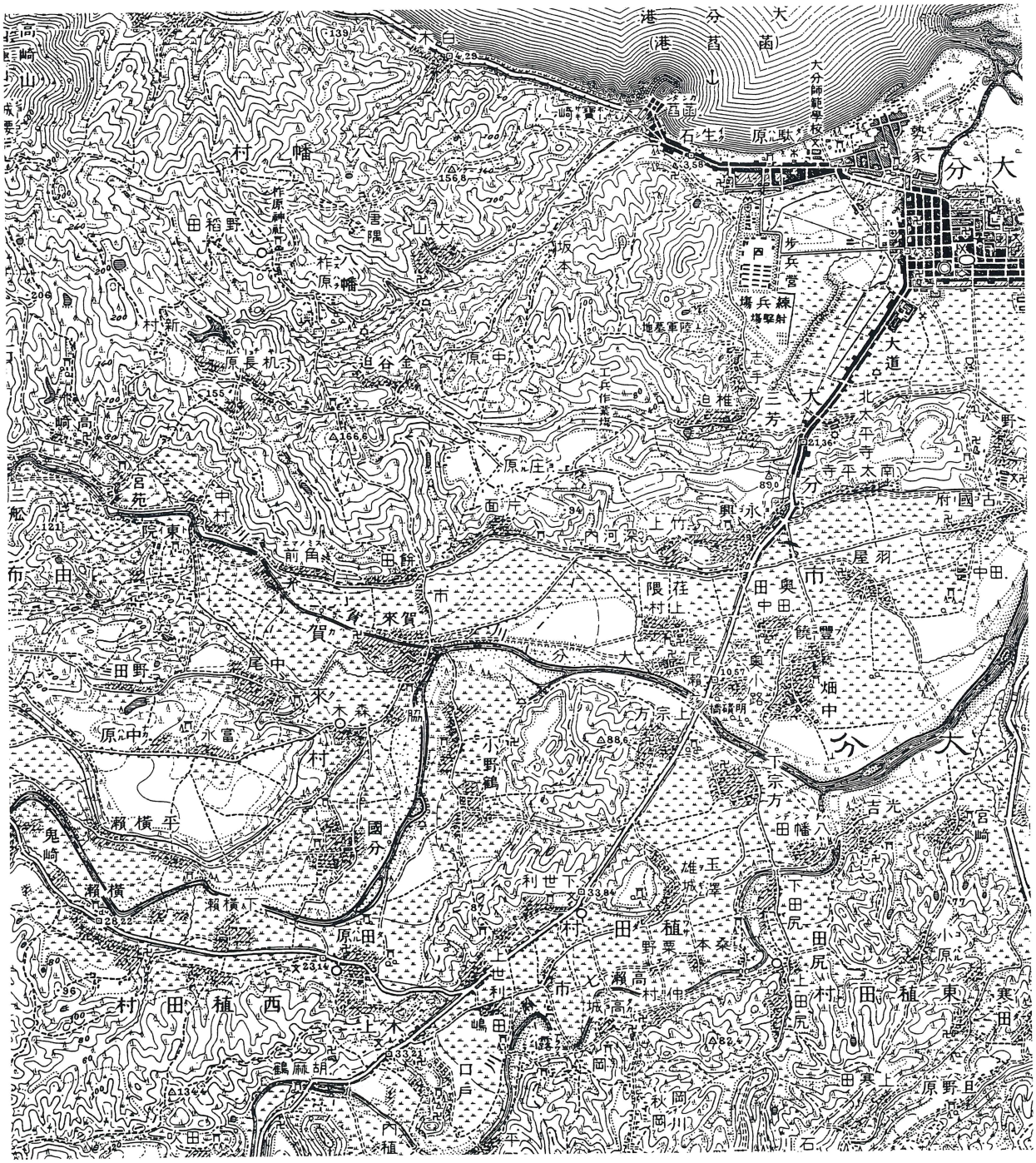
第５次

第５次調査３区検出状況……53
第５次調査３区ＳＫ４……53
第５次調査１区１画……54
第５次調査１区２画……54
第５次調査２区遺構状況……55
第５次調査２区ＳＤ１……55

1　遺跡の位置と環境

玉沢地区条里跡は大分市の西部、大分川の支流である七瀬川流域左岸に形成された沖積地に位置する。平地の背後には南西から北東方向に丘陵地帯となっており、中央部分で沖積地に突き出た独立丘陵状の雄城台は大分平野はもちろん、別府湾周辺における弥生時代高地性集落跡として最大のものである。

玉沢地区条里跡では今回の二度の発掘調査以前、これまでに大分県教育委員会第１次（江田1999）、大分市教育委員会第２次・第３次（後藤・荻・遠部2002）により三度の調査が実施されている。第３次調査についてはまだ報告書は発行されていない。また、一連の遺跡である植田市遺跡を含めこれまでの発掘調査によって、本地域における沖積地にある遺跡の具体的な状況が少しずつ明らかになってきた。



第１図　遺跡周辺地図　明治33年作成　1/50,000地図

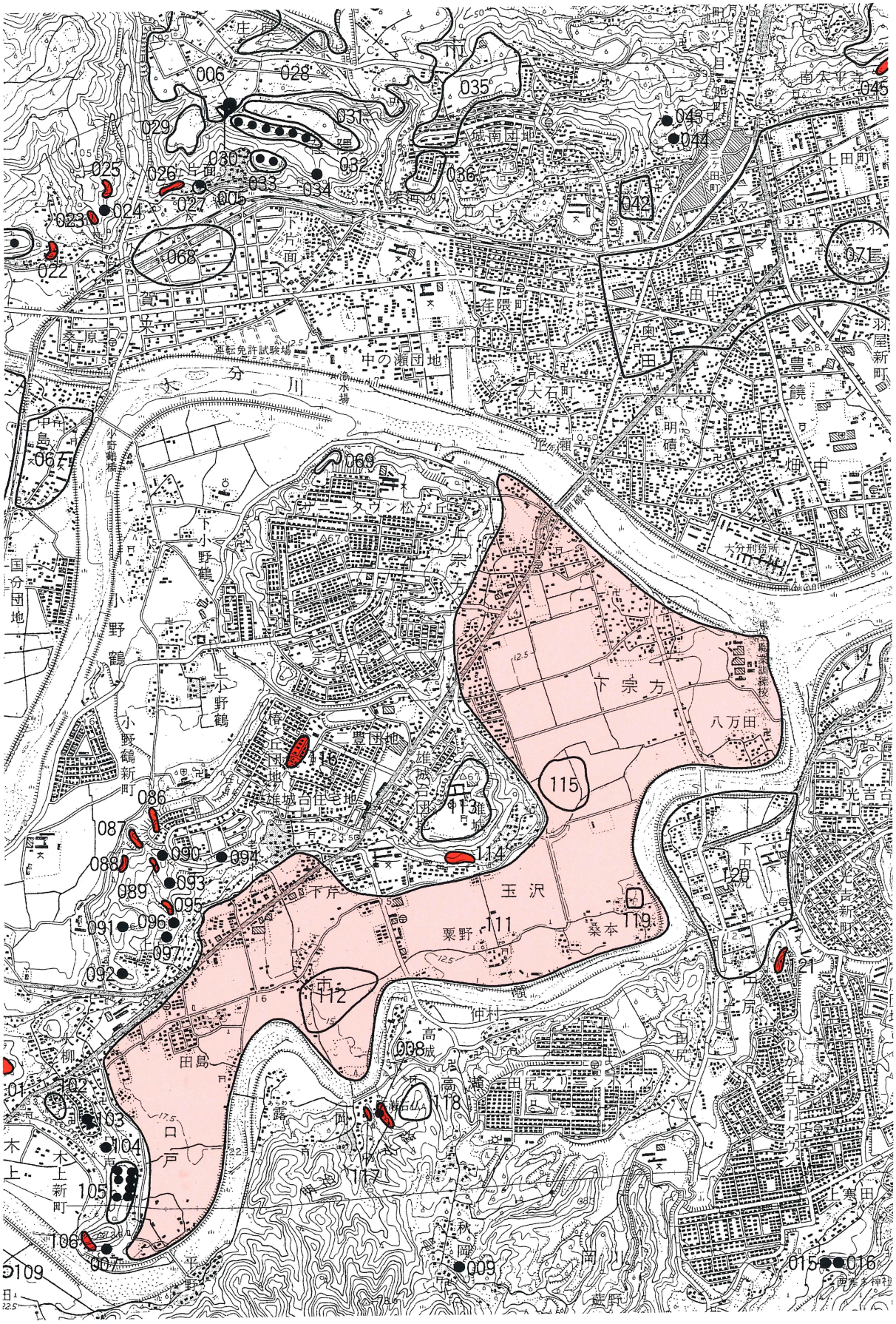
今回の調査区の東南、七瀬川が南に張り出した部分を直線的に改修工事したのに伴い発掘調査した稙田市遺跡で、縄紋時代後期の遺物と晩期末の下黒野式期の埋甕が出土した。山伏田遺跡では縄紋時代後期後葉～晩期後葉の遺物が沢山出土している。この頃には、沖積地での生活が本格化していたものとみられる。弥生時代になると遺跡は増加する。雄城台遺跡は前期末から後期末にかけての当地域の拠点集落とされており、複数の環濠跡や青銅製巴形製品（県指定）が出土している。当然、当時導入されていた水田耕作は周辺の低地部で行われていた筈だが、明確な遺構としては検出できていない。弥生時代中期の溝状遺構が山伏田遺跡、深町遺跡（新生養護学校建設時に調査。現在駐車場になっている場所で確認。遺構は埋め戻して保存されている。綿貫1998。）で調査された。中期から後期の溝状遺構が数条、玉沢地区条里跡第２次調査で出土した。これらの溝状遺構は水田に伴う遺構であろう。第５次調査区のすぐ南西隣にあたるガランジ遺跡では後期の竪穴住居跡１基が出土している。

古墳時代になるとこの地域の拠点的集落とされる雄城台遺跡には集落は存在しない。集落跡は稙田条里跡で古墳時代前期のもの（小柳1998)、稙田市遺跡で中期から後期の大規模なもの、六反田遺跡で後期のものが発見されている。玉沢地区条里跡第２次調査区では古墳時代全時期の溝状遺構がみつかっている。丘陵上に古墳が築かれ始めるのは古墳時代中期（５世紀）になってからである。全長75mの前方後円墳である御陵古墳は本地域の盟主的な人物を葬ったと考えられているが、大規模開発が始まったころの宅地開発によって消滅した。やや新しくなった５世紀後半になると、丘陵斜面や崖面に横穴墓がつくられる（地図で赤く示したもの)。これらは阿蘇溶結凝灰岩に彫り込まれた追加埋葬が可能な家族墓である。

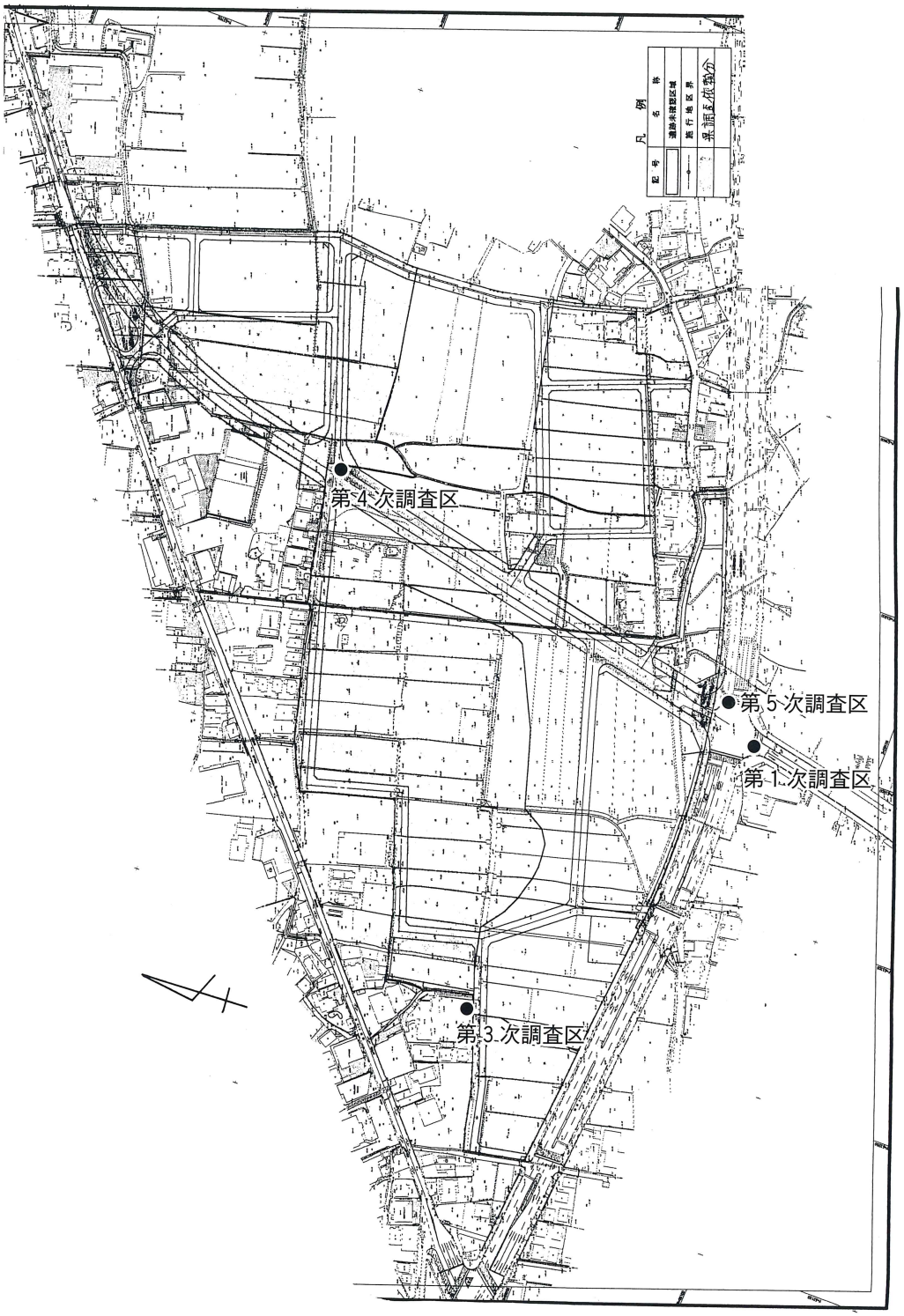
古代には大分郡稙田郷に属したと思われる。遺跡の名称である条里制も古代の圃場整備の痕跡だとみられるが、発掘調査では地表にみられる地割りと一致する明確な遺構は未発見である。玉沢地区条里跡第２次調査で検出した条里水田は報告書によると、12世紀後半から13世紀前半のものと考えられている。さらに現在の水田は、中世の水田とほぼ同位置に経営されてきたことが、第２次調査の結果判明したとされる。

〈引用・参考文献〉

賀川光夫・小田冨士雄1972「御陵古墳緊急発掘調査」大分県教育委員会
高橋信武1987「雄城台－第８次調査の概要－」大分県教育委員会
綿貫俊一1993「深町遺跡報告書」大分県教育委員会
吉田　寛1994「稙田市遺跡　七瀬川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘報告書」大分県教育委員会
小柳和宏・綿貫俊一・吉田　寛1998「ガランジ遺跡・稙田市遺跡・稙田条里遺跡」大分県教育委員会
江田　豊1999「玉沢地区条里跡遺跡群」大分県教育委員会
後藤典幸・荻幸二・遠部慎2002「玉沢地区条里跡第２次発掘調査報告書」大分市教育委員会



第２図　遺跡周辺地図（国土地理院　1/25,000　大分　1998）



第３図　第４次・第５次調査区の位置

第４次発掘調査

Ⅰ　調査に至る経過

１　調査に至る経過

1980年代後半から活発になった、大分市玉沢地区における各種開発工事に起因する埋蔵文化財発掘調査によって、当該地区に各時代の遺跡が分布することが知られていた。平成13年度になって、大分県土木建築部大分工事事務所は、国道442号道路改良工事に先立つ発掘調査について県教育委員会文化課と協議を重ね、大分市による試掘調査の結果を踏まえて路線内の発掘調査を県教育委員会に依頼することとなった。

県教育委員会による発掘調査は平成13年９月１日から平成14年３月28日まで行われた。

２　調査団の構成

調査団の構成は以下のとおりである。

調査主体	大分県教育委員会		
調査総括	石川公一	大分県教育委員会教育長	
	岩尾康晴	大分県教育庁文化課長	
	麻生祐治	同	参事兼課長補佐
	清水宗昭	同	参事兼課長補佐
調査員	高橋　徹	同	発掘調査一般事業担当主幹
	遠部　慎	同	嘱託

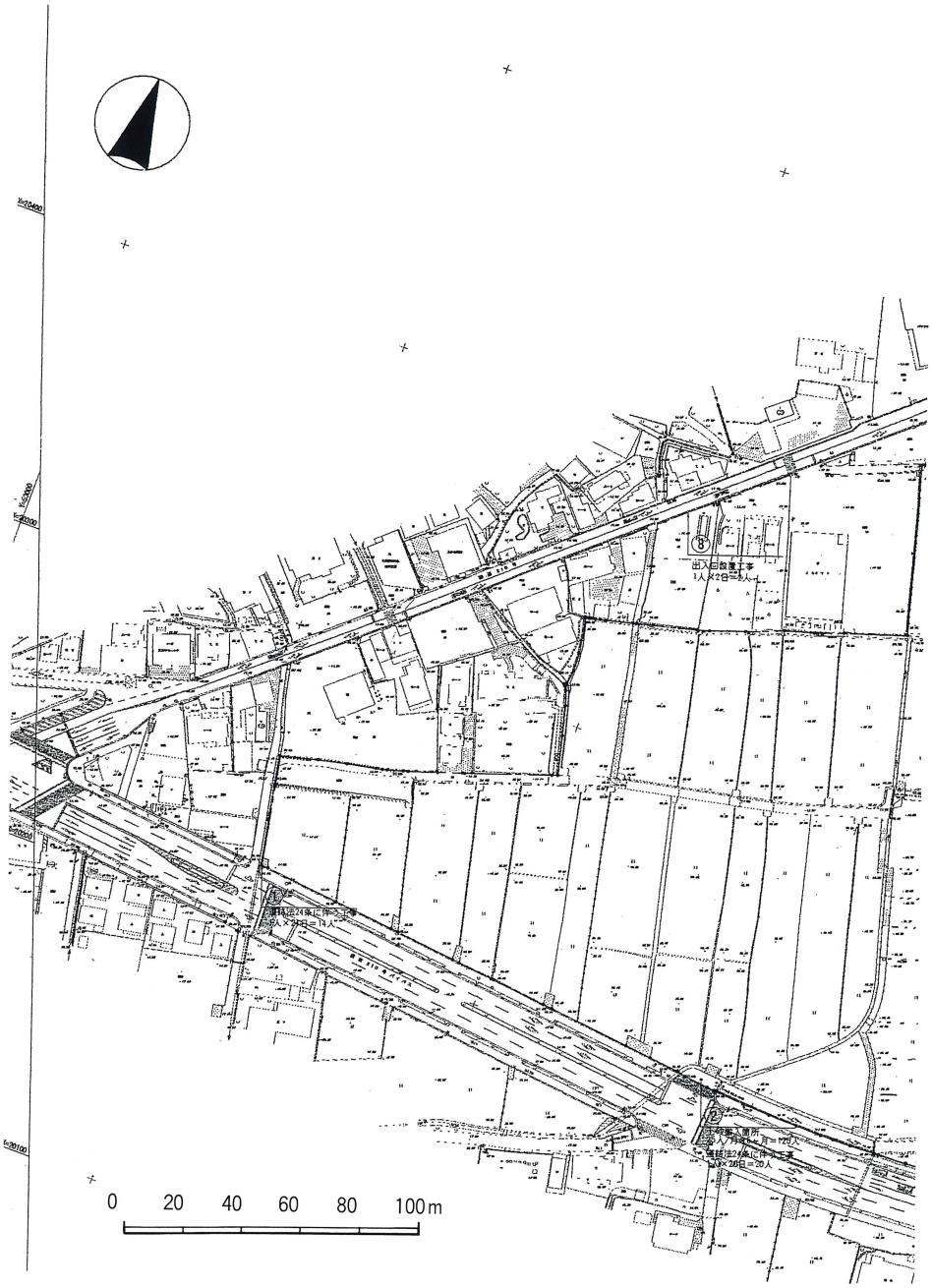
Ⅱ　調査の概要

調査の概要

第４次調査地区は、玉沢地区条里跡の中央部に位置する。調査区は北から南へ、予定路線区域に沿って、Ⅰ区、Ⅱ区、Ⅲ区、Ⅳ区に大別した。各調査区とも近年まで水田として用いられており、低位である。

工事計画との兼ね合いで、発掘調査は路線北側のⅠ区から開始し、順次南へ展開することにした。
各調査区ともおよそ50cm程度の耕作土を重機で除去しなければならず、調査の効率は著しく悪くならざるを得ない状況であった。表土を重機で除去した後は、人力による遺構検出および掘り下げを行った。以下、各調査区毎に概要を記述する（第５図）。

調査区全体を対象にして、東西を５ｍ毎に、南北を４ｍ毎に区切った発掘区を設け、それぞれＡ～Ｏ、１～53とアドレスを付している。



Ⅰ区の調査

Ⅰ区は、調査区の中でも最も北側に位置する部分である。北北東から南南西方向に延びる、長方形の調査区である。東西およそ20m、南北およそ120mの範囲となる。調査区東側に細長い溝跡状の遺構痕が検出された。

Ⅱ区はⅠ区の南に位置する。Ⅰ区とは、細い生活道路を挟んで隔てられているが、これは調査上の区分けで本質的な意味は無い。Ⅱ、Ⅲ区もそれぞれ生活道路で区切った調査区である。以上のように、生活道路を最後まで確保しなければならず、調査区の設定は便宜的なものであることを明記したい。

Ⅱ区では竪穴住居に付随すると思われる柱穴群と３箇所の土器群を検出している。Ⅲ区Ⅳ区を画す道路の下からは、同じ向きに延びる１条の溝が発見されている。

第４図　調査位置図

Ⅰ区　（第６図）

Ⅰ区の基本的な土層は次のとおりである。

Ⅰ層：青灰色の耕作土。

Ⅱ層：茶褐色の耕作土。

Ⅲ層：黄褐色土（床土）

Ⅳ層：灰褐色の砂質っぽい土層。

Ⅴ層：細かい砂層。

Ⅵ　：粘質の強い青灰色土層

Ⅶ層：暗黒褐色土層。微少な白色の粒子を多く含む。

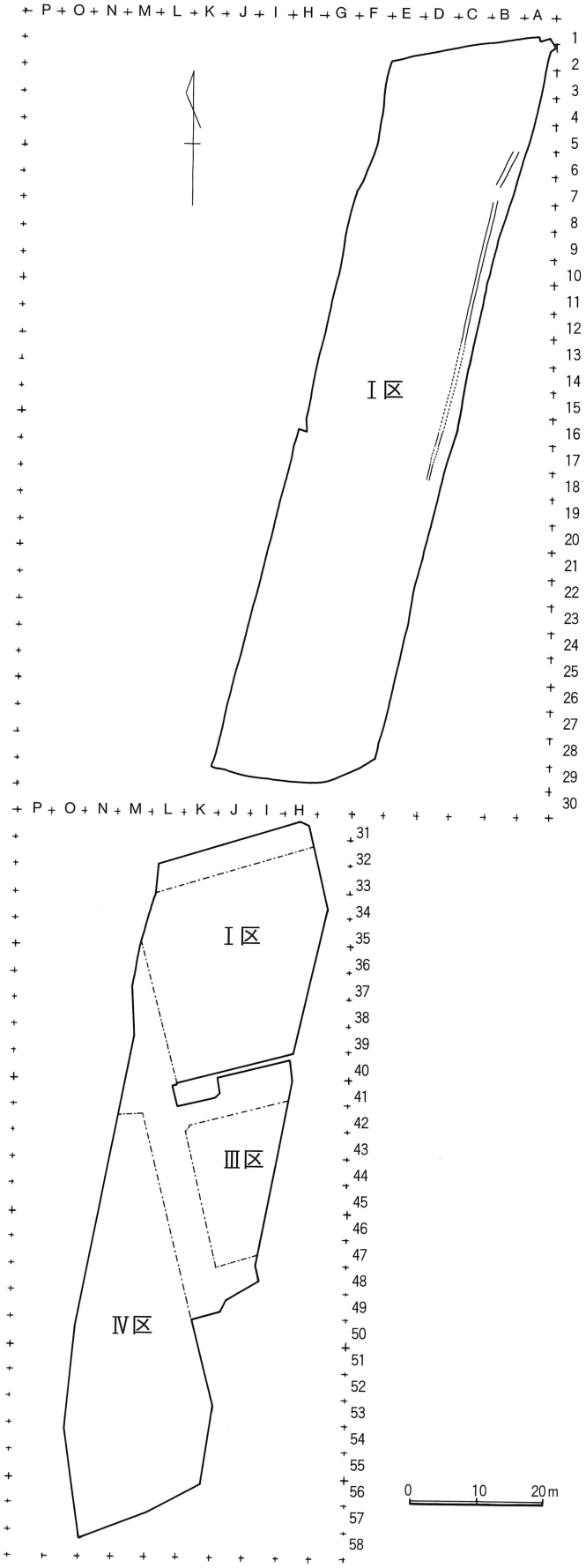
Ⅷ層：粘質の青灰色土層。マンガンを多く含み、橙褐色の粘質土が縦に入り込む。

Ⅰ区北壁の土層　（第７図上段）

Ⅰ層は青灰色の耕作土で、砂をやや多く含む。厚さ15cm～20cm。Ⅱ層は茶褐色の耕作土で、厚さ５cm～10cm。このⅡ層中で、黄褐色の粘質土がブロックで混在した土層となっている箇所があるが、おそらく客土された床土と耕作土が攪乱されたものであろう。そのためか、本北壁土層には、基本土層のⅢ層が明確には確認されず部分的に見られる程度である。Ⅳ層となる。Ⅳ層は灰褐色の砂質っぽい土層で、厚さ５cm～10cm。Ⅲ層とⅣ層の境は、マンガン粒子を含んだ土層が薄く層状に挟まれている。４層の下部に基本層序のⅤ層は無く、粘質の強い青灰色土からなるⅣ層が続く。厚さ６cm～15cm。Ⅶ層は厚さ10cm～20cmで、西に行くほど厚くなっている。

Ⅰ区東壁の土層（第７図中段～下段）

東壁において、１区～２区間では上からⅠ層、Ⅱ層、Ⅵ層、Ⅷ層と続くが、２区から３区にかけて１層、Ⅱ層、Ⅵ層、Ⅶ層、Ⅷ層と、新たにⅦ層が確認されるようになる。５区の中程から、灰褐色の砂質っぽい土層、すなわちⅣ層が出現し、１層、Ⅱ層、Ⅳ層、Ⅵ層、Ⅶ層という層序になり、11区の終わる辺りまで変わらない。12区からは４層の下面に、細かい砂層のⅤ層が新たに層序に加わる。18区になると、Ⅱ層の下位に黄褐色土（床土）のⅢ層が現れ、以後東壁の南端まで Ⅰ層、Ⅱ層、Ⅲ層、Ⅳ層、Ⅴ層、Ⅵ層、



第５図　調査位置図

Ⅶ層、Ⅷ層という基本層序が続く。なお砂層のⅤ層は、17区以南は厚さをまして、10cm以上堆積している場所もある。また、Ⅵ層は20区辺りまでは、10cm～15cmの厚さで推移しているが、21区以南ではおよそ20cmの堆積となる。

Ⅰ区の遺構（第６図）

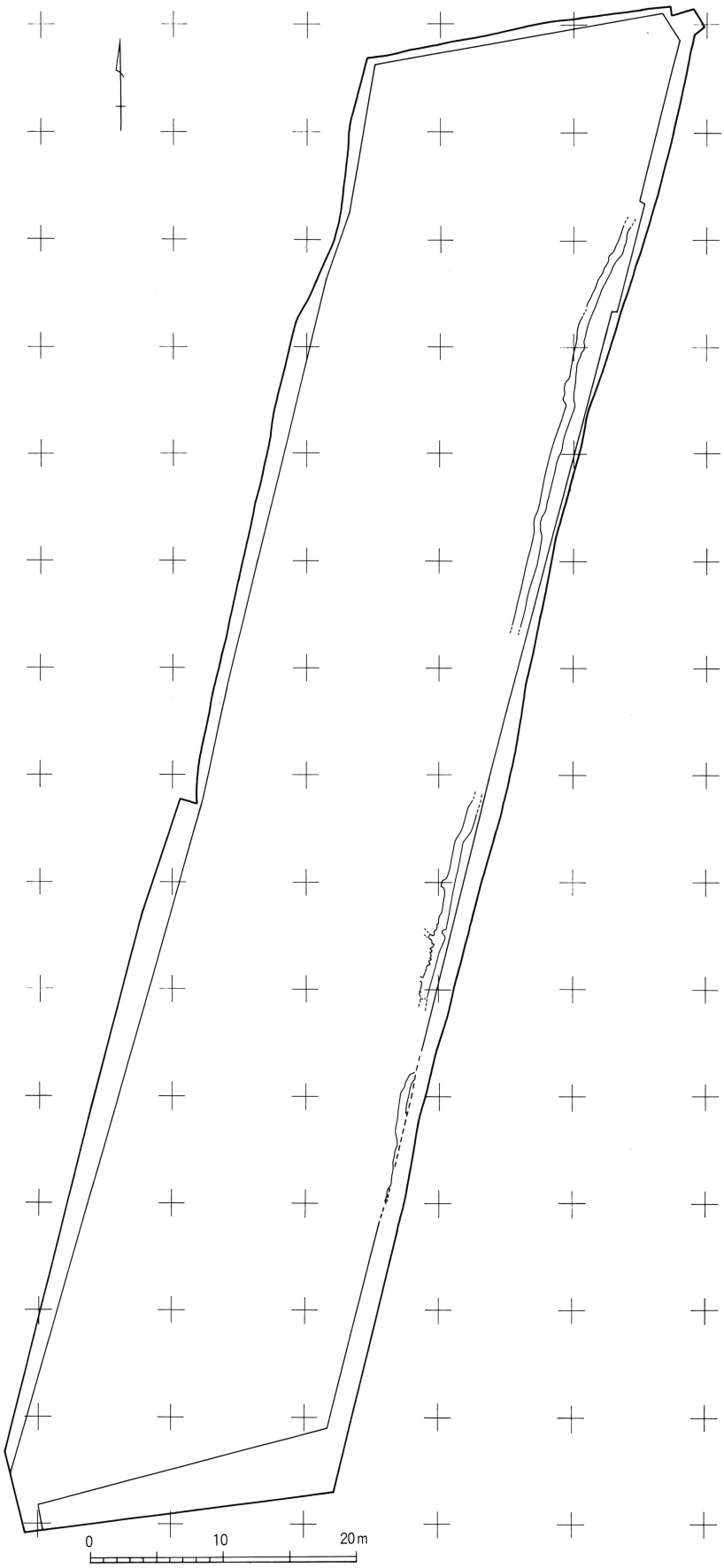
土層図他から判断すると、Ⅰ区においては最上面としてⅠ・Ⅱ層を耕作土とする近・現代の水田面がある。Ⅲ層はこれらの床土で客土されたものである。次に、厚さ10数cmのⅣ層面となるが、この面において暗茶褐色の細長い遺構痕が検出された。調査区域の東端近くで、幅60cm内外、長さ60ｍを確認した。Ⅳ層とは色調が異なるだけで、土質は基本的には同種のものである。断面観察で、わずかに皿状を呈していると観察される箇所もあるが、厚さは、全体２～３cmしか残っておらず断定できない。Ｄ－14～17区で小畦畔等に伴う溝状遺構の痕跡であろうか？いずれにしても、Ⅰ区において検出された唯一の遺構である。

Ⅰ区出土遺（第８図、９図）

Ⅰ区における出土遺物は少なく、土器の細片が殆どである。全てⅣ層出土。

第８図１～18：弥生時代の壺および甕の口縁部である。

１は弥生土器の小型壺。３－Ｂグリッド出土。ミニチュ

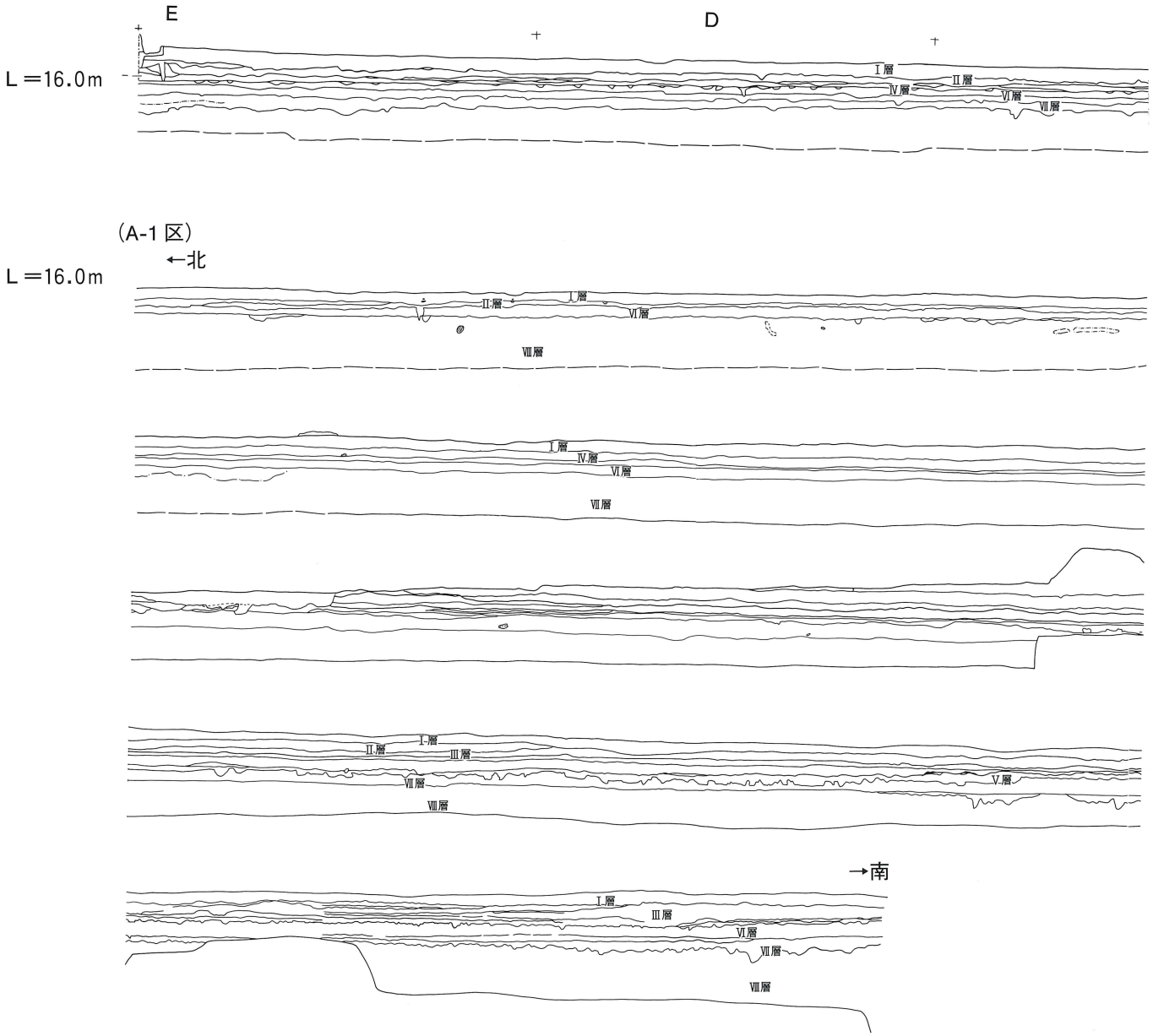


第６図　Ⅰ区遺構図

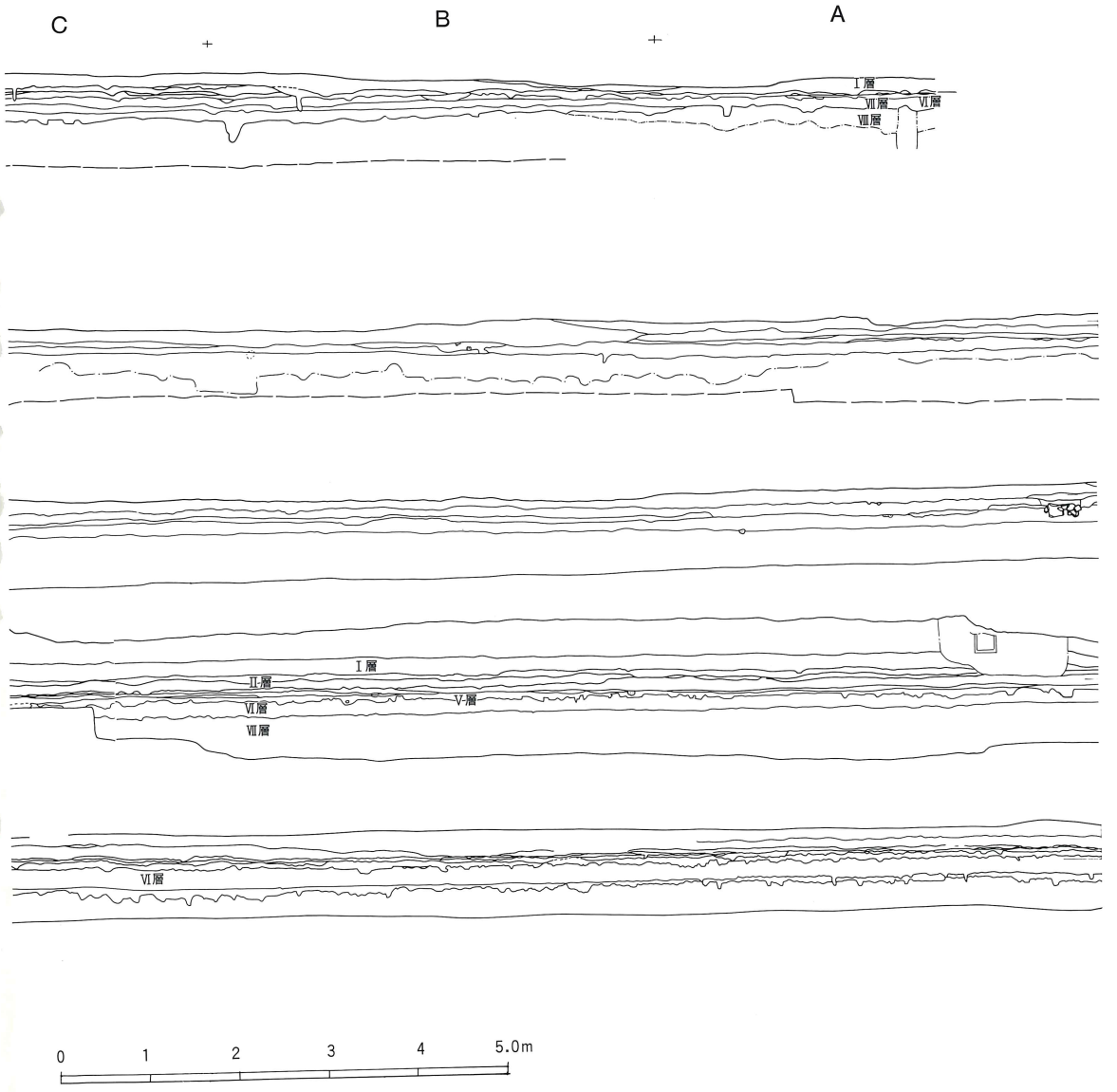
アほどの大きさである。内傾する頸部と球形の体部との境に弱い段を有する。その下位に数状の浅い沈線が巡る。内面撫で、外面は風化が著しいがおそらくへら磨き調整と思われる。２は中型の弥生壺。９－Ｃグリッド出土。頸部、体部間に段を有する。白黄褐色で胎土に多く砂粒を含む。３は突帯文甕で、直立する口縁部の端部に刻目突帯が巡る。刻目は突帯全面に施されている。外面の調整は風化のため判断しにくいが、現状では刷毛目は確認できない。４は８－Ｄグリッド出土。尖り気味の直口縁直下に、１条の刻目突帯を巡らす。刻目は小さい。色調は黒褐色で、胎土には砂粒が多い。

５、６も同様の甕口縁部片である。６の外面には、部分的ながら縦方向の細かい刷毛目調整が認められる。内面は板状工具による横方向の撫調整。

７は 尖り気味の口縁部端部を、下方に引っ張り出して所謂端部下端突帯とした甕で、突帯には細かい刻目を密に施している。内外の調整は不明である。８は16－Ｄグリッド出土。７と同様、端部下端を引き出して、そこに



刻目を施した甕である。９も８と同類であるが、下端に刻目を観察できない。10は11－Ｆグリッド出土。口縁端をやや上方に引き出したもので、細かい刻目を施している。色調は黄褐色で、胎土に小さな砂粒を含む。11は如意状の口縁部で、細かい刻目を施している。16－Ｄグリッド出土。外面は、細かい斜め方向の刷毛目、内面は撫で調整が認められる。12は短い逆Ｌ字状口縁部と、それからおよそ５㎝下位に巡らされた突出度の強い突帯が特徴の甕型土器である。下位の突帯には刻目が認められるが、欠損した口縁端部にも、おそらく刻目が施されていたものと推測する。口縁部と下位の突帯間を結ぶように、縦方向の突帯が装飾されれていたのであろうか、その一部を確認することができる。色調は黒褐色で、土器内外面に撫で調整が観察されるのみである。13～15は尖り気味の口縁部、その直下の２条の刻目突帯という共通の特徴を持つ甕型土器である。13は５－Ｄグリッド出土。口縁部直下に、断面M字状に貼り付けたと思しき、２条の突帯を巡らす。風化等のため、刻目の有無は断定できないが、現時点でははっきりとは認められない。外面には縦方向の刷毛目が施されていたようにも見えるが、こ



第７図　Ⅰ区北壁（最上段）、東壁（第２段～第５段）土層図

れもまた断定できない。

14，15は２条の突帯にそれぞれ刻目を施している。17，18は口縁端部を軽く撫でて平坦にし、その外端と、連続する三角突帯に細かい刷毛目を施している。内外面は刷毛目調整。

第９図１～37：弥生土器及び古式土師器、古代、中世の土器等である。

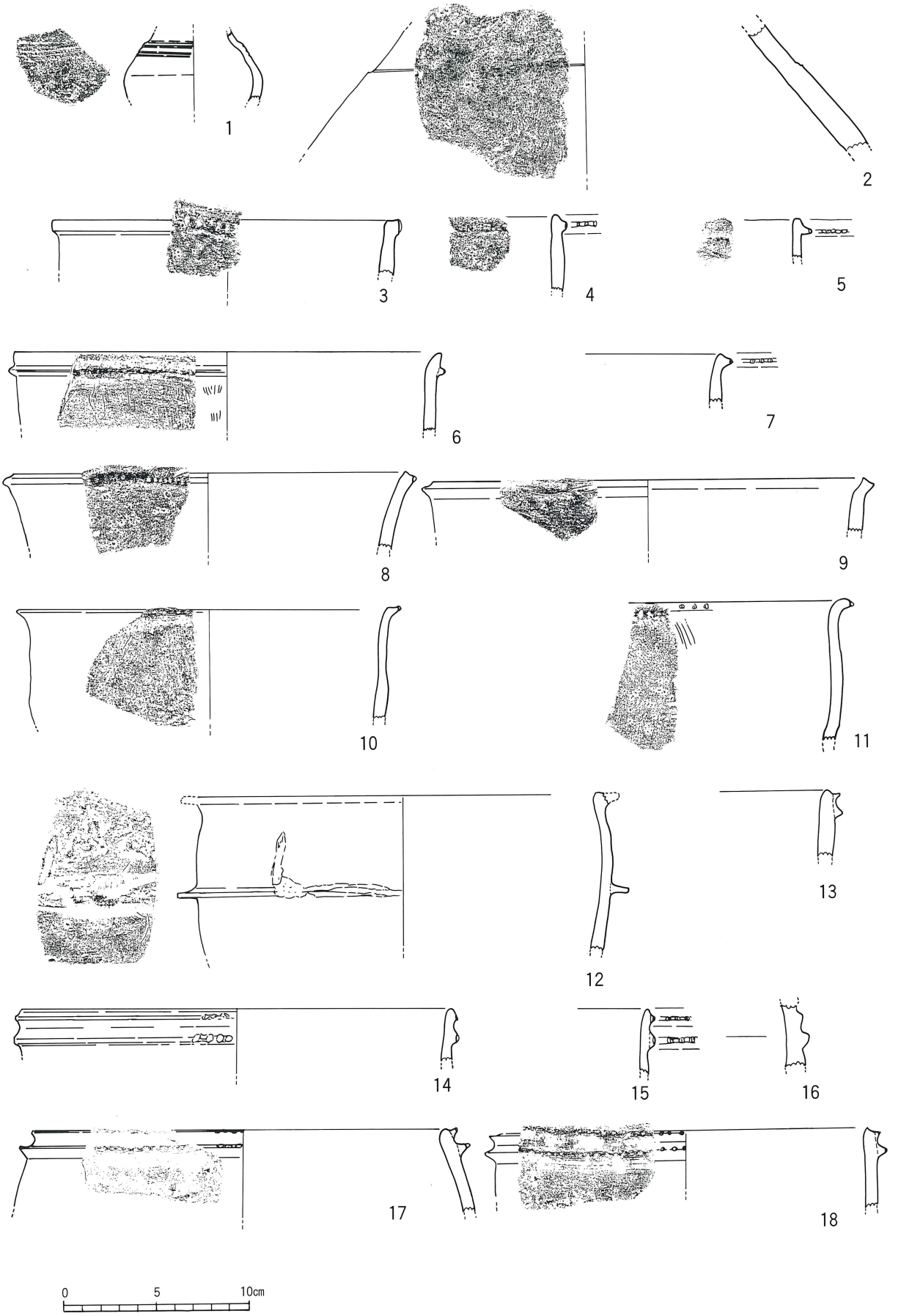
１～５は弥生土器の底部である。１は８－Ｃ区出土。底部径９cmの甕型土器底部か。色調は茶褐色で、風化の為内外面の器面調整性は不明。２は22－Ｅグリッド出土。底部径10cmの、平底で色調は赤褐色。胎土に砂粒を多く含む。内面は撫で調整、外面の器面調整ははっきりしない。残存部から判断すると、甕の底部とはならず、おそらく壺の底部であろう。３は16－Ａグリッド出土の甕型土器底部。４は26－Ｊグリッド出土の甕底部。底部が弱い上げ底になっている。灰白褐色ので砂粒を多く含む。内外とも刷毛目は確認できない。５は18－Ｅグリッド出土甕底部。黄褐色を呈し、胎土にけい藻土ふうの微粒子を含む。内面は撫で。外面は上下方向の板状撫で調整。

６は27－Ｇグリッド出土甕型土器の口縁部。比較的大きな口縁部くの字状に外反する。色調は灰褐色で、胎土には微粒子が含まれる。内外面は水平の撫で調整。７は24－Ｉグリッド出土。頸部から強く屈曲する口縁部が続くものと思われる。茶褐色を呈する。８は頸部下に断面台形の突帯を巡らす甕の破片。９，10は、くの字に屈曲する口縁部と、球形もしくは楕円形の体部からなる甕型土器である。10は胎土や色調から見て、15，16の底部と同一個体と思われる。色調は淡灰褐色。胎土は比較的精製されており、大粒の砂粒などは 含まれない。内外面の器面調整は撫で調整。11は外反する口縁部で、おそらく球形気味の体部からなる土師器甕であろう。内外面に焼成前の丹塗りが施されている。微妙に波打つ口縁部の特徴から、古墳初頭の時期に比定できよう。12は８－Ｄ区出土の直口口縁壺である。13は10－Ｅグリッド出土の丸底壺。白黄褐色。14は平底の底部片。15，16は前述したように、10の底部であり色調や焼成は同一。17は径４cmの平底をつ球形壺の体部。白灰黄褐色を呈し、内外面は平滑な撫で調整。微少な砂粒を胎土に含む。

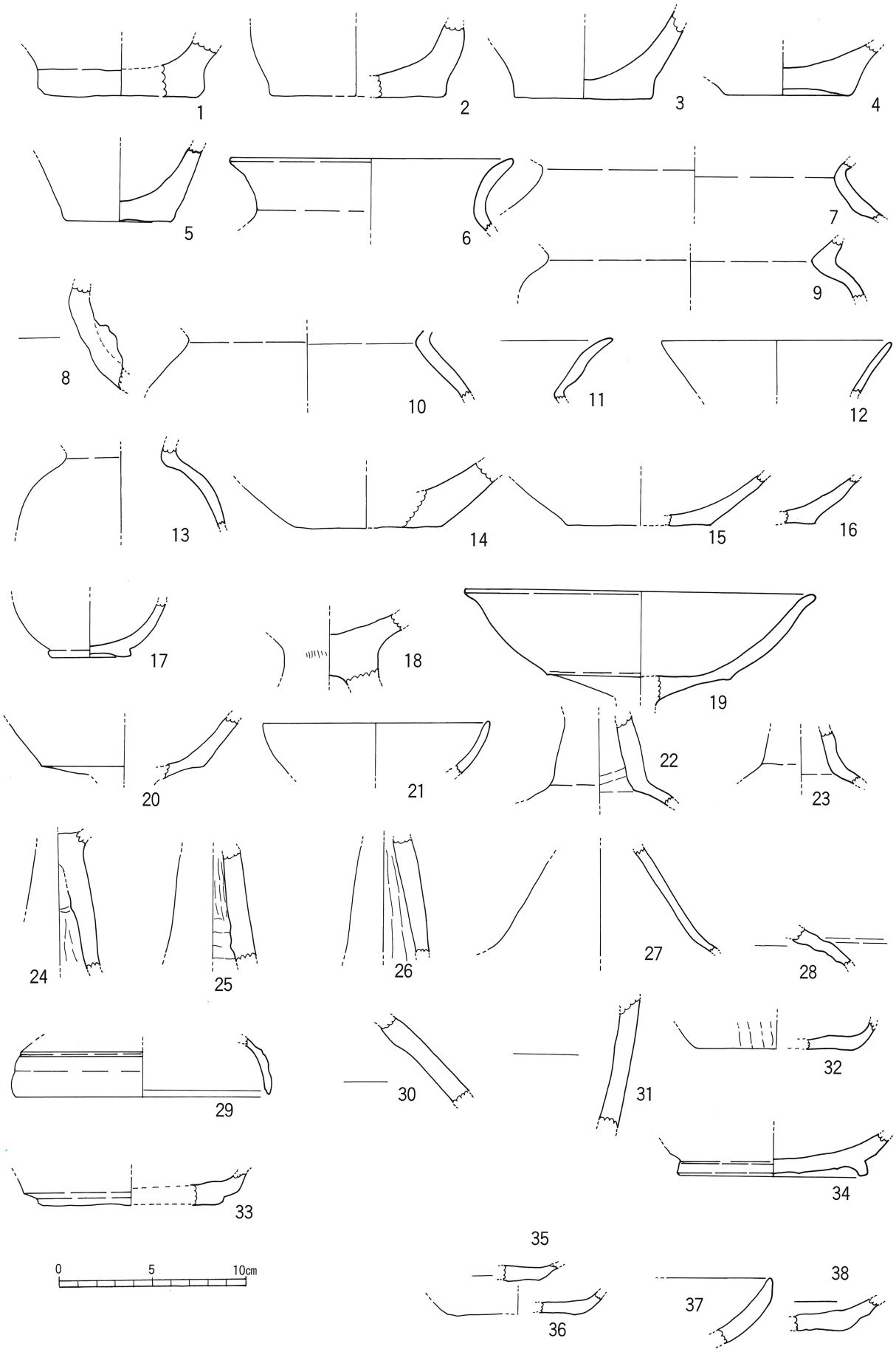
18～27は高坏の破片である。18は坏部と脚部の接合箇所。19は出土層位のはっきりしない坏部片。口径19cmを測る。口縁端部は軽く外側に湾曲。内外面は水平の撫で調整。20も坏下半部片で、18－Ｅグリッド出土。内外面は丁寧な撫で調整である。21は半球状の坏部で、風化が著しく調整の観察は不可。

22～27は高坏の脚部片である。22，23は脚部過半が強く屈曲して外側に開くもの。22の外面は、上下に丁寧な撫で調整がなされている。24～26は脚部が比較的伸びるものである。27は坏部からラッパ状に外側に開くタイプの脚である。上部内面は回転ヘラ削り、下半部は回転撫で調整が見られる。

28、29は古墳時代後期の須恵器坏蓋。30，31は須恵器甕の胴部破片で、外面にカキ目、内面に同心円叩目が施されている。32、33，34，34は古代の坏底部。35は回転糸切り離しの土師器底部。36，37は中世の瓦器碗底部。



第８図　１区出土遺物実測図



第９図　１区出土遺物実測図

Ⅱ～Ⅳ区（第10図）

現道で区切られた空間を、便宜的にⅡ～Ⅳ区に設定した。これらはⅠ区と同様、調査時点においては水田として使用されていた地区である。

Ⅱ区・Ⅲ区

Ⅱ・Ⅲ区の基本的土層は以下のとおりである。

Ⅰ層：青灰色の砂質っぽい耕作土。厚さ約30cm。

Ⅱ層：茶褐色の粘土質土で、床土。

Ⅲ層：淡褐色の耕作土。

Ⅳ層：黄褐色粘質土

Ⅴ層：暗茶褐色の粘質土層で床土。

Ⅵ：暗青灰色の粘質土。

Ⅶ層：黄色がかった青灰色土層で、粘質。

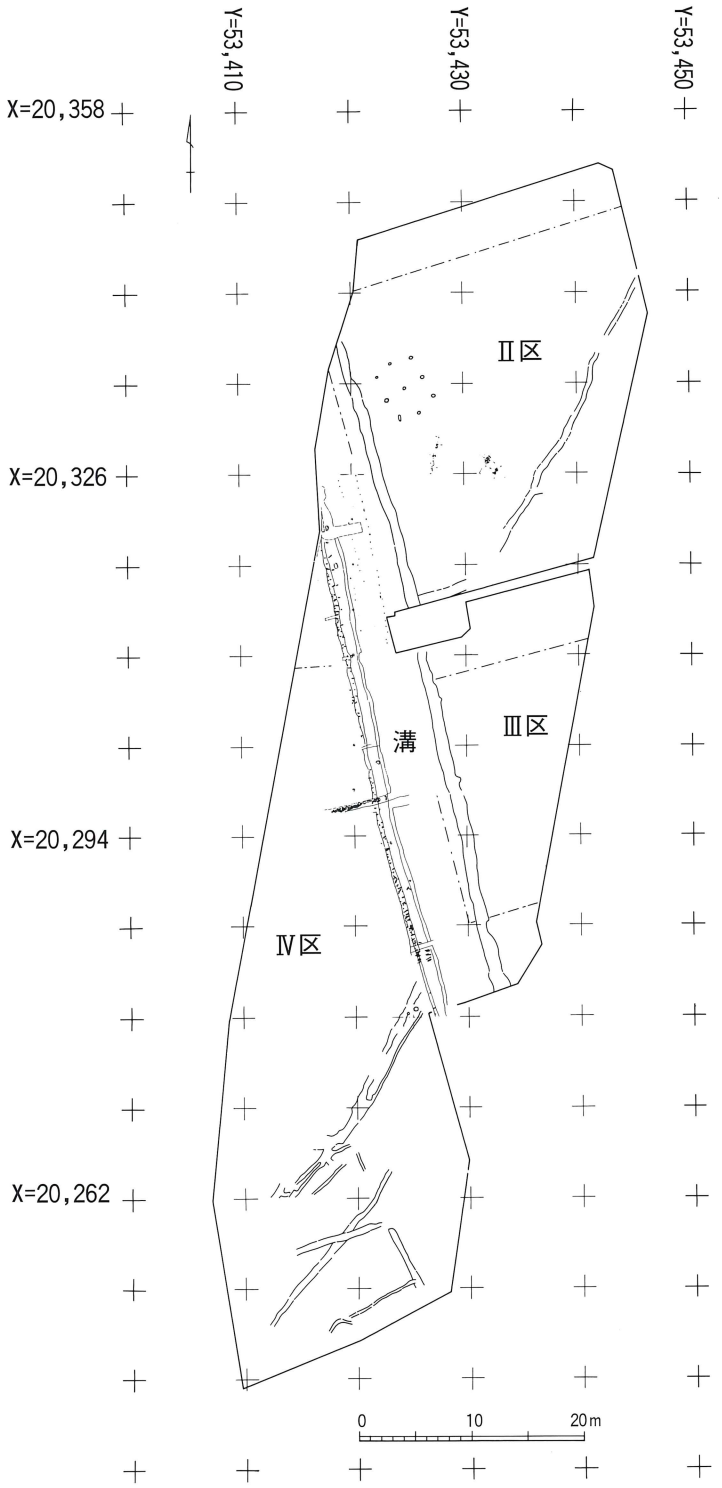
Ⅷ層：粘質の青灰色土層。マンガンを多く含み、橙褐色の粘質土が縦に入り込む。

遺構

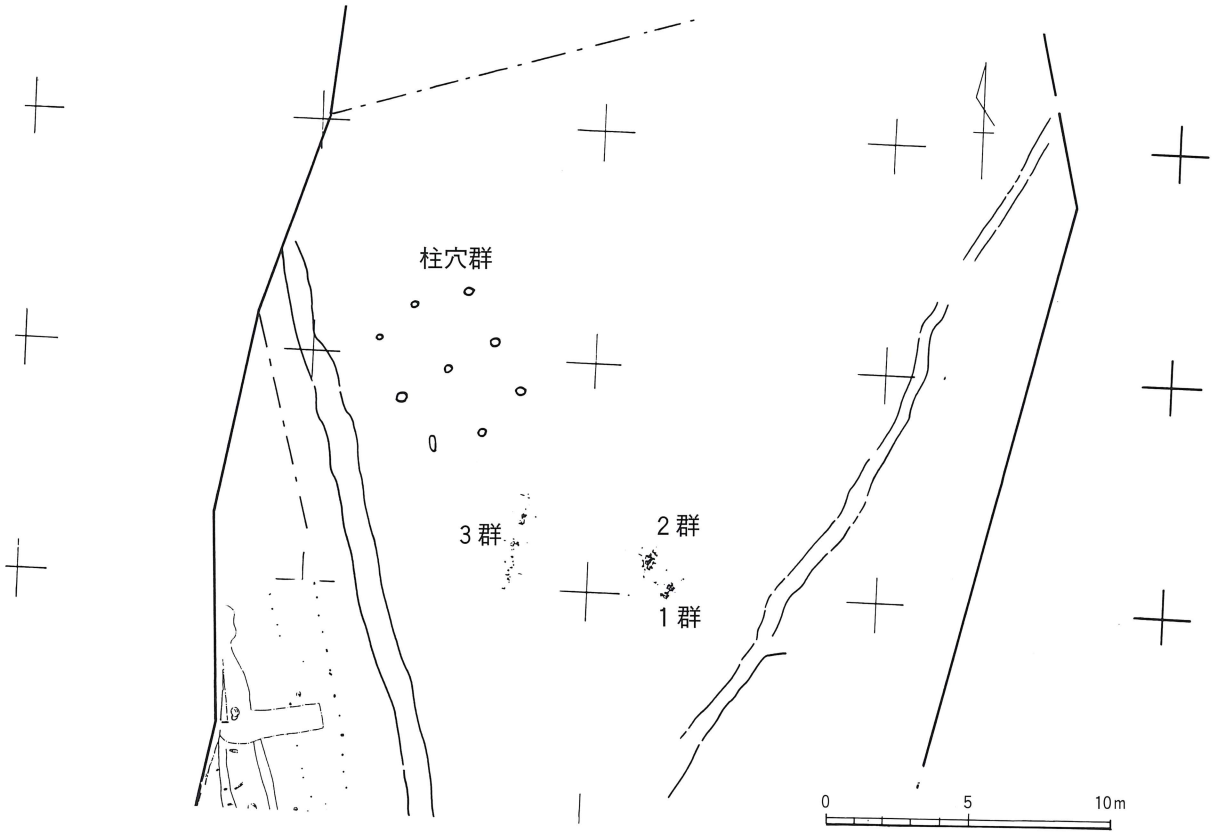
水田面　Ⅰ層・Ⅱ層で水田面１枚目、Ⅲ層で水田面２枚目、Ⅳ層・Ⅴ層で水田面３枚目、Ⅵ層で水田面４枚目となり、厚さ10cm内外の水田面４枚を確認することができた。Ⅶ層以下では耕作面の有無を判断できなかった。

色帯状遺構　Ⅱ区における遺構としては、Ⅴ層からⅥ層にかけて、北北東から南南西に延びる、幅60cm～70cmの黒褐色帯が検出されている。また、Ⅱ区からⅢ区にかけても、調査区の西側に幅約１ｍの帯状の黒褐色帯が検出されている。後者は、Ⅱ・Ⅲ区とⅣ区を画する里道を取り除いた部分で、後述の溝と平行するように伸びている。畦畔もしくは小道等の痕跡であろうか。

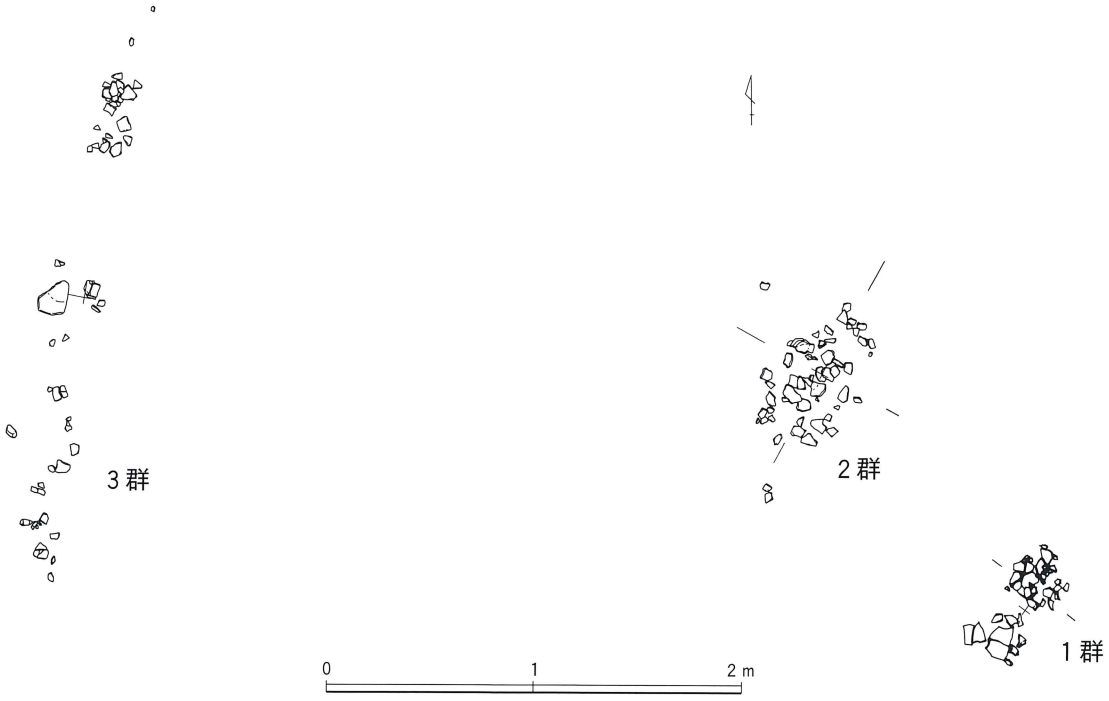
建物跡（第11図）　調査区の北西において20cm弱、深さ15cmほどの円形ピット９個がまとまって検出されている。長辺５ｍ、短辺４ｍのほぼ略方形プランに配置されており、おそらく１棟分の建物に付随する柱穴群と考えられる。柱穴等か



第10図　Ⅱ～Ⅳ区遺構配置図



第11図　Ⅱ区遺構配置図



第12図　Ⅱ区土器出土状況実測図

らは、時期を特定する遺物は出土していないが、すぐ隣接して弥生時代後期の土器群が確認されており、本竪穴も同時期に属するものであろう。存在したと考えられる建物が、果たして高床式のものであったのか、あるいはまた竪穴住居であったのか判断に苦しむが、後者の場合、床面中央やその周辺に土床炉等の痕跡が調査されることが多い。削平された可能性も残るが、今回そうした類のものを検出し得ていないことから、本遺構は、高床式の建物跡とみなしておきたい。

土器群（第11図、第12図）

Ⅱ区のⅤ層からⅥ層にかけて、まとまりのある土器群が出土している。土器群は３群あり、それぞれ隣接する。１群と言っても、各１個体分が破片となったものである。

１号土器（第13図１）

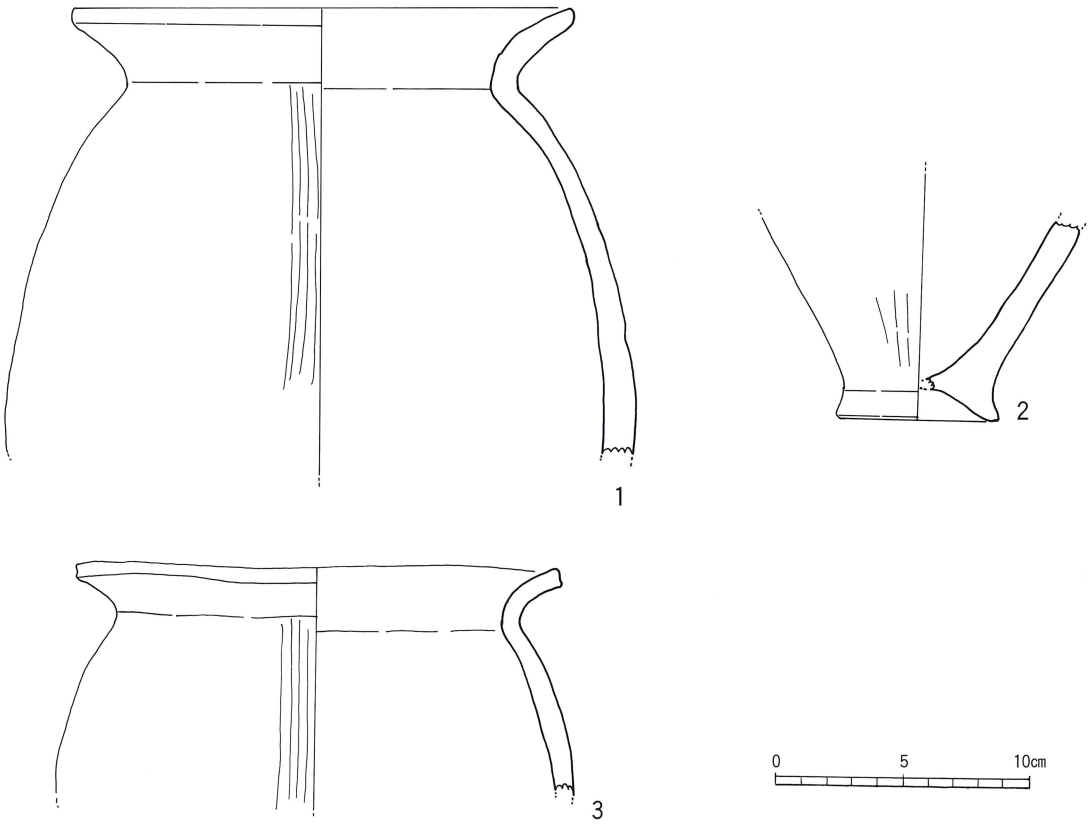
最も東側で出土したものである。比較的長めの口縁部は外湾し、体部は長胴になるものであろう。黄褐色で胎土には比較的多くの砂粒を含む。風化のため判別しがたいが、外面は本来刷毛目調整が施されていたと思われる。

２号土器（第13図２）

１号土器に隣接する土器群は、胴部片が殆どであった。２はかろうじて図示し得たもので、甕の胴下半部から底部にかけてのものである。底部は強い上げ底で、当該地域の後期弥生甕に特有の属性を有している。

３号土器（第13図３）

本例は、１号土器、２号土器と異なって溝状の遺構に分布していた。１号土器に類似した甕形土器であるが、１



第13図　Ⅱ区出土遺物実測図

号甕に比べて口縁部がやや短かく、体部の肩の張りもやや弱いものである。

以上の甕形土器は弥生後期前半・中頃に比定でき、前述した建物の時期を示唆する遺物と考えたい。

Ⅲ区出土土器（第17図８～14）　Ⅲ区の出土遺物としては、数個の土器片のみである。すべてⅣ層から出土している。８は11世紀から12世紀の中国製白磁皿。９は肥前産染付碗で、18世紀の製品。10は肥前産の白磁碗。18世紀後半以降に比定される。11は唐津産の陶器碗で、見込みは露胎。18世紀前半に比定する。12は淡黄褐色の京焼碗で、内底部に「岩倉山」の文字が刻印されている。18世紀のもの。13は13世紀代の龍泉窯青磁碗である。14は関西系陶器で、土瓶の注口。

Ⅳ区（第15図）　Ⅳ区は今回の調査区にあって最も南に位置する。南南西から北北西に延びる幅７ｍ程の里道でⅢ区と区別される地区である。里道を取り除くと、その下から里道と同一方向に設けられた溝が発見された。

Ⅳ区西壁の基本土層は次のとおりである。

Ⅰ層：青灰色の砂質っぽい耕作土。厚さ約35cm。

Ⅱ層：茶褐色土層。不純物を多く含む。厚さ25cm内外。

Ⅲ層：淡青灰気味の褐色粘質土。本土層の最下部は薄いマンガン層。

Ⅳ層：青灰粘質土。厚さおよそ12cm。

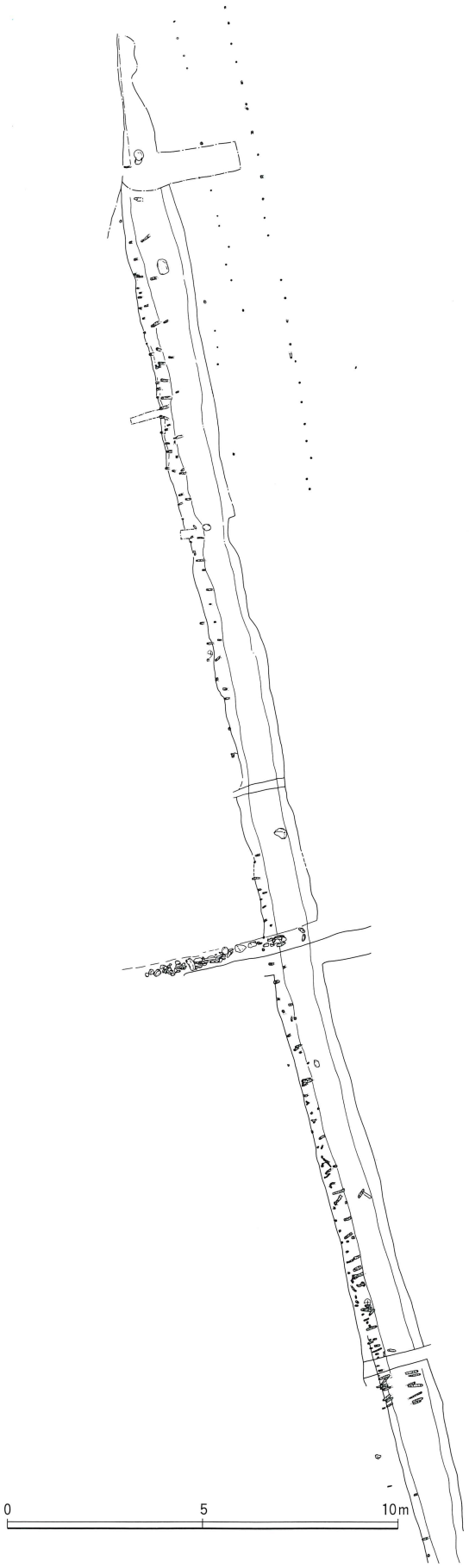
Ⅴ層：暗茶褐色の粘質土層で床土。厚さ４～５cm。

Ⅵ：Ⅴ層に近い土質および色調。本層下部は薄いマンガン層。

Ⅶ層：暗青黒褐色土層で、粘質。

面１（Ⅰ層～Ⅲ層）、面２（Ⅲ層）、面３（Ⅳ層、Ⅴ層）面４（Ⅵ層）と、少なくとも４枚の面が確認される。

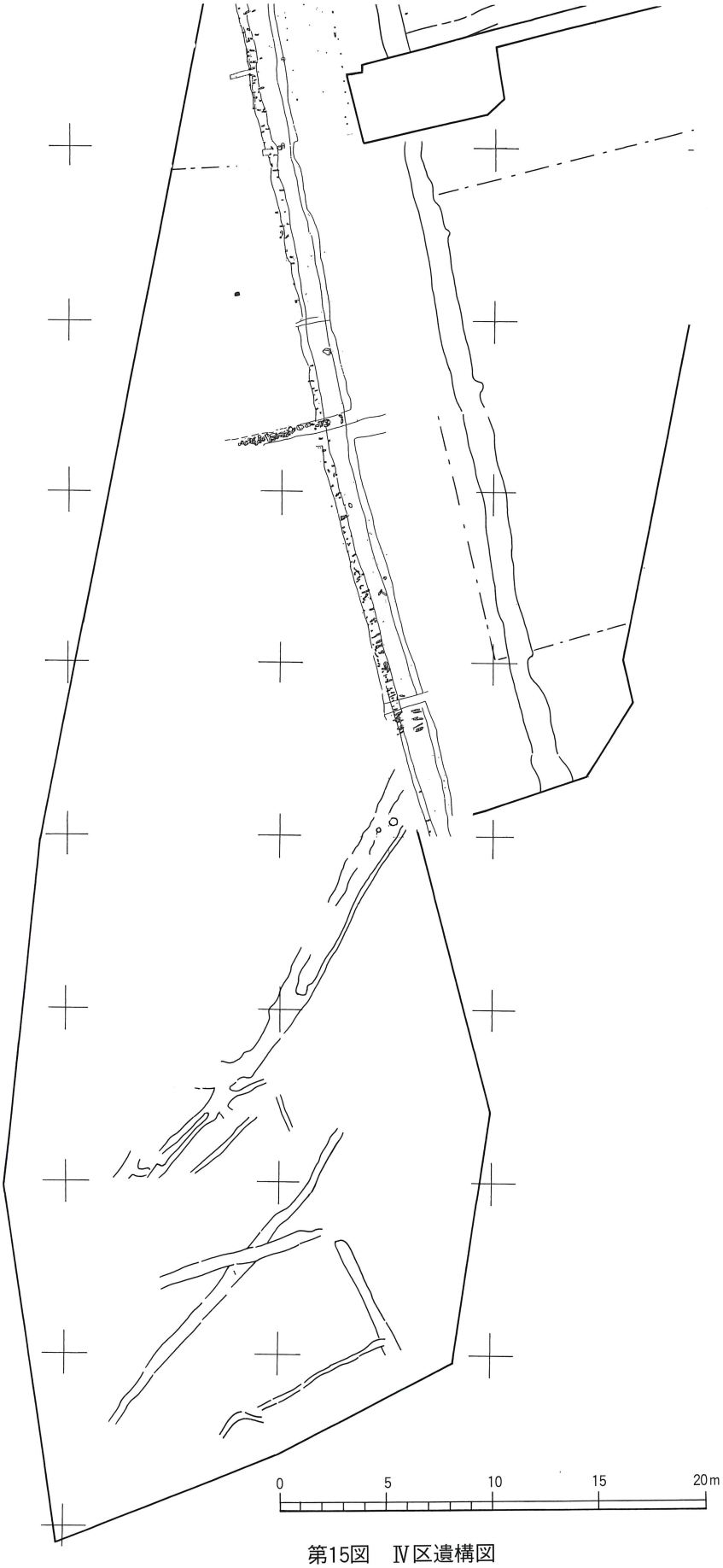
明確な畦畔等の遺構は検出できなかったが、調査区南半分において、水田を小区画に区切ったと思しき、畦畔状遺構若しくは同遺構に伴う小溝等を示唆する遺構の痕跡が確認されている。



第14図　溝実測図

Ⅵ層下面からⅦ層の上面で検検出される帯状の痕跡で、幅20cm弱のものと、幅40～60cmのものがある。南南西－北北東方向の遺構痕（A）と西南－東北方向の遺構痕（B）を検出するが、切り合いからみて前者は後者に先行する。この遺構痕（A）が、Ⅰ区やⅡ区の黒褐色帯状遺構と殆ど同一の方位をとっており、非常に興味深い。

溝（第14図）　Ⅱ・Ⅲ区とⅣ区を画する里道下から検出された溝で、里道と同じ向き（南南西－北北西）に真っ直ぐ延びる。断面U字状を呈する素掘りの溝である。検出上面で、幅1.5m～1.6m、深さおよそ0.9mを測る。溝は水分の多い土砂で埋まっており、既に検出面において水が染み出す程である。その埋土は上からⅠ層（黄褐色土層・厚さ8cm）、Ⅱ層（砂、粘土混じりの褐色土層・同5cm）、Ⅲ層（青灰白色粘質土層・同10cm）、Ⅳ層（砂層・同4cm）、Ⅴ層（青灰白色粘質土と黄褐色土の小塊が混入・同10cm）、Ⅵ層（青灰色粘質土・同20cm）、Ⅶ層（暗青灰色粘質土で最下層・同40cm）と細分されるが、Ⅳ層の砂層を挟んで、大きく上層と下層に分けることができる。溝の両側から、側壁に沿って斜めに木杭が打ち込まれている。溝の西側では、検出された溝の長さ分、杭列を確認できるが、溝東側では17－Eグリッド付近でまばらに検出されるにすぎない。本来存在していた杭列が、なんらかの理由で消失したから



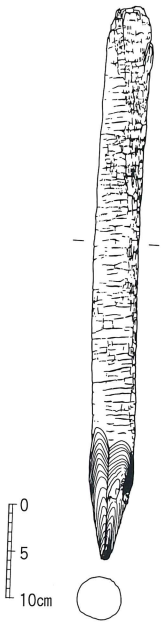
第15図　Ⅳ区遺構図

なのか、当初からこうした姿だったのか判断がつかない。木杭は第１６図に見られるように径４cm～５cm、長さ50cm～60cmの自然木で、その一端を尖らしている。

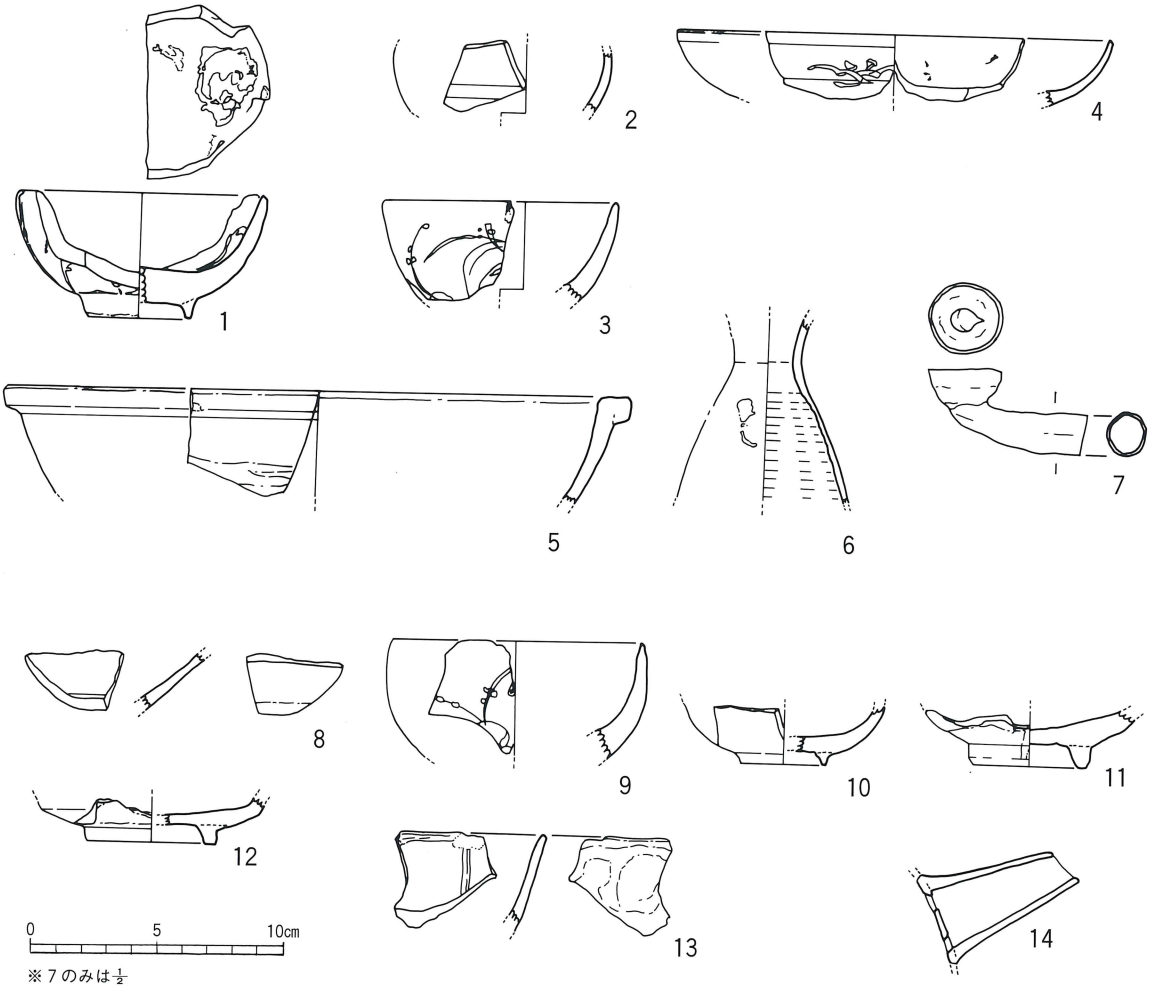
溝出土の遺物は少なく、大別した下層からの出土が殆どである。近世陶磁器類の破片や下駄、煙管片等が、溝埋土の中位から溝底近くのレベルで出土する。

溝出土遺物（第17図）　１は溝の埋土から出土した肥前磁器碗で、18世紀後半に比定される。２は淡黄白色の関西系陶器碗。18世紀後半～19世紀にかけてのものか。３も18世紀後半の肥前磁器碗。４は肥前産の磁器皿で、18世紀後半の製品である。５は口径25cmの肥前産陶器鉢で、断面方形の縁を持つ。18世紀後半か。６は関西系陶器の瓶で、18世紀後半～19世紀前半に比定される。７は溝の底付近で出土した煙管の雁首である。他に木製の下駄が１点見つかっているが、上記の時期を遡る遺物は皆無であった。

以上の出土遺物から、本溝は少なくとも江戸の中期後半頃には水路として機能していたと考えられる。



第16図
溝出土杭実測図



第17図　溝およびⅣ区出土遺物実測図

Ⅲ　玉沢条里遺跡土壌のプラント・オパール分析結果からみた水田開発史

大分短期大学教授　佐々木章

大分川と七瀬川に挟まれた玉沢条里遺跡の西部、イケハタ地区の発掘調査で、水田が形成された時期を知る目的から、発掘区南東部で１～７層の土壌を採取しプラント・オパール分析を行った。また、東部中央付近で畦畔状遺構が検出されたので、その周辺の土壌についてもプラント・オパール分析を行った。各土層の年代については出土した遺物などから別の稿で考察されるので、ここではプラント・オパール分析結果について報告し考察を加える。

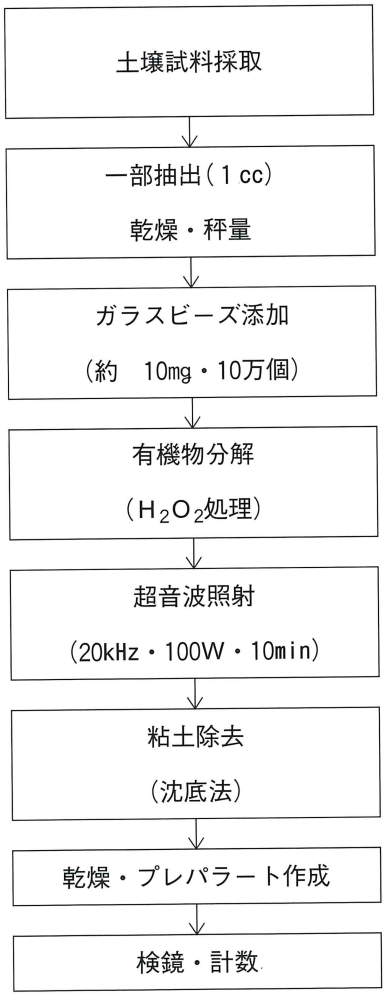
分析方法

プラント・オパール分析用の土壌試料は採取にあたって汚染がおこらないよう、使用する器具をそのつど洗って使うなど細心の注意をはらった。また、土壌試料を採取した部位は根や亀裂などが無い場所を選んだ。採取した試料は研究室に持ち帰り、通常のプラント・オパール定量分析法によって分析した。(図1)

結果および考察

イネ科植物の機動細胞珪酸体に由来する機動細胞プラント・オパールの定量分析結果を、植物体中の機動細胞珪酸体密度（表1）にしたがって土層厚さ1cm、広さ10aあたりの植物体乾燥重量に換算して図2・図3に示す。イネでは、生産されたであろうモミ収量も細線で、あわせ示した。

遺跡西南端での分析結果では、現代の作土であった1層のほか、2層下部、4層下部から5層上部にかけてイネ機動細胞プラント・オパールが多い。今までの経験から、発掘された水田遺構の作土層では1t／10a／cmを超えることが知られているが、ほぼこれに匹敵する密度であった。我が国にはイネ属の植物は自生しないが、イネ属に近縁のサヤヌカグサ属の植物が水辺や水中に自生している。サヤヌカグサ属のサヤヌカグサ Leersia sayanuka、エゾノサヤヌカグサ L. oryzoides、アシカキ L. japonica などの機動細胞プラント・オパールはいずれもイネと似ているが、それぞれに特徴がありイネとも区別できる。しかし風化が進んだ場合、特徴が不明瞭になって、イネとも区別がつかなくなる場合もおこるが、そのような場合でも、それぞれの特徴を残している機動細胞プラント・オパールが同時に検出されることが多い。定量分析では風化したプラント・オパールも計数するため、サヤヌカグサ属の機動細胞プラント・オパールを誤ってイネに計数してしまう可能性が残るが、今回の分析では、これらサヤヌカグサ属の特徴を示す機動細胞プラント・オパールは検出されていない。このため、イネに計数された機動細胞プラント・オパールはすべてイネと考えて良い。これらの層を使って水田が営まれていたものであろう。イネ機動細胞プラント・オパールは少量ながら6層の下部からも検出される。この場所でイネが短期間だけ栽培されていたか、あるいは近所



第18図　プラント・オパール定量分析手順

に水田があったと考えられる。

タケ亜科は、プラント・オパール分析でも大まかな分類ができるが、ここではタケ亜科に一括した。タケ亜科は、大分県ではネザサ Pleioblastus chino var. viridis やスダレヨシ（ゴキダケ） f. pumilis、スズタケ Sasamorpha borealis、ミヤコザサ Sasa nipponica などが林床や草原に生育し、メダケ Pleioblastus. simonii などが河川の氾濫原に生育する。遺跡からはいずれの層からも少量のタケ亜科が検出されたが、その多くはスズタケ属あるいはササ属の特徴を備えていない。遺跡の立地環境やヨシ属が検出されることから考えると、中洲や氾濫原が近くにあり、そこにメダケなどが生育していたものであろう。

ヨシ属には、湿地を好むヨシ Phragmites communis、レキや砂質の土壌を好み、早い流水中に長い匍匐茎を延ばして生育するつツルヨシ P. japonica、河口部などを好むセイタカヨシ（セイコノヨシ） P. karka があって、機動細胞プラント・オパールでも大まかに分類できるが、これも分析ではヨシ属に一括した。ヨシ属機動細胞プラント・オパールは 4 層以下で多く検出されたが、ツルヨシの特徴を持つものは少なかった。緩やかな流水、あるいは湿地から次第に乾燥化が進んだものと考えられる。

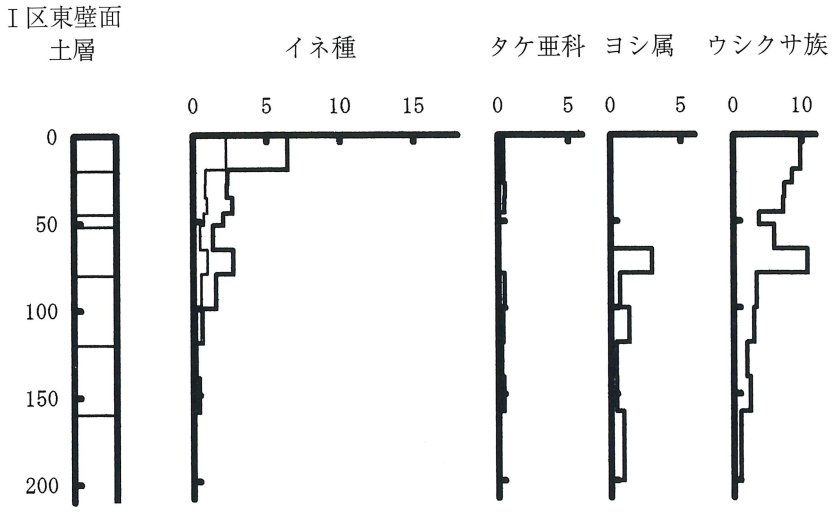
一方、ウシクサ族には、ススキ1 sinensis やチガヤ Imperata cylindrica など乾燥した草原を好む植物が多い。プラント・オパール分析結果を見ると、上層ほどウシクサ族が多いという状況が見て取れる。ヨシ属の減少と好対照である。

南北に連なる畦畔状遺構の東側では、遺構を覆う①層ではイネ機動細胞プラント・オパールが少量検出されるが、遺構上層に連続する②層ではそれより少なく、遺構下部層の③層では、ごく少量検出されるにすぎない。遺構に連続する②層が水田作土層ではないかと考えられたが、少なくとも安定した水田作土とは言いがたい。遺構中央部でも遺構上層の④層では微量のイネ機動細胞プラント・オパールが検出され、遺構下層の⑤層で少量検出されている。遺構西部の暗色を呈する⑥部分ではヨシ機動細胞プラント・オパールがやや多いが、イネはごく少ない。さらに西部の⑦部分は遺構上層につながるが、やや落ち込んでいて溝状にも見える。この部分はイネ機動細胞プラント・オパールが他よりも多いが、安定した水田であったと考えられるほど多くはない。⑦部分はヨシ機動細胞プラント・オパールもやや多い。いずれの分析結果も、この遺構の両側が安定した水田とは考えにくい。アワなどのプラント・オパールも検出されてないので積極的に畑（畠）と考えるわけにはいかないが、水田畦畔というより、畑（畠）も含み、なんらかの区画としての連続した土盛りと考えられよう。

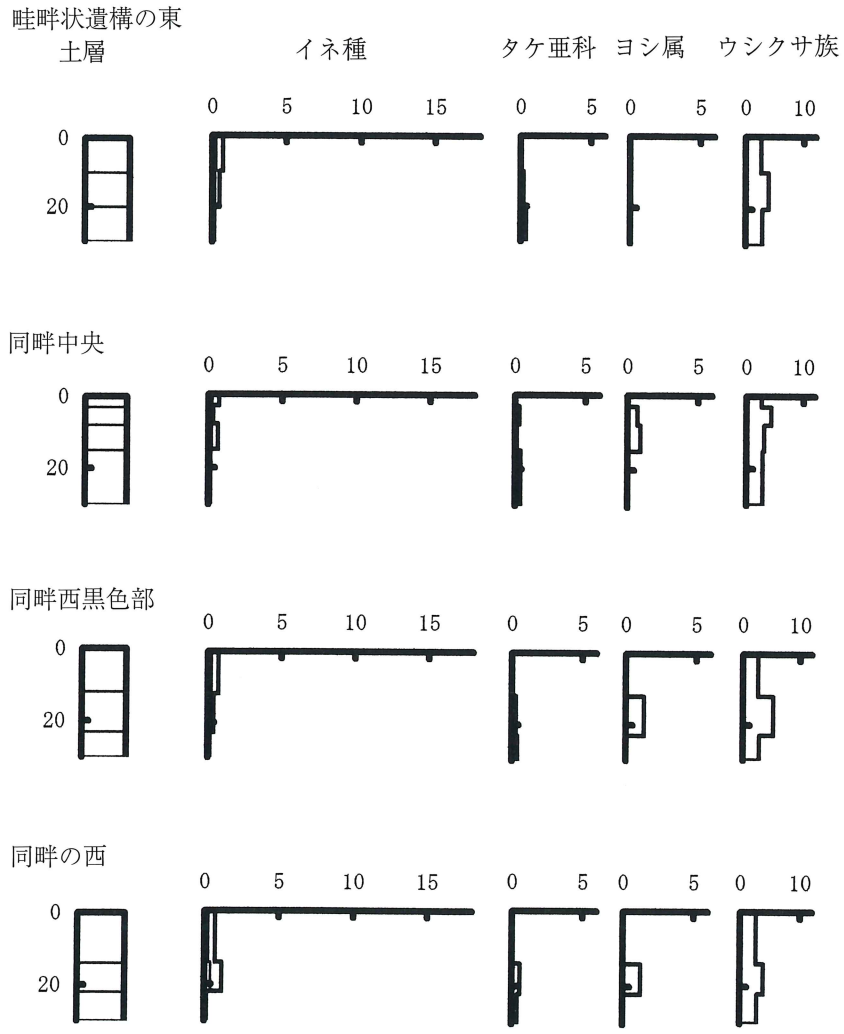
表１　植物体中の珪化機動細胞密度

（10^4個/g）

分類名称	代表植物		植物体中密度
イ　ネ	イ　ネ	*Oryza sativa*	3.40
ヨシ属	ヨ　シ	*Phragmites communis*	1.44
タケ亜科	スダレヨシ（ゴキダケ）	*Pleioblastus Chino var virides f pumilis*	20.83
ウシクサ族	ススキ	*Miscanthus sinensis*	2.79



第19図　1区東壁土壌のプラント・オパール密度から推定した埋没植物量(t/10a/cm)



第20図　畦畔状遺構土壌のプラント・オパール密度から推定した埋没植物量(t/10a/cm)

Ⅳ　ま　と　め

今回の調査区が所在する大分市稙田市付近は、七瀬川左岸に展開する「玉沢条里跡」に含まれる。 承知のように、「条里」とは土地を６町間隔で碁盤の目のような方形に区画したもので、その起源は７世紀後半に遡ると考えられている。大分県下の条里遺構を具体的に図示したのは、大分大学教授兼子俊一をもって嚆矢とする（兼子1955)。兼子の復元は、地積図や地名及び景観を考慮して行われ、大分平野では以下の５群を条里跡に比定している。①古国府から荏隈にかけての一帯。②旧稙田村の宗像・玉沢・市（いち）等の七瀬川左岸地域。③七瀬川右岸田尻の旧東稙田村役場付近。④賀来川右岸の旧賀来村と旧由布川村境界一帯。⑤上野台地北側の大道付近。これらの地割り方向について、条里縦線にあたる仟線（かいせん）は、①が西へ約12度、②・③が西へ約15度偏し、④・⑤は東に傾くが、こうした同一郡内での不一致は、「用水との関係で、地形に順応した」からとする。兼子と相前後して渡辺澄夫や米倉二郎の研究が発表されている。渡辺は旧版「大分市史」で一項を設け、大分市域の条里制遺構について触れているが、兼子とほぼ同様の見解に留まっている（渡辺1955)。米倉は兼子の研究を元に、①の古国府地区に残る字名と、古文献上に現れる関連地名との比較検討から、大分市域の条里を千鳥式とし、その復元案を発表した（米倉1956)。

稙田地域の条里について、比較的最近の研究としては、西別府元日による業績がある（西別府1987)。氏によると、②七瀬川左岸地域に東西28町、南北16町の地割りを、③七瀬川右岸地域に東西３町、南北５町の地割りを認めることができ、両者の坪界線が連続することから、それらが同一プランのもとに企画、施行された可能性を強調している。またこれらの条里仟線は17度西に偏するとする。西別府は米倉の①～③地区を対象にした条里復元案を高く評価しつつも、稙田地区に関しては、「条里の界線が現在の大字の境界と一致」させるべく、米倉案を１町ずつ西と北へ移動させる修正案を提示している。いずれにしても、これら先学諸氏の条里復元案は、地籍図や字名、古文献上の情報を総合して推定されたもので、その実証については、直接関連する遺構を検出し得る、考古学的調査に期待するところ大である。残念ながら、今回の調査においてはこうした遺構を直接検出するに至らなかったが、以下簡単にその成果をまとめる。

まず、Ⅰ区であるが、同地区にはイケハタの字名が残るように、湿地状の地形をなしていたと思われる。この想定は、佐々木氏のプラント・オパール分析結果にも符合する。本区北側の第Ⅳ層において、弥生時代早期の土器片が出土するがこの時期にまで遡る水田等は考えられず、おそらく調査区北方に営まれていた生活跡からの流れ込みであろう。本地区で確認される最古の耕作地としては、出土遺物や土層から判断しておそらくこのⅣ層が形成される段階、すなわち中世の時期を想定する。このⅠ区やⅡ区、Ⅳ区で検出されている溝もしくは畦畔状遺構の痕跡－Ⅳ区の遺構痕（Ａ）－も、この段階のものである可能性が高い。これらの南北軸は、条里仟線よりもさらに西へ偏しており、条里に一致しない。おそらく地形に沿った地割りが存在していたのであろう。Ⅱ・Ⅲ区やⅣ区では部分的に微高地が分布していたらしく、Ⅱ区で検出された柱穴は、そうした場所に建てられた弥生時代の竪穴住居跡であろう。Ⅱ・ⅢとⅣ区間で検出された溝や、Ⅳ区の遺構痕（Ｂ）は、中世に想定した遺構痕に切られており、先に推定した溝の時期を考慮しても、近世を遡らない時期のものと考えられる。これらの南北軸はほぼ条里の仟線に一致している。

近年、稙田地区においては、再開発を原因とする埋蔵文化財調査が数多く実施されている。大分市教育委員会の調査では、弥生（？)、古墳時代の小区画水田や、中世の畦畔跡等が発見されている。また小柳による、当該地区の開発史を詳述した研究も発表されており（小柳1997)、今後とも地域の歴史を復元するための、重要な地域として取り扱う必要があろう。

参考・引用文献

兼子俊一　　1955「大分懸下の条里遺構」『大分懸地方史』第４号，１～７頁　大分県地方史研究会
小柳和宏1997「 第７章まとめ稙田地区の開発史」『国道210号バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
ガランジ・稙田市・稙田条里遺跡』65～72頁　大分県教育委員会
西別府元日　1982「大分郡中心条里の復元」『大分市史』　（上 ），832～864頁　大分市
米倉二郎　　1956「国府と条里」『広島大学文学部紀要第二報』９
渡辺澄夫　　1955「第四節　大分付近の条里制の遺構」上巻，183～187頁　『大分市史　』大分　市

第５次発掘調査

Ⅰ　調査に至る経過

１　調査に至る経過

大分県土木建築部大分土木事務所は、平成14年度の県教育委員会文化課による事前分布調査に大分市大字玉沢における国道442号道路改良工事の計画を提示した。工事場所は前年度発掘調査を実施した国道442号の北部地区につづく南側に位置し、ホワイトロードとの交差点北部である。その部分は前年度調査地に直接連続し、埋蔵文化財が存在することは明らかであり、かつ層位的な状況については、すでに大分市教育委員会による周辺一帯の確認調査がこの場所でも行われているのでその成果を参考に協議した結果、再度の確認調査は実施せず、条件が整った段階で本調査に入ることとなった。

発掘調査は平成14年７月８日から平成14年10月18日まで行った。

２　調査団の構成

調査団の構成は、以下のとおりである。

調査主体	大分県教育委員会		
調査総括	石川　公一	大分県教育委員会教育長	
	岩尾　康晴	大分県教育庁文化課長	
	麻生　祐治	同	参事兼課長補佐
	清水　宗昭	同	参事兼課長補佐
調査員	高橋　信武	同	発掘調査一般事業担当主幹
	五十川雄也	同	嘱託
	生野　令子	同	嘱託
報告書作成（平成15年度）			
	高橋　信武	同	発掘調査大型事業担当主幹
	生野　令子	同	嘱託

Ⅱ　調査の概要

調査の概要

第５次調査区は玉沢地区条里跡の中央部やや南部に位置する。現在、玉沢地区条里跡を東西に貫くホワイトロードは、調査区の付近で国道442号と交差する。調査時点で国道442号は南側はホワイトロードとの交差点まで完成していた。今回の調査区が将来の交差点の北側及び北部に該当する。大分市教育委員会による確認調査結果により、この場所に埋蔵文化財が存在することは確認済みであった。県教育委員会による前年度の第４次調査区が北側に隣接しており、そこでは第５次調査区に向かって次第に地形が高まり、第５次調査区に至ると予測できる状態だった。

前年度調査した北側にあたる国道442号路線は調査時点で工事中であった。また、第５次調査区の中央をＴ字状に道路と道路北側に水路が通っており、付近の住民が常時使用するためこの部分を除いて調査を行った。結局三カ所の調査区に分断され、それぞれ１区・２区・３区として取り扱った。すべて最近、厚さ１ｍ程度の盛り土がなされていた。その下に旧表土があり、それ以下は水田層である。

１区　調査区は東西に長いいびつな長方形で、東西32ｍ、西部の幅５ｍ、東部の幅８ｍほどの範囲である。３枚

第21図　玉沢地区条里跡第５次調査区の位置図

の遺構確認面があり、最上層の１面は近世の水田・水路を検出した。中層の２面では古代の水田と水路、最下層の３面からは溝状遺構と小穴群を検出した。

２区　１区の東南部に位置する。東西24m、南北19mほどの三角形の範囲である。２枚の遺構確認面があり、どちらも近世に属す。東北から西南方向に走る水路１条を検出した他、その西側で水田を検出した。

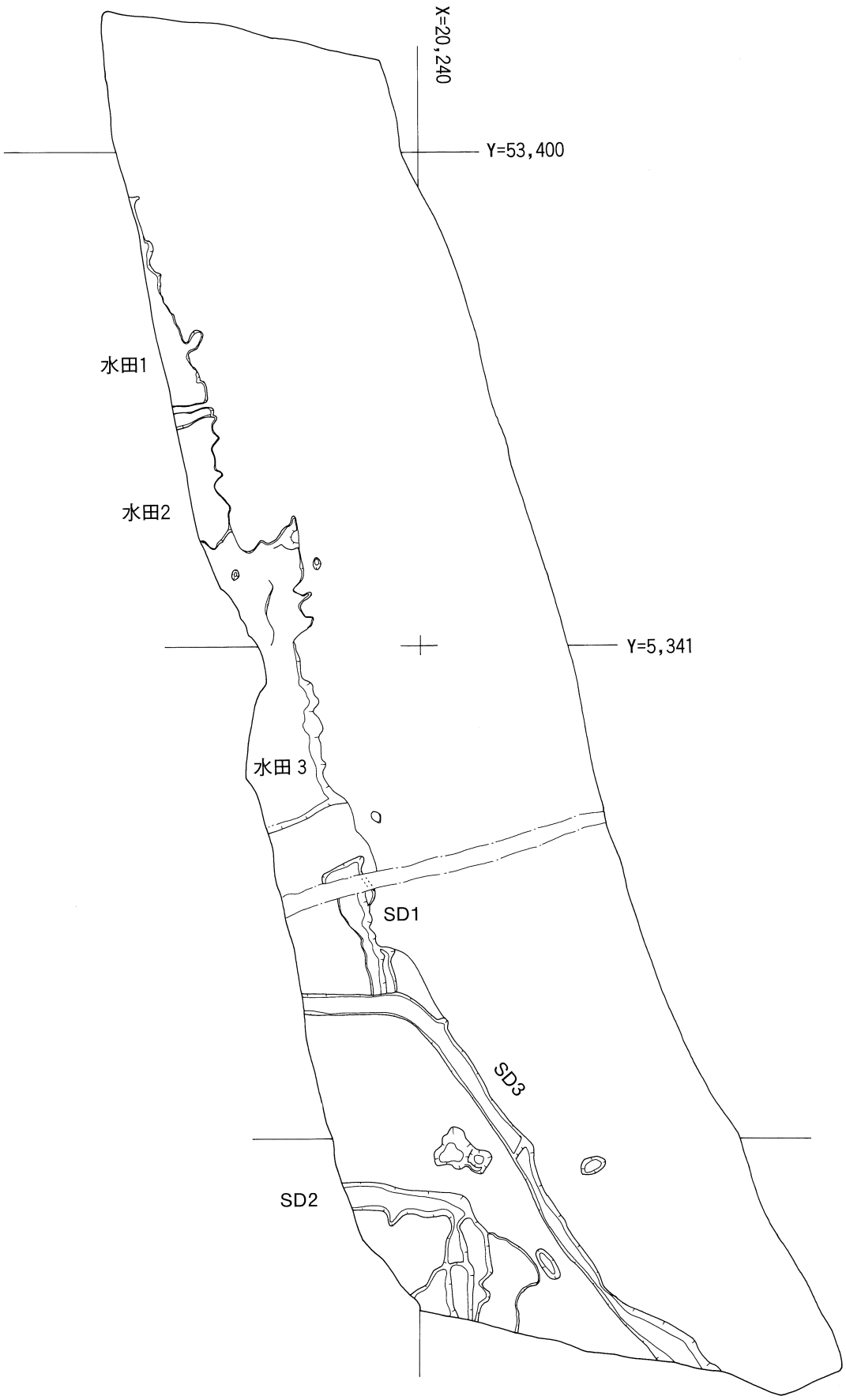
３区　１区の西南部に位置する。東西南北とも17mほどの台形状の範囲である。１枚の遺構確認面があった。東部で近世の水田、西部で近世の土坑５基を検出した。

Ⅲ　調査の記録

１区の調査

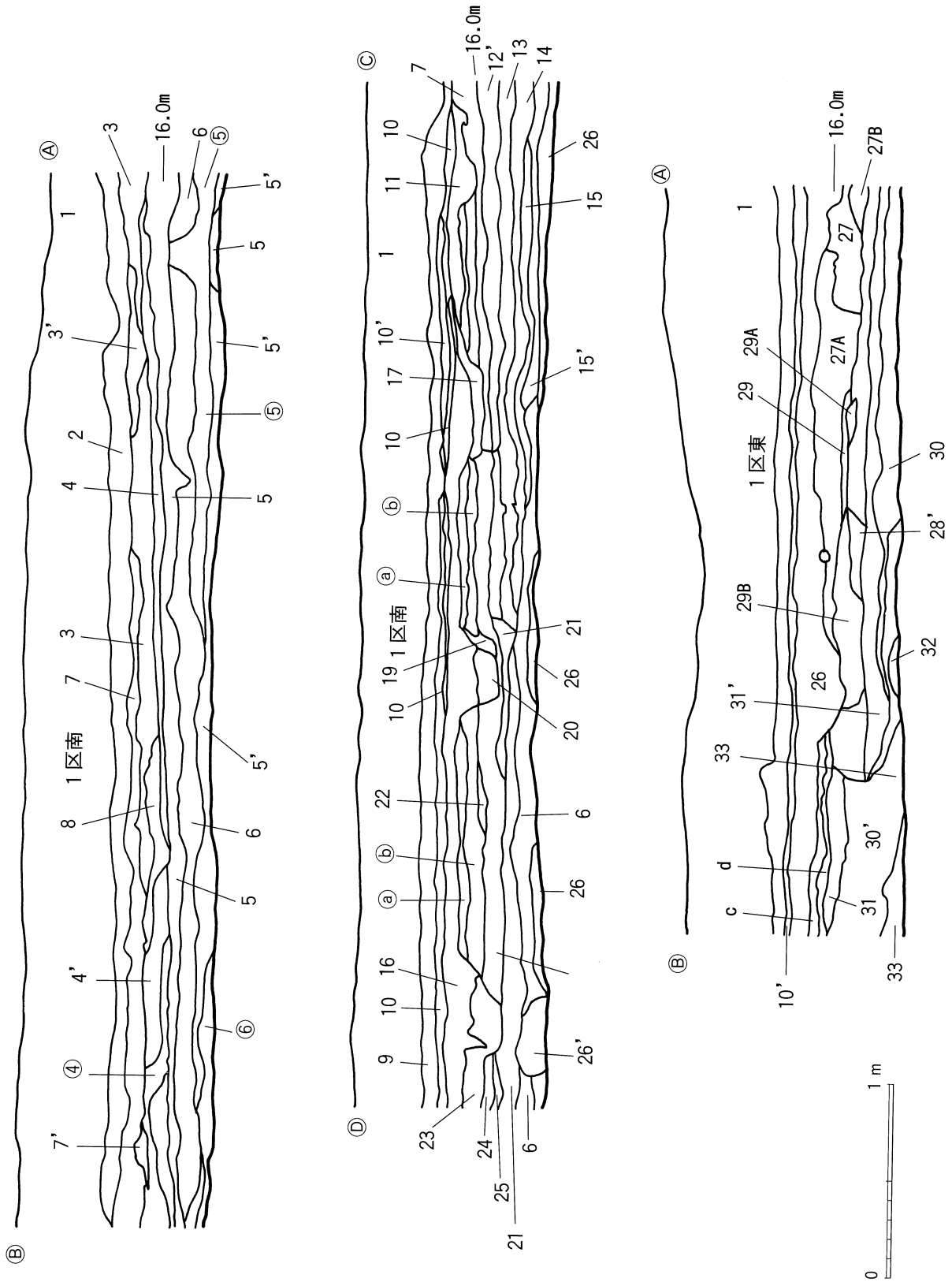
調査区の位置・規模は先に記したとおりである。調査区の南壁と東壁の層序を図示し（第23図）、土層を説明する。１層～26’層は南壁である。

１層：表土。大小の礫・砂を多く含む。客土。２層：黄褐色砂質土。客土。３層：灰褐色土。褐色と黒色の土の



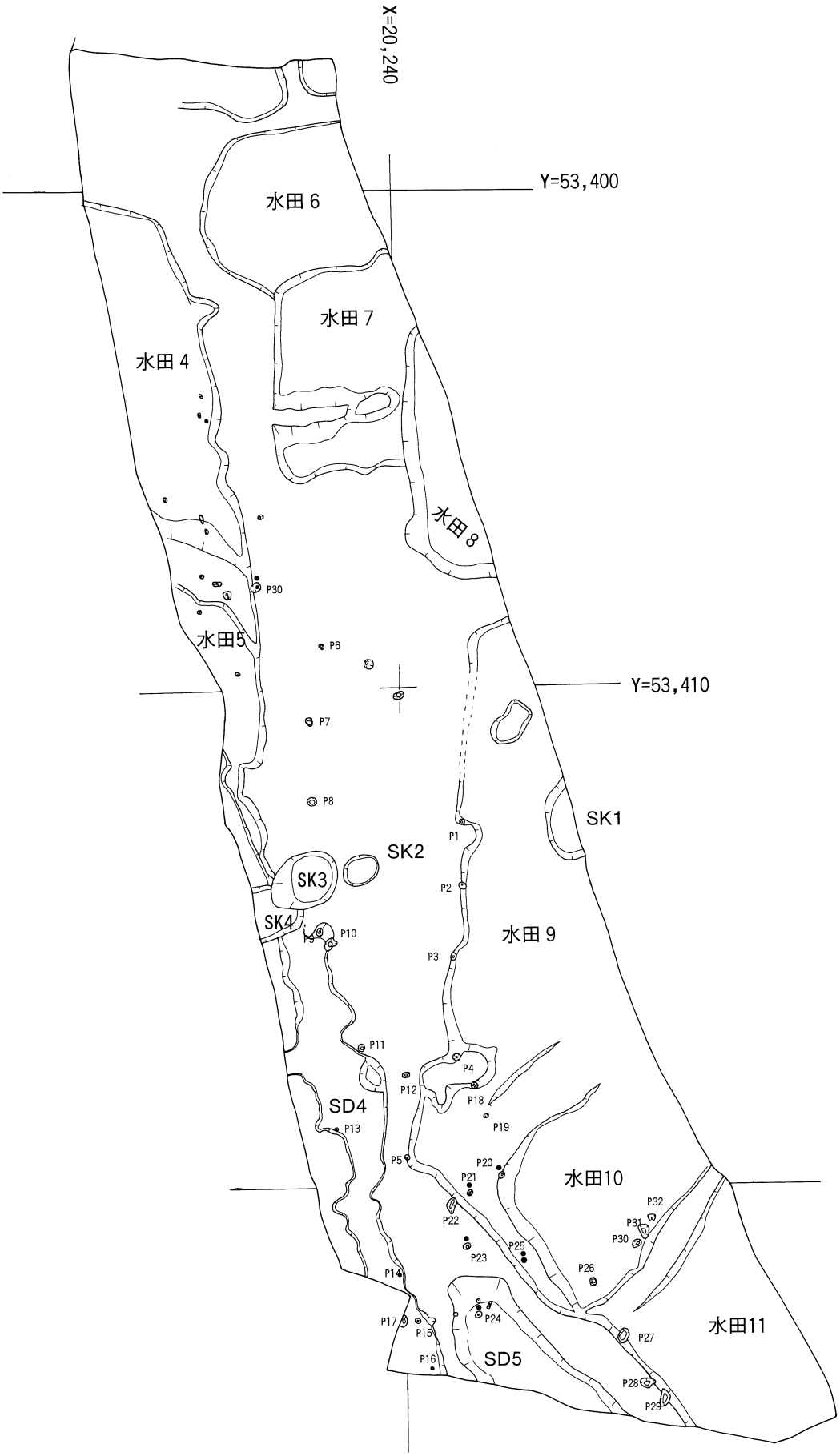
第22図　1区1面

塊を含む。3’層：灰褐色粘質土。上部に黒色土、下部に褐色土を含む。4層：灰色の砂質土。黒土を少し含む。5層：黄褐色粘質土。所々に黒色土の塊を含む。6層：5層よりも濃い黄褐色土。黒土の塊を多く含む。4’層：暗灰褐色土。8層よりも褐色土を多く含む。①層：灰褐色砂質土。多少もろい。7層：暗黄褐色砂質土。8層：暗灰褐色砂質土。硬い。褐色土、黒土を多く含む。8’層：灰褐色砂質土。褐色土、黒土を多く含む。9層：灰色砂質土。もろい。褐色土を含む。



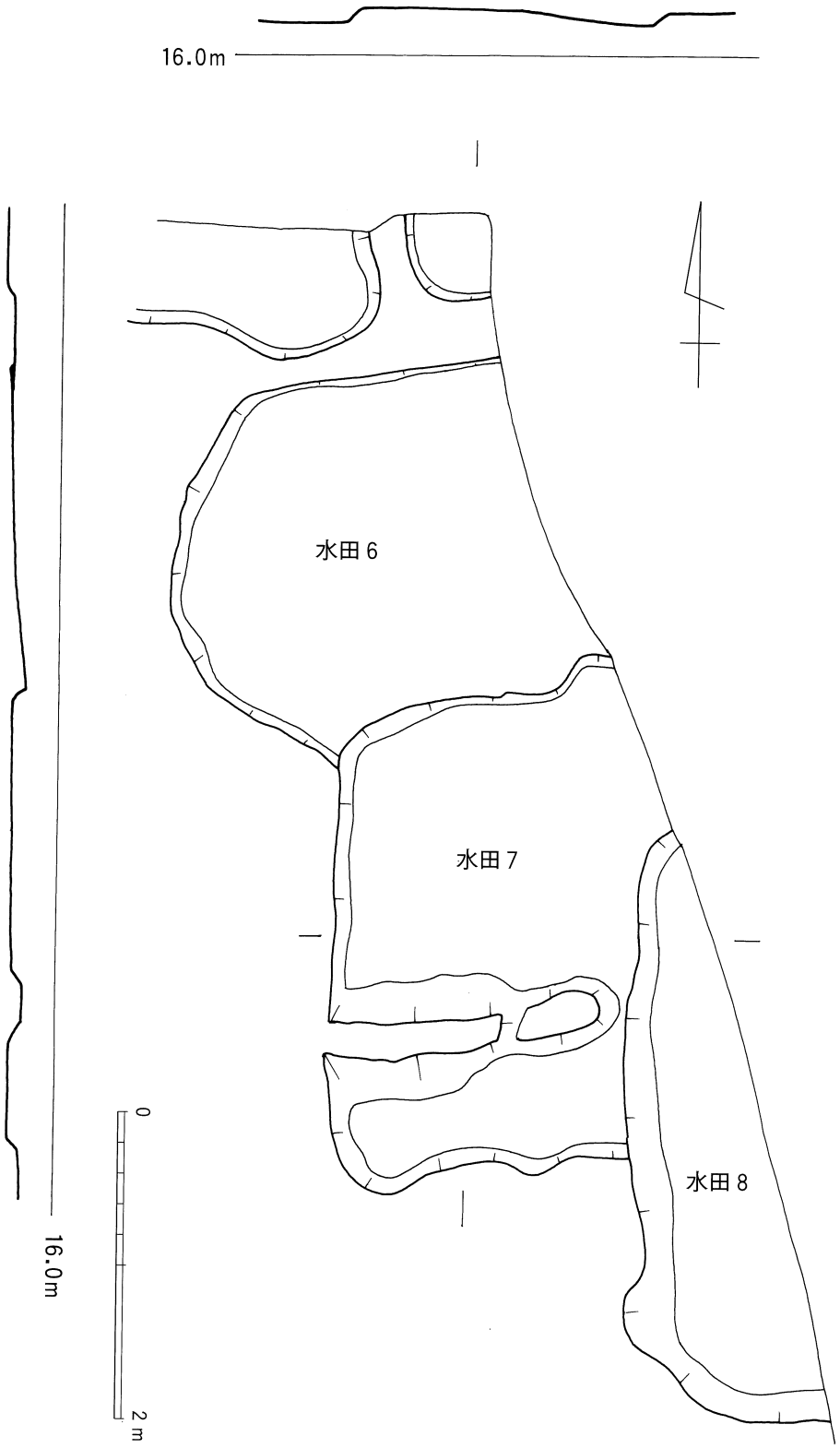
第23図　第５次調査区１区の土層図

10層：黄褐色砂質土。もろい。11層：10層よりもやや暗黄褐色。12層：12’層よりも多く黒土を含む。12’層：灰褐色土。ややもろい。褐色土を含む。13層：灰褐色砂質土。もろい。下部に黒土を含む。上部は砂質。ＳＤ４の埋土。14層：黄褐色砂質土。もろい。15層：粘質の黄褐色土。15’層：14層よりも明るい黄褐色土。16層：茶褐色砂質土。褐色土を含む。17層：灰色砂質土。もろい。17’層：灰褐色土。褐色土を含む。18層：灰褐色土。17’層よりも濃い褐色土を含む。19層：灰褐色土。褐色土を含む。20層：灰色砂質土。もろい。21層：13層よりも濃い灰褐色砂質土。もろい。21’層：暗黄褐色土。６層より黒土の量が少ない。10’層：10層よりも薄い黄褐色砂質土。もろい。②黄褐色土。５Ａ層と比べて青灰色土をほとんど含まない。⑥層：青灰



第24図　１区２面

褐色砂質土。硬い。５Ｂ層：青灰色粘質土。22層：ｂ層よりも暗い灰褐色土。褐色土を含む。23層：灰色砂質土。非常にもろい。24層：茶褐色砂質土。25層：灰褐色砂質土。硬い。26層：灰黄褐色砂質土。26’層：黄褐色土。所々に黄土を含む。　以下は東壁の層序である。26層：灰褐色砂質土。黄褐色土を少し含む。27層：灰色土。もろい。褐色土を少し含む。27Ａ層：灰褐色土。下部は砂質。褐色土を少し含む。27Ｂ層：茶褐色砂質土。28層：明るい茶褐色土。粘質だがもろい。29層：27Ａ層と比べて褐色土を含まず、より濃い灰褐色。29Ａ層：28層と29層の灰褐色土が混合した砂質土。29Ｂ層：茶褐色土。28層よりもやや色は薄い。28’層：29Ｂ層よりも濃く、28層よりも薄い茶褐色土。26’層：青灰色粘質土。硬い。30層：28’層よりも濃い茶褐色土。所々に灰色土を含む。30’層：茶褐色土。黒色土を含む。31層：暗灰褐色砂質土。硬い。31’層：黄褐色土。かなり硬い。32層：灰青色土。粘質は強い。33層：茶褐色砂質土。ｃ層：黄褐色砂質土。ｄ層：灰褐色粘質土。所々に青土と茶褐色土を含む。



第25図　１区２面

1区第1面の遺構（第22図）

南壁層序の6層を掘り下げると標高15.5m付近で遺構検出面となる。南壁沿いに水田1・2・3が西部に、溝状遺構3条（ＳＤ1～3）等を検出した。なお、ＳＤ1の西部を切って南北に走るのは調査用の排水路である。

水田跡（第22図）

水田の床面の標高はそれぞれ、水田1が15.54m前後、水田2が15.47m前後、水田3が15.39m前後であり、西の方が高い。

溝状遺構（第22図）

ＳＤ1は東西に走る長さ2.7m、幅は狭い東部で32cm、深さは10cmの溝である。

ＳＤ2は東南部にある屈折した溝で、50cm前後、深さ15cm～22cm。南から東に流れるようである。

ＳＤ3はＳＤ1が東に接するもので、南壁東部から出て、東壁中央に消えていく。上面幅は約40cm、深さは20cm前後である。検出面の標高は南部、南部とも15.98mである。ＳＤ1と接する部分の床面の差は1cmであり、実際は連続していたかもしれない。

1区第2面の遺構（第24図）

第1面よりも西部で8cm、東部で24cmほど下の面に2番目の遺構確認面があった。1面とほぼ同位置ながらやや北部にも広がって水田跡4・5を、空白部を挟んで北側で水田跡6・7・8を、北東部で水田跡9・10・11を検出した。また、中央部東側に南北方向に土坑5基（ＳＫ1～5）が分布していた。東南部には溝状遺構（ＳＤ1）があり、溝かどうかは疑わしいがＳＤ5としたものを検出した。

水田跡（第24～26図）

水田4の確認面は西部で15.72m、床面の標高は1.66mである。

水田5の確認面は標高15.75mで、須恵器が出土している（第28図2）。

水田6の確認面は15.43mで、床面の標高は15.60mである。平面形は楕円形で調査区内の規模は東西3.4m、南北4mある。

水田7は水田6を切り込んだ形で確認面標高は東南部隅で2.76m、床面は15.65mである。東西約4m、南北3m以上である。内部には南側から土手状の部分が掘り残されている。

水田8は水田7に切り込む形で平面形は隅丸方形のようである。確認面の標高は北東部で15.74m、床面は3.64mである。平面規模は南北は約5.2m、南北方向に1.4m検出した。

水田9としたのは水田8と少し離れて検出した南辺が東西方向にＰ4まである長い水田である。Ｐ1部分にある北側への張り出し部は別の水田との境界の疑いもある。全体の長さは5.6m、西からＰ1までは2.1mである。Ｐ1からＰ4までは約2.2mである。

水田10は水田9との間に上面幅1mの高い部分を挟む。北部では輪郭が消えているが、3.3m×3.3mの方形平面である。水田11は調査区東北部にあり、東南部では標高15.64m、床面は15.60mである。

杭跡（第24・26図）

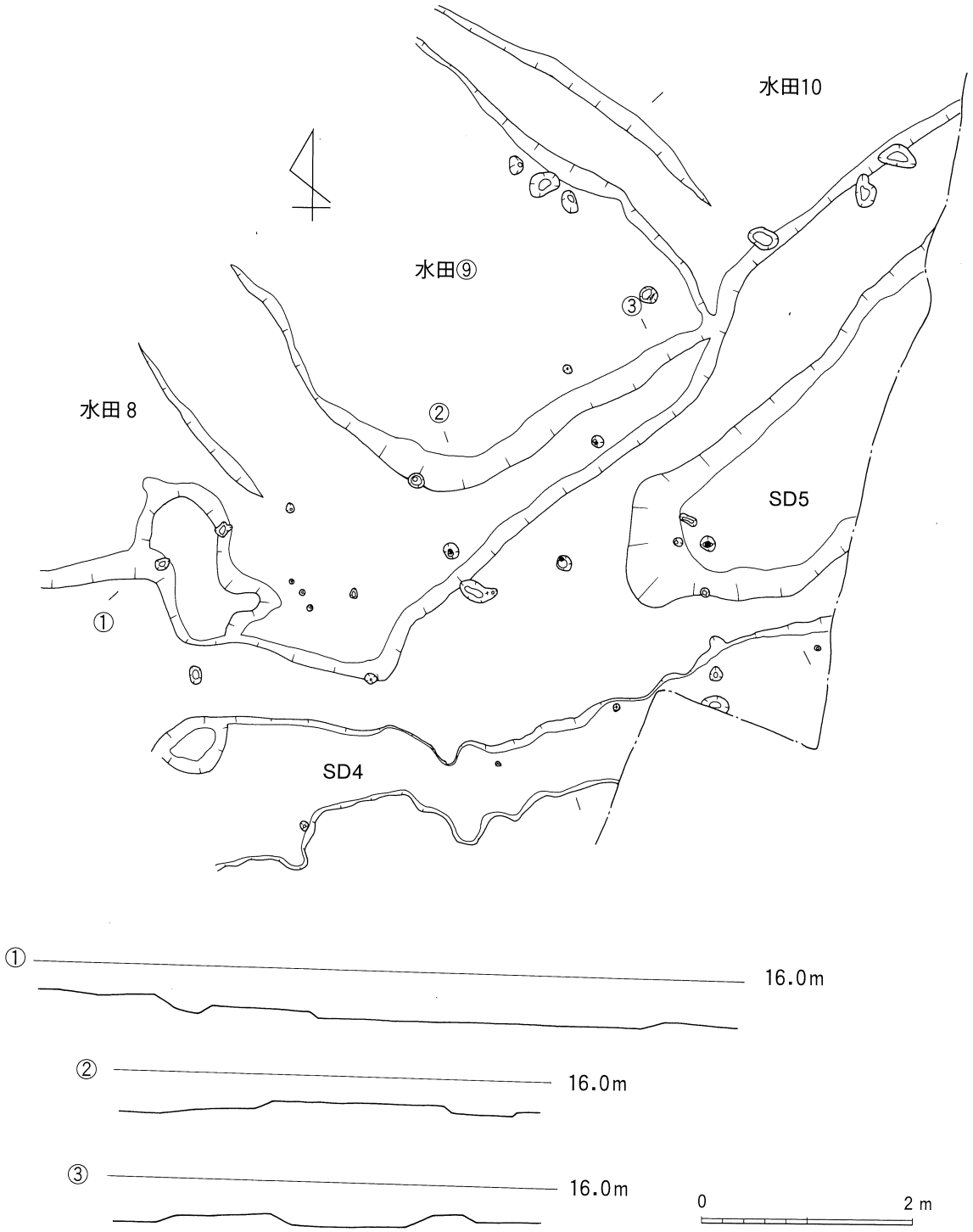
調査区の南西隅と東北隅とを結んだ線の南側で、合計50個の小さい穴を検出した。そのうちのP20・P21・P23・P24・P25・Ｐ30では木の杭が残っていたこと（図中で上部に●を付けたもの）から、大部分の穴は杭のためのものだったと考えられる。配置状態をみると、水田9から水田11までは水田の縁辺部にみられ、水田4と5は水田内部にも入り込んで分布している。また、水田と水田の間の高い部分や溝の縁辺部にも分布している。

土坑（第24・27図）

調査区中央部やや東寄りに5基の土坑を発掘した。

ＳＫ1（第27図）

水田9に重複し、調査区外に延びている。埋土は暗灰褐色の粘質シルトである。平面規模は長さ170cm、幅58cm、深さ30cmである。

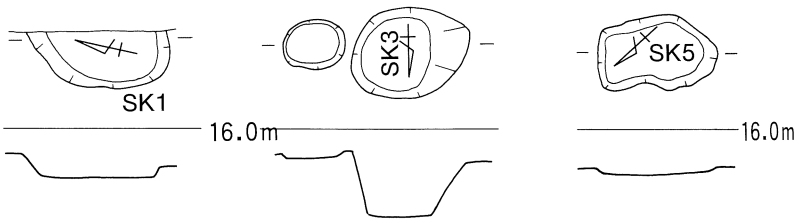


第26図　１区２面

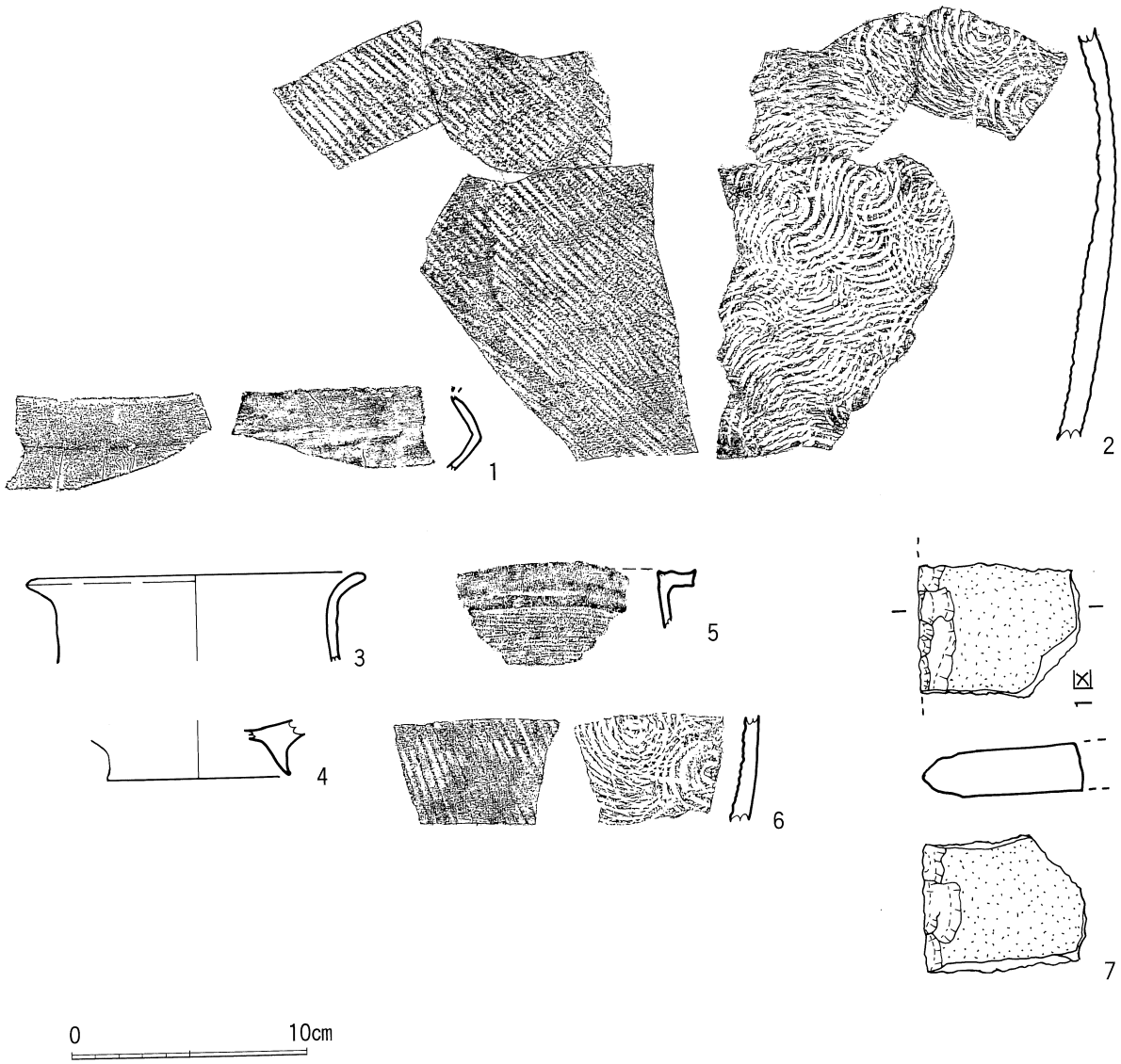
ＳＫ２（第27図）

水田９の南側、高い部分で検出した楕円形の土坑である。平面規模は長さ76cm、幅60cm、深さ７cmの浅い穴である。

ＳＫ３（第27図）



第27図　土抗実測図



第28図　１区出土遺物実測図

ＳＫ２の10cm南側で検出した大型の土坑である。埋土は褐色のシルトで、粘質が強い。平面規模は長さ148cm、幅110cm、深さ79cmである。

ＳＫ４（第24図）

ＳＫ３と重複し、南部で検出した土坑である。幅105cm、深さ15cmである。

ＳＫ５（第27図）

ＳＫ１の西南113cmで検出した浅い土坑である。埋土は灰褐色で緑色を帯びた軟質土である。平面規模は長さ95cm、幅61cm、深さ5.5cmである。

溝状遺構（ＳＤ４・５：第24・26図）

調査区東南部から東部で溝状遺構２条（ＳＤ４・５）を検出した。

ＳＤ４（第26図）

調査区南辺にあって、水田５の東部から始まり、東南隅で消えている。東壁での検出面の標高は15.73m、その部分での床面は15.67mであり、深さ６cmと浅い。西部の検出面は標高15.73mで東部と全く同じである。床面は15.71mで東部よりも４cm高い。したがって、水流は西から東へ流れたのであろう。ＳＤ４からは土師器・須恵器・縄紋時代の石器等が出土した。

ＳＤ５（第26図）

ＳＤ４の北側、水田10と水田11の南側に位置する。東部は東壁に消えている。検出面の標高は東壁際南部で15.72m、床面は15.59mである。遺物は出土していない。

１区の出土遺物（第28図１～７）

ＳＸ－１出土遺物　１は縄紋晩期後葉の浅鉢形土器である。内外面ともよく磨かれた薄手のもので、口縁部はない。２の大部分はＳＸ－１出土であるが、接合した１片はＳＤ－４から出土したものである。須恵器の壺あるいは甕の胴部である。内外面とも叩きの当て具痕が付いている。厚さは最大で11mm、薄い部分で６mmである。

ＳＤ－４出土遺物　３は土師器の甕で、器表は風化のため状態がよくない。なで調整しているらしい。胎土に石英及び他の砂粒を多量に含み、長石も少量混入している。口縁部は大きく外湾し、頸部は垂直に立ち上がる。口径は14.4cmである。４は土師器の杯の底部から高台部である。器面はなで調整している。高台は先端が細くなりつつ外側に張り出す。10世紀頃のものであろう。５は焼成のよい土師質の土器で、胎土に石英砂粒を多量に含む。内面には刷毛目が残る。６は須恵器で、水田５から出土した破片と接合した。７は板状に扁平に割れる石材を利用した石鍬状の打製石器の破片である。縄紋時代後期・晩期の石器である。

１区第３面の遺構（第29図）

第２面の下で第３面の遺構、穴の列四カ所と溝状遺構１条、小型の土坑１基を検出した。西部の穴の列付近では第２面より20cm下、中央の穴の列では23cm程度（標高15.45m）、西から三番目の穴の列では25cm程度下で、溝状遺構の東端では25cm（標高15.38m）で、東に行くにつれて深くなる傾向があった。第３面からは遺物は出土していない。

杭穴列（第29・30図）

どれからも木の杭は確認していないが、穴が細長いので杭を打ち込んだ穴だと判断した。四カ所の杭穴の列に対して１～４に番号を付ける。杭列１～３は平行に並んでおり、共通する方位感覚あるいは区画の規制のもとにあったことが分かる。

杭穴列１（第29図）

調査区西部に位置する３個の小穴が一列に並んだ部分である。直径は20cm程度で、深さは北のものから37cm、36cm、34cmである。南北方向からやや西に頭を振っている。

杭穴列２（第29・30図）

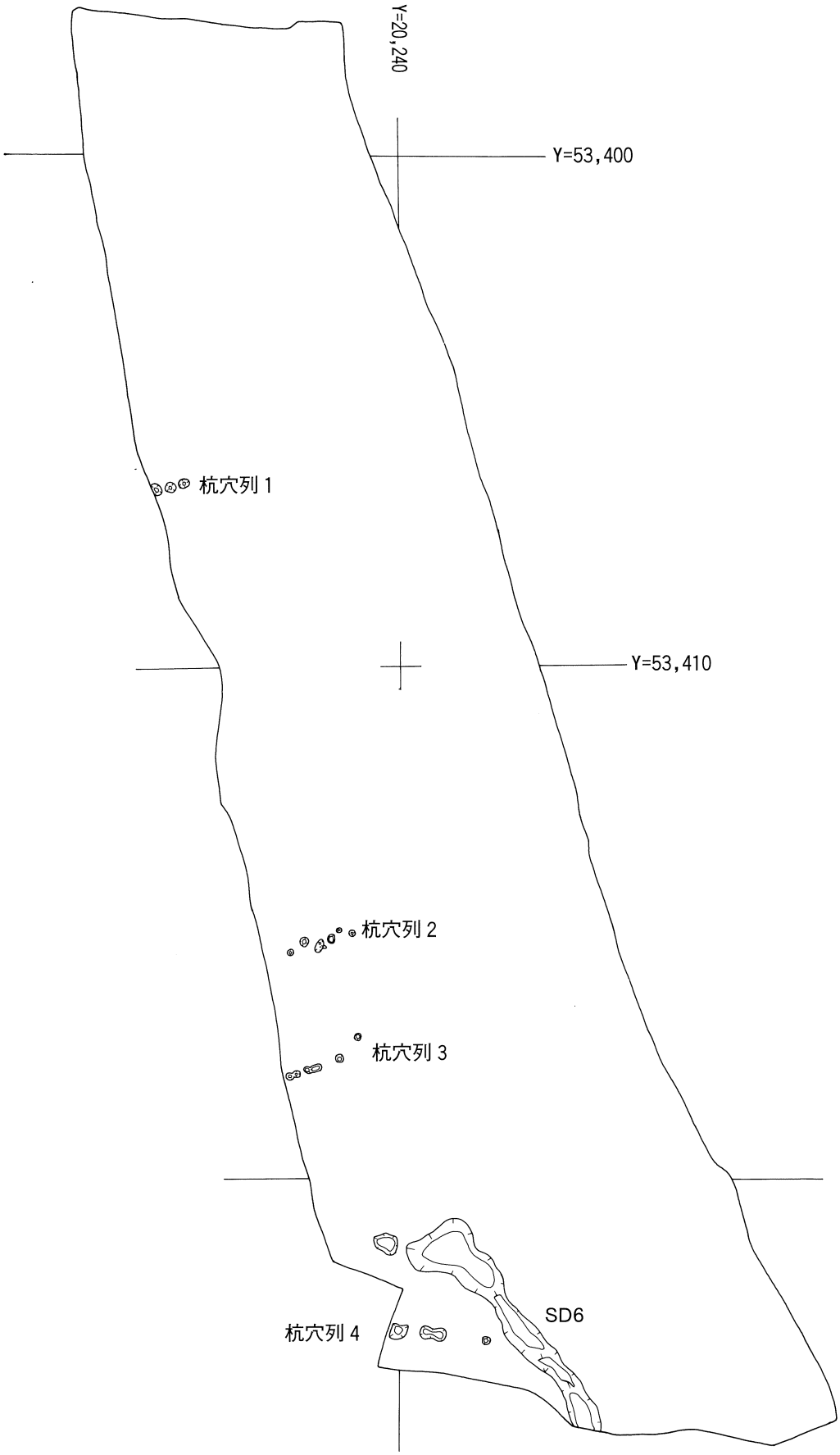
平面的関係では第２面のＳＫ３のあった位置から１mほど東側に、６個の小穴を検出した。杭列１の東側4.5に位置する。全体の長さは135cmである。よくみると３個ずつ二列に並んでいるが、これが本来の形かもしれない。深さは北側のものから27cm、28cm、45cm、38cm、31cm、26cmである。

杭穴列３（第29・30図）　杭列３の東側約2.2mに位置し、全長168cm、杭列３とはほぼ平行である。６個の小

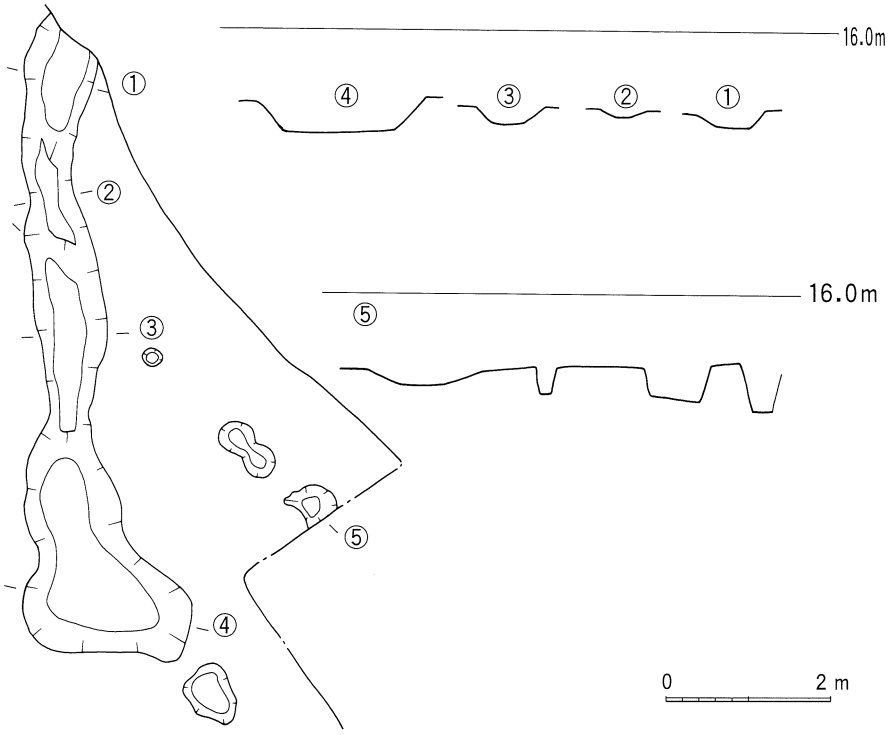
穴からなる。それぞれの深さは北側から26cm、32cm、24cm、14cm、10cmである。北端のものだけ列からはずれている。

杭穴列4（第29・31図）　調査区の東端にある3個の穴の並びである。中央のものは本来、2個の穴であろう。全体の長さは198cmで、穴の深さは北側から21cm、23cm（中央穴の北部）、31cm（中央穴の南部）、40cmである。

溝状遺構（第29図）　調査区東部、杭列4の北側で検出した。北東方向に延びた全長5m14cmの溝状遺構である。埋土は青色のべとべとした粘質土である。この遺構は東部は細長く、床面は3つに



第29図　1区3画



第30図　１区３面の遺構（ＳＤ６と周辺）実測図

分かれ、段差がある。床面の標高は東側から15.24m、15.31m、15.22mであり、中の段がもっとも高い。水を流すだけの目的には不向きな構造である。これに続く西部は不整形で広がり、東部の溝状部よりも深い。床面は15.18mである。

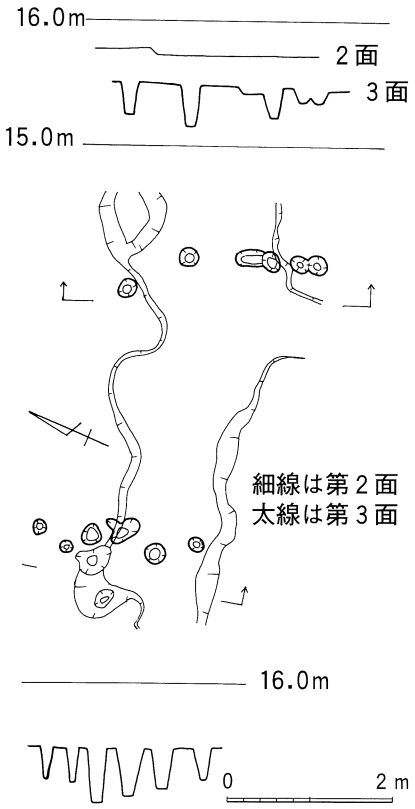
２区の調査

２区は１区の南東部に位置する。２区では近世・中世末の遺構面２枚を検出した。水田に伴うものである。

第33図に層序を示す。西壁・南壁北壁面を図化したものである。

南壁面の層序から記す。

１層～４層まではごく最近の盛土である。



第31図　１区３面東部遺構

１層：表土。赤褐色砂質土。
２層：薄い褐色砂質土。礫を多く含む。
３層：灰色砂質土。硬い。
４層：灰褐色土。茶褐色土を少し含む。
４’層：灰茶褐色土。
５層：暗灰褐色土。茶褐色土を多く含む。
６層：黄灰褐色砂質土。硬い。
６’層：灰褐色土。茶褐色土を少し含む。
７層：薄い黄色土。砂質でもろい。
８層：暗褐色砂質土。硬い。
８’層：灰褐色土。上下に茶褐色土を含む。
９層：暗茶褐色砂質土。
次に西壁面の層序を記す。１～９層は南壁と同じである。
９’層：暗灰褐色土。茶褐色土の塊を所々に含む。
10層：赤茶褐色砂質土。ややもろい。
11層：茶褐色土。黒土の小さい塊を含む。
11’層：灰褐色土。赤褐色土と黒土を少し含む。
12層：茶褐色土。黒土を多量含む。
13層：赤褐色土。
14層：黄暗褐色土。
最後に西壁から北壁面を記す。

第32図　玉沢条里跡第Ⅴ次調査２区１面の遺構配置図

10’層：黄褐色土。黒土を多量に含む。
12’層：灰褐色土。赤褐色土の塊を多量に含む。
13層：暗黄褐色土。黒土を推古氏含む。
15層：灰褐色土。上部に褐色土を少し含む。下部は粘質土。
16層：灰褐色土。上部に褐色土を少し含む。全体に黒土を少し含む。
16’層：15’層よりも褐色土を多く含む。
17層：暗灰褐色土。15’・16’層よりもやや明るい。
18層：灰色土。下部に褐色土を含む。

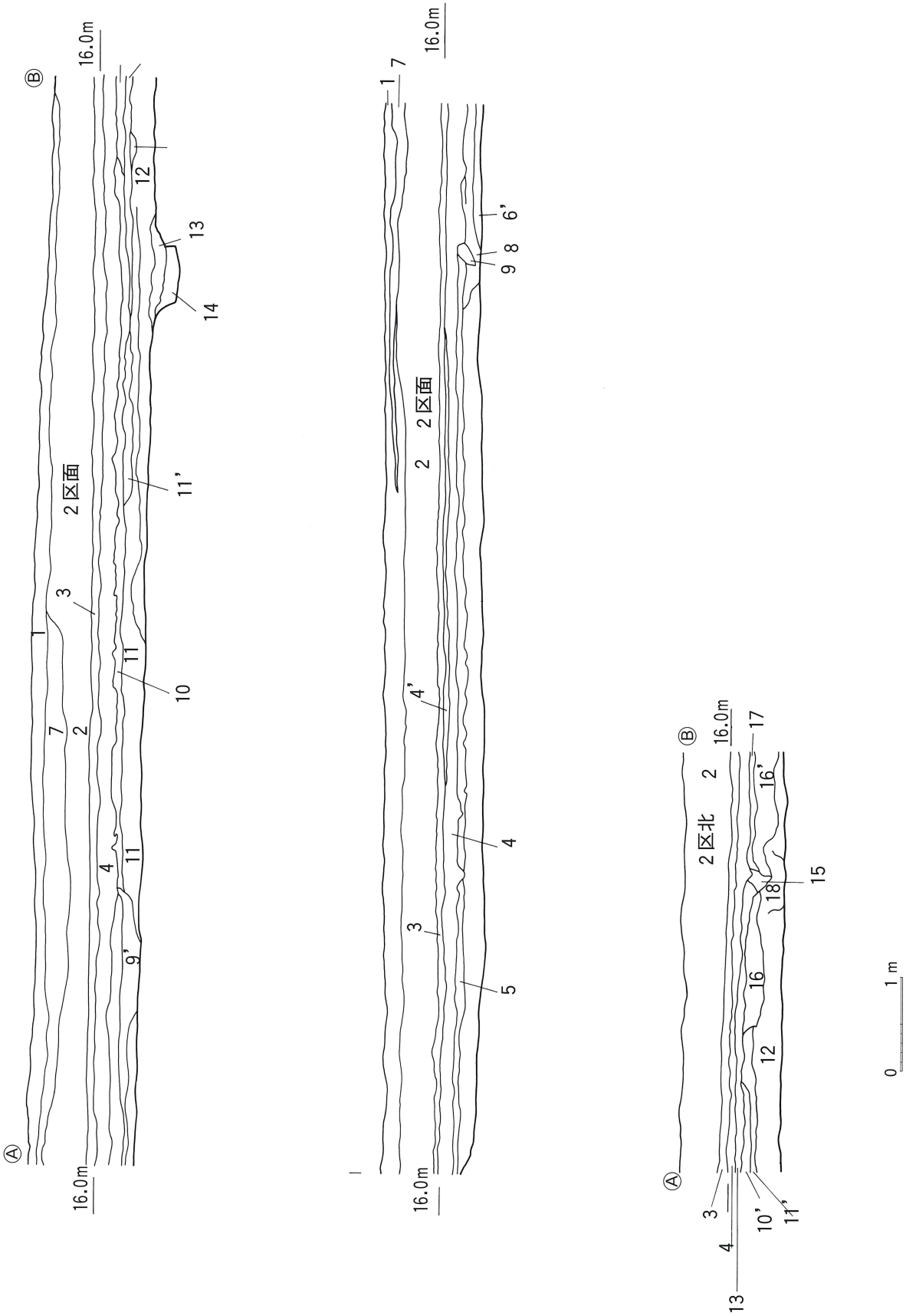
２区第１面の遺構（第22図）

溝状遺構１条と水田と思われる不整形の浅い落ち込みが広がる面を検出した。第１面は近世に属すものである。

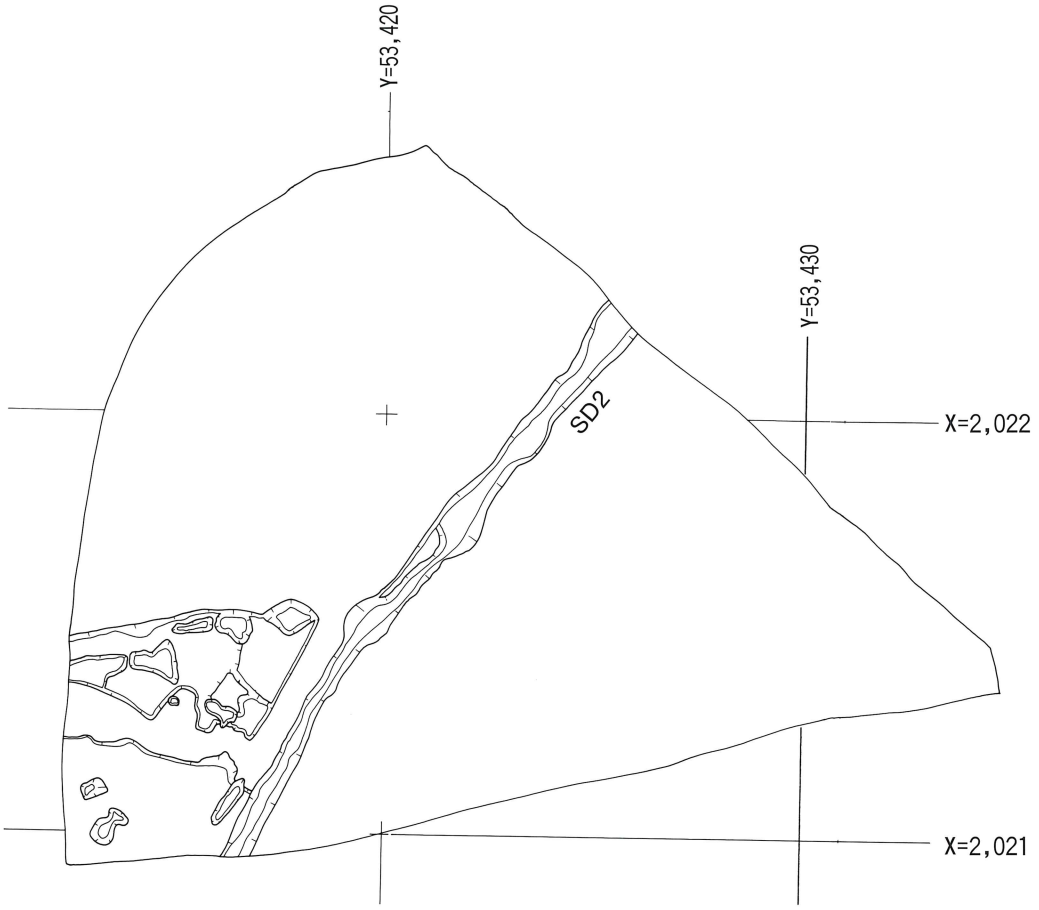
溝状遺構（第32図）

ＳＤ１（第32図）

２区の中央部で、南西から北東に走る溝状遺構１条を検出した。検出面の標高は南部で15.73m、北東部で15.64



第33図　2区土層図

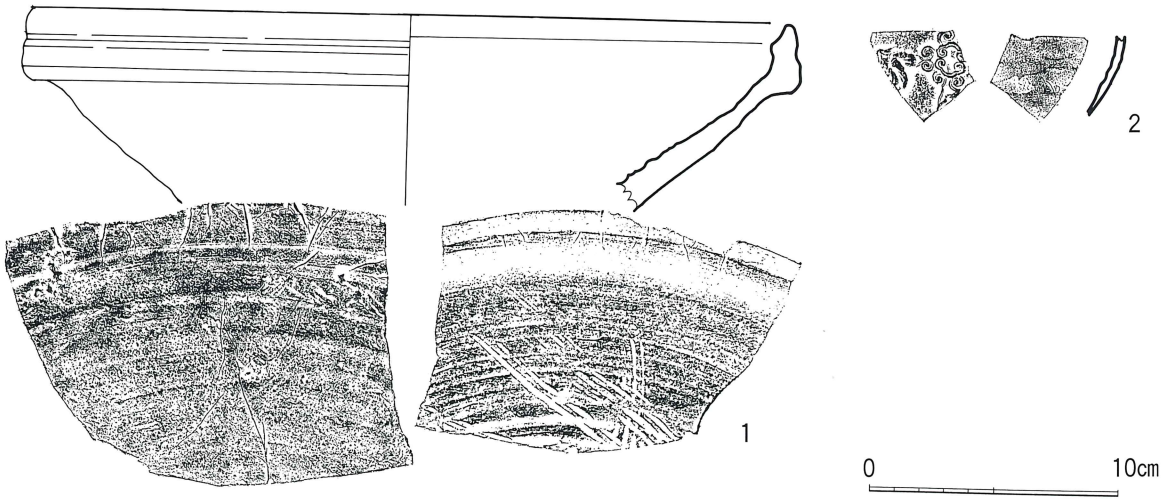


第34図　玉沢条里跡第５次調査２区２面の遺構配置図

ｍである。北壁面の層序図では17層・15層・16’層の落ち込んだ部分にあたる。18層が第２面の溝状遺構である。上面の幅は60cm前後で、深さは22cm前後である。底の標高は北端部分で15.13ｍ、南端部分では15.60ｍであり、水が南西から北東方向に流れるように作られている。溝の東部に杭が並んで出土した。

水田（第32図）

ＳＤ１の西側全体に浅い（深さ数cm）不整形の落ち込みが分布していた。溝状遺構の脇はすべて一段下がって



第35図　２区出土遺物実測図

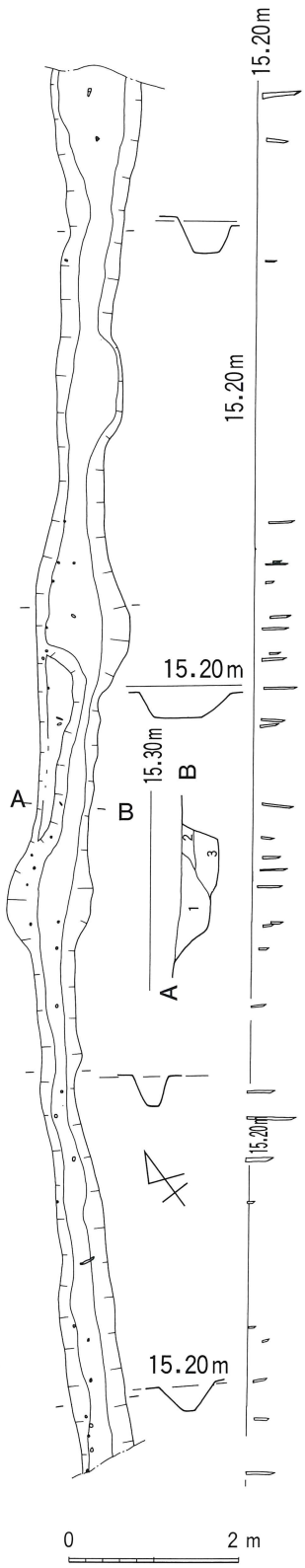
いて、この延長のように西側に延びている。落ち込みは溝状遺構に直交するような方向性をもつ。水田に水を引くための掘り込みであろう。

２区第２面の遺構（第34図）

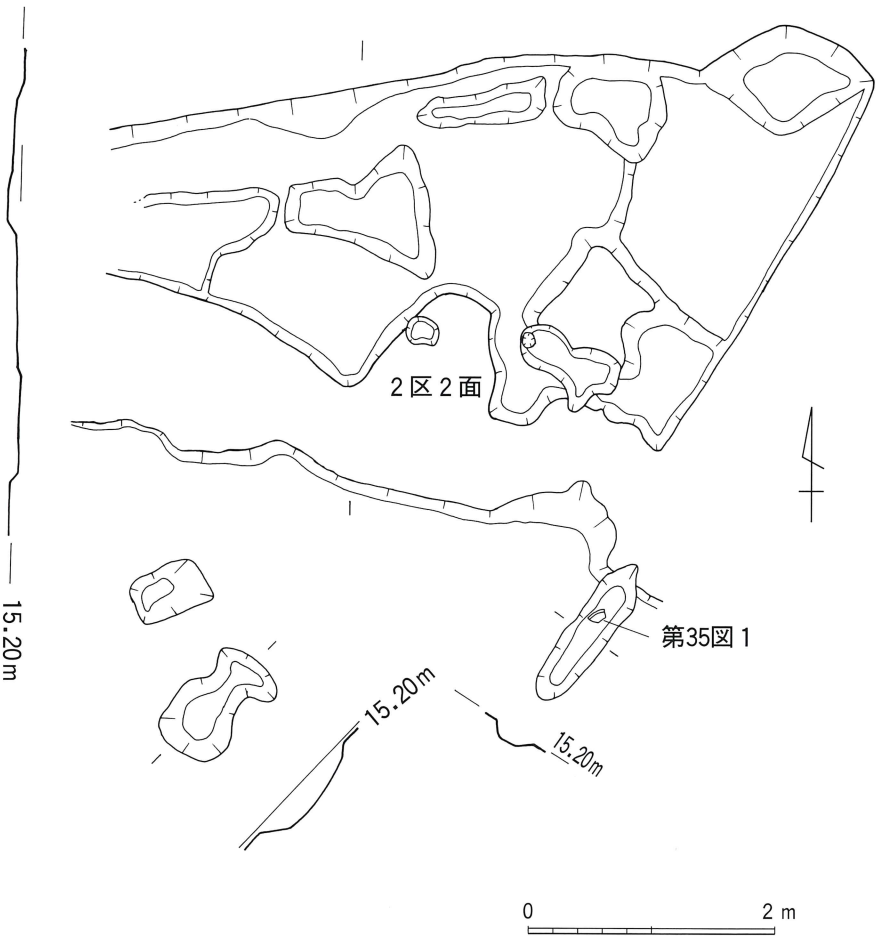
第２面では第１面とほぼ同位置に溝状遺構１条（ＳＤ２）を検出し、南西部で不整形の落ち込み集中部を検出した。第２面の標高は南西部で15.18m、ＳＤ２の北端で15.15mである。第１面との差は、南部で55cm、北部で49cmである。

溝状遺構（ＳＤ２、第34・35図）

２区の中央部で検出した溝状遺構である。第１面の溝状遺構に先行するもので、路線はほとんど重複するが若干西側にずれている。検出面の標高は15.25mである。第１面のＳＤ１よりも48cm下で検出した。しかし、使い続けられてきたものであろうし、発掘では面として下げたので、機械的な数字が出たと理解したい。溝の西部に杭が並んで出土した。第１面では東部に並んでいたのとは異なる点である。36図の土層の説明をしておきたい。１層は明灰黄白色の粘



第36図　溝状遺構



第37図　不整形落ち込み部分図

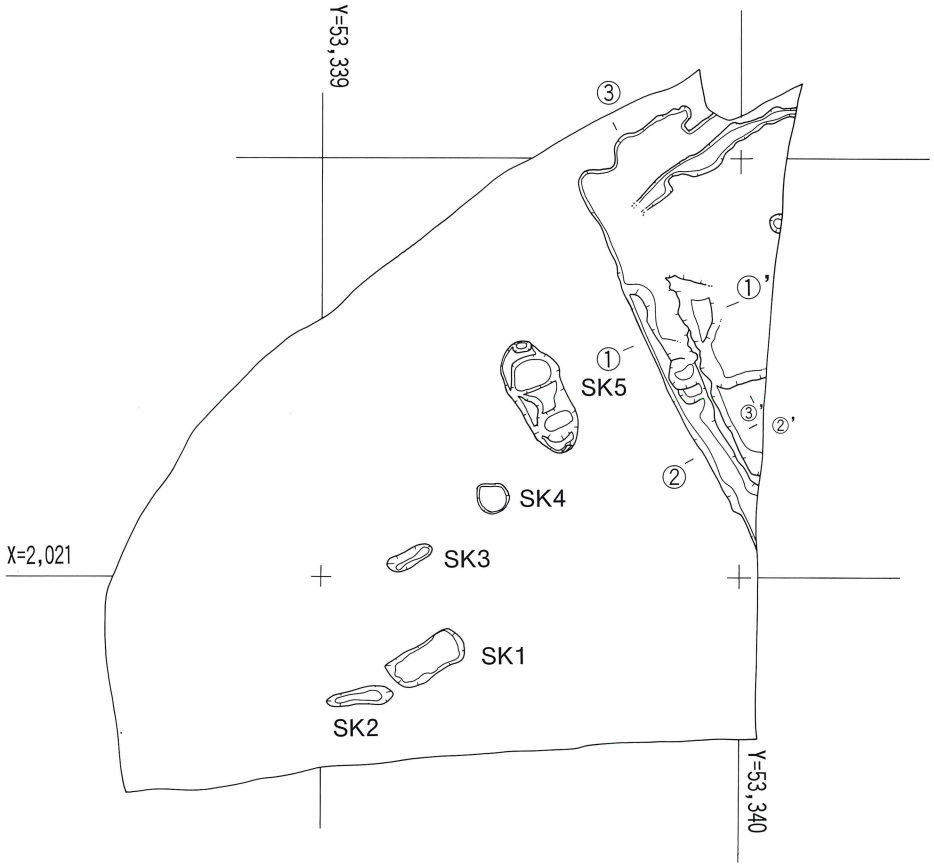
質土。２層は明灰褐色の粘質土。３層は明灰茶褐色の砂質で粘質の土層である。

不整形落ち込み部分（第37図）

調査区の南西部に浅い掘り込みが集まっていた。ＳＤ２に平行する短い溝状の土坑から備前焼きの擂り鉢片が出土した。内面の擂り目の特徴は交差擂り目であり、最近の編年では1570年代以降の中世末期に位置づけられるものである。この破片は比較的大きいので、近世の遺構に紛れ込んだとは考えにくく、この遺構、ひいてはこの第２面は中世末期に位置づけられるのではないかと考える。

２区の出土遺物（第35図１・２）

ＳＫ－１出土遺物　１は２区南西部の細長い土坑から出土した備前焼きの擂り鉢である。口縁部は比較的に短く、口縁部の下向きに水平になった部分には重ね焼きの痕跡が残る。内面には擂り目が交差状態で施されている。口径は31.0cmである。1570年代以降の中世末のものである。２は２区東端部の近世水田層から出土した陶器片である。表面には鉄釉がかかり、型押しの紋様が浮き出ている。

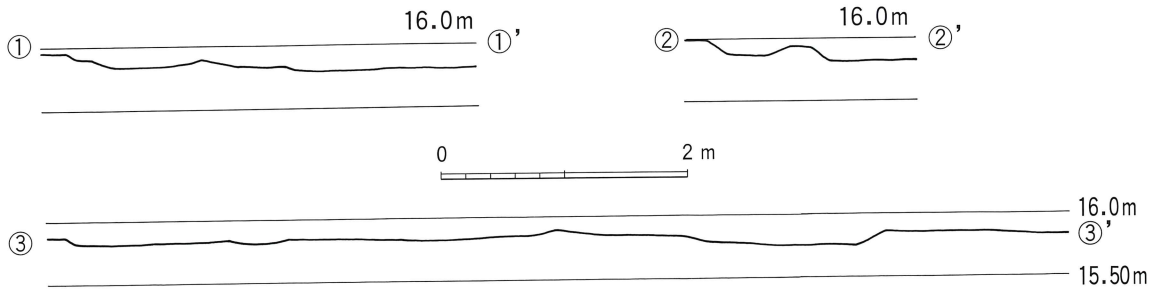


第38図　３区検出遺構配置図

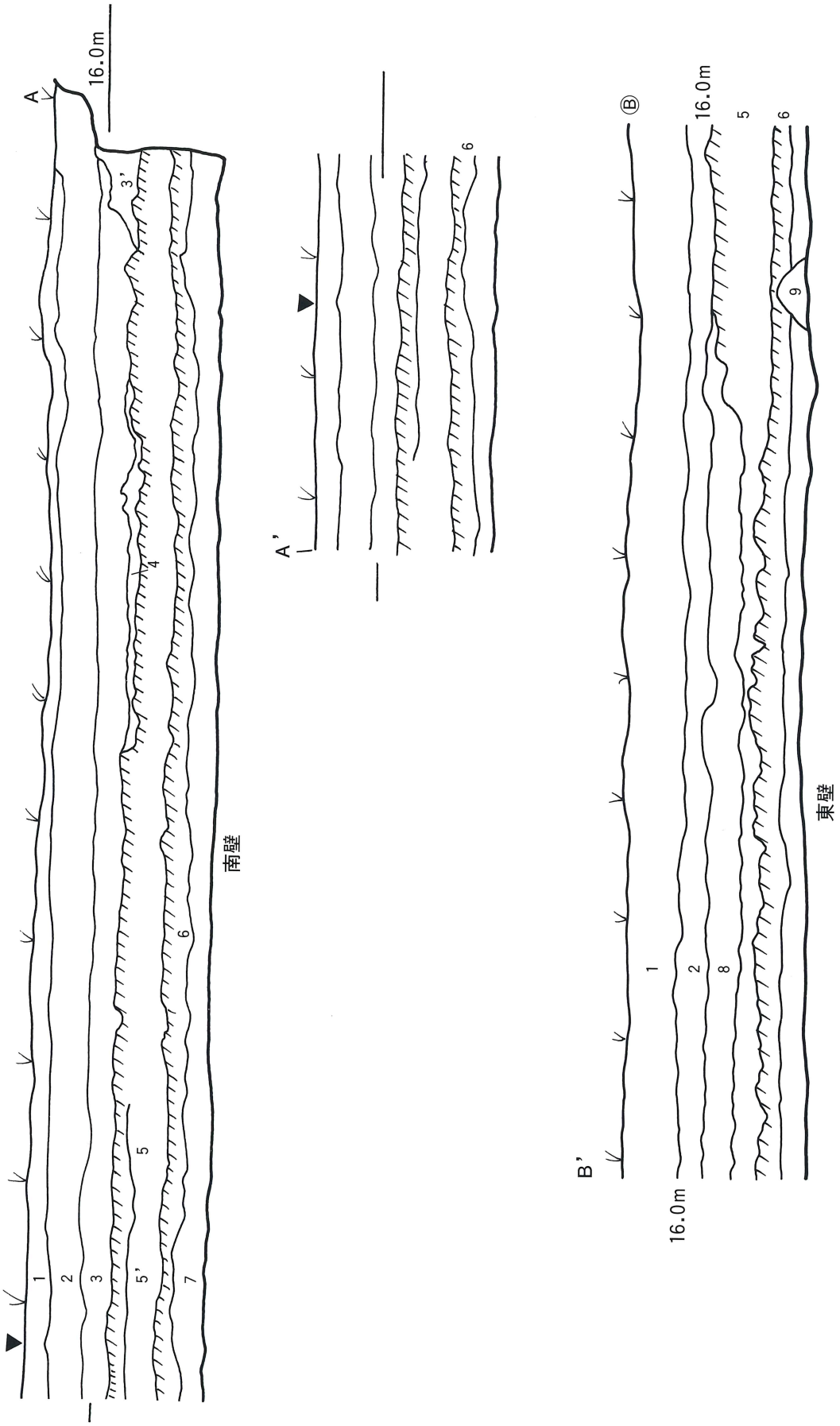
３区の調査

３区は調査区内では南西部に位置する。二枚の遺構確認面があった。北東部に水田を検出し、水田のない西部に５基の土坑を検出した。層序として南壁の堆積状態を説明する。

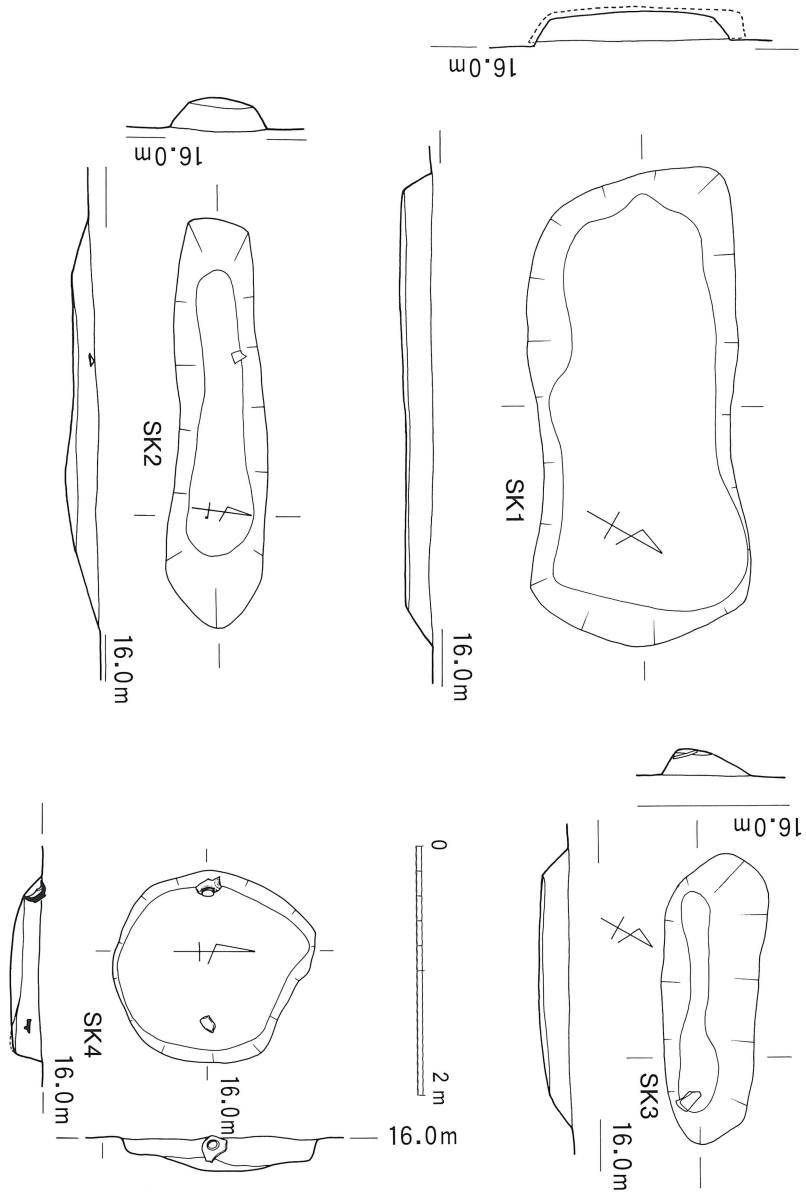
１層：表土。２層：客土。褐色の砂質土。３層：旧表土。ねずみ色土層。３’層：酸化した黒茶色の土の塊を含んだ３層。４層：５層の塊が20%ほど混ざる。５層：茶褐色土。黒茶色の酸化した土の塊が上部に多い。



第39図　３区水田部分の断面図



第40図　3区土層図



第41図　３区ＳＫ１～ＳＫ４の実測図

5’層：茶褐色土。

6層：茶褐色土。酸化した黒茶色の土の塊が非常に多い。

7層：灰褐色土。軟らかい。

5層と6層の上面は旧水田の床である。

遺構

水田（第38図）

水田の西辺は直線的に北東から南東に延びている。調査区内では全長約９ｍ、東西に最大幅約６ｍを検出した。検出面の標高は水田南部で15.97ｍ、北部で15.87ｍである。２区の第１面よりも20cmほど高い位置に展開することになる。

土坑（第41・42図）

ＳＫ１（第41図）

調査区南部の中央にある。不整な長方形で長さ380cm、幅176cm、深さ15cmである。遺物は出土していない。検出面の標高は15.98ｍである。

ＳＫ２（第41図）

ＳＫ１の南西部にある楕円形の土坑である。検出面の標高は15.98ｍ。長さ327cm、幅82cm、深さ26cmで、染付け椀片が１点出土した（第26図２）。

ＳＫ３（第43図）

ＳＫ１の北に位置する楕円形の土坑である。検出面の標高は15.87ｍで、長さは132cm、幅は82cm、深さは24cmである。素焼き土器片が出土した。

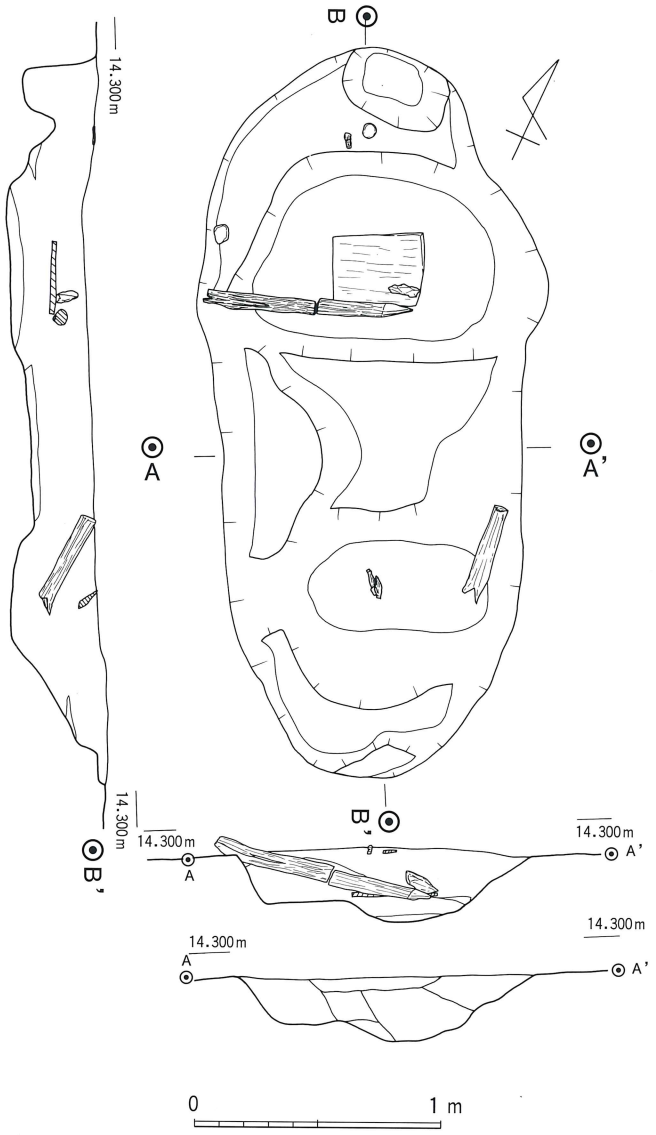
ＳＫ４（第41図）

ＳＫ３の北東に位置する円形の土坑である。検出面の標高は16.00ｍ、規模は東西153cm、南北162cm、深さ13cmで、染付けが２点出土した（第43図１・３）。ＳＫ５（第42図）

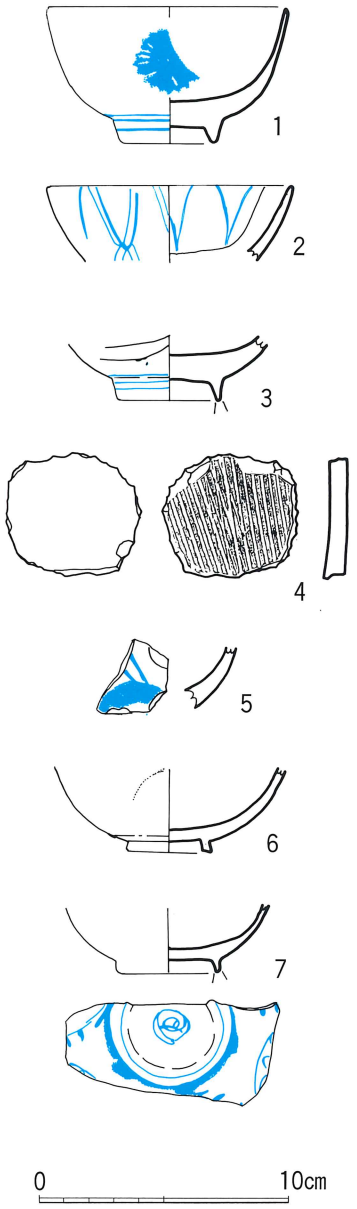
これだけは他の遺構よりも下で確認した。ただし、上の面で不鮮明な部分としてとらえていた箇所であり、本来上部で確認できたのかもしれない。水田とＳＫ４との中間に位置する比較的大型の楕円形の土坑である。検出標高は北部で14.22ｍで、長さ583ｍ、幅280cmである。底は中央部が高く、南北が深い。北端にも穴がある。北部の深い部分からは板材・先を尖らせた棒とが出土し、付近から擂り鉢加工品も出土した。南部では一端を切った棒が出土した。便所の可能性がある。

３区の出土遺物（第43図１～８）

ＳＫ－２出土遺物　２は染付け椀。二本単位の網目紋が描かれている。口径9.8cm。１８世紀前葉から中頃の



第42図　３区ＳＫ５（２面）実測図



第43図　排土採集遺物実測図

もの。

ＳＫ－４出土遺物　１はコンニャク印判の染付け椀。印判の一部は欠損している。四カ所にあるらしい。口径9.7cm、高台3.9径cm、器高5.4cm。18世紀前葉から中頃のもの。３は染付け椀。高台径4.2cm。畳付きは無釉。

ＳＫ－５出土遺物　４は擂り鉢の破片を打ち欠いて円盤状に整形したものである。5.4cm×4.9cmで厚さは９mmから７mm。

５・６・７は包含層出土で、５は染付け磁器椀、梅樹紋か。６は京焼き風陶器椀。外面には高台より少し上まで白い釉が掛かり、それ以下にはない。内面は全体に施釉。外面に赤色の曲線が描かれている。高台は回転削り出しである。高台径3.5cm。

第５次調査区排土採集の遺物（第43図７）

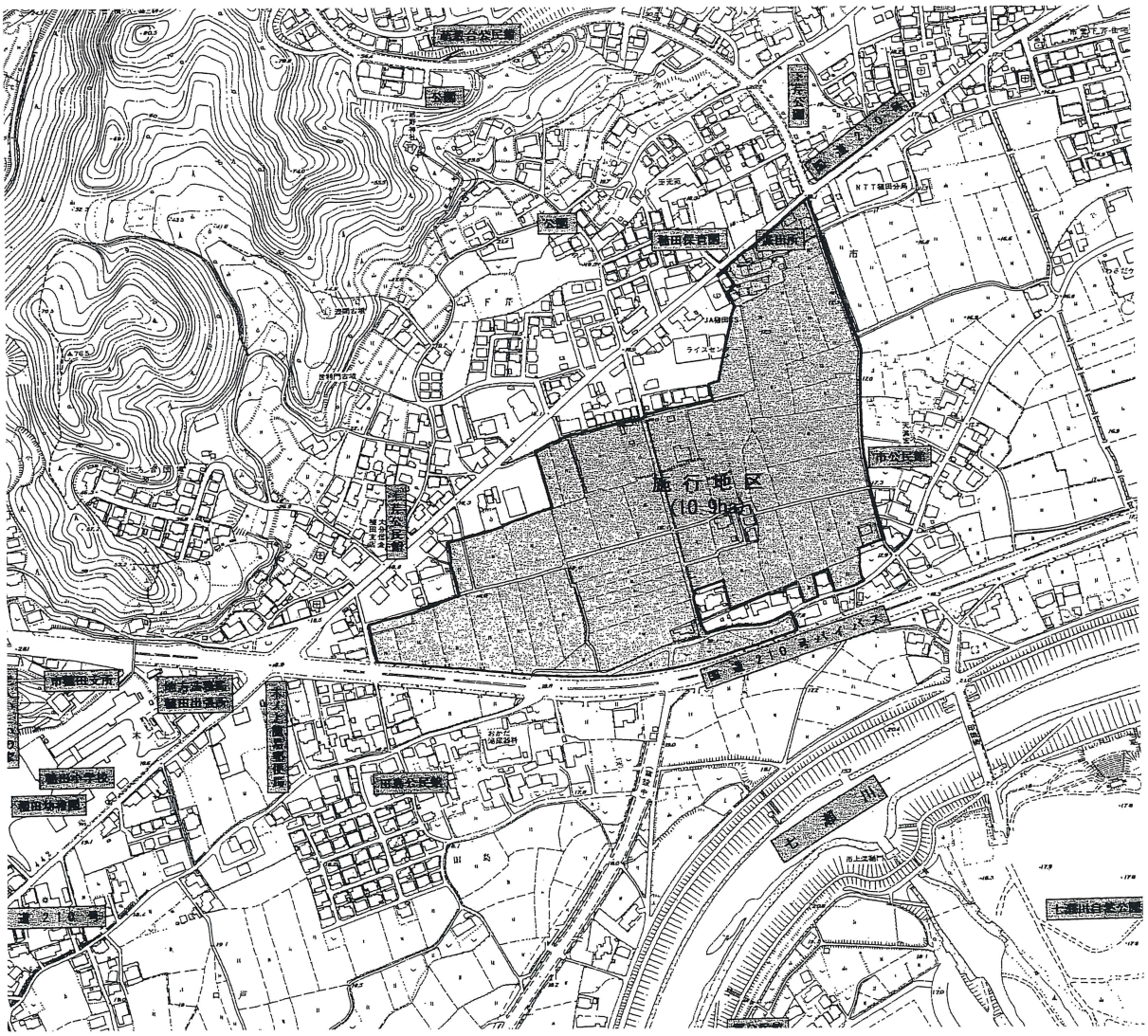
７は染付け梅樹紋椀。外底面に渦福。畳付きは釉を剝いでいる。高台径4.1cm。18世紀前半。

ま と め

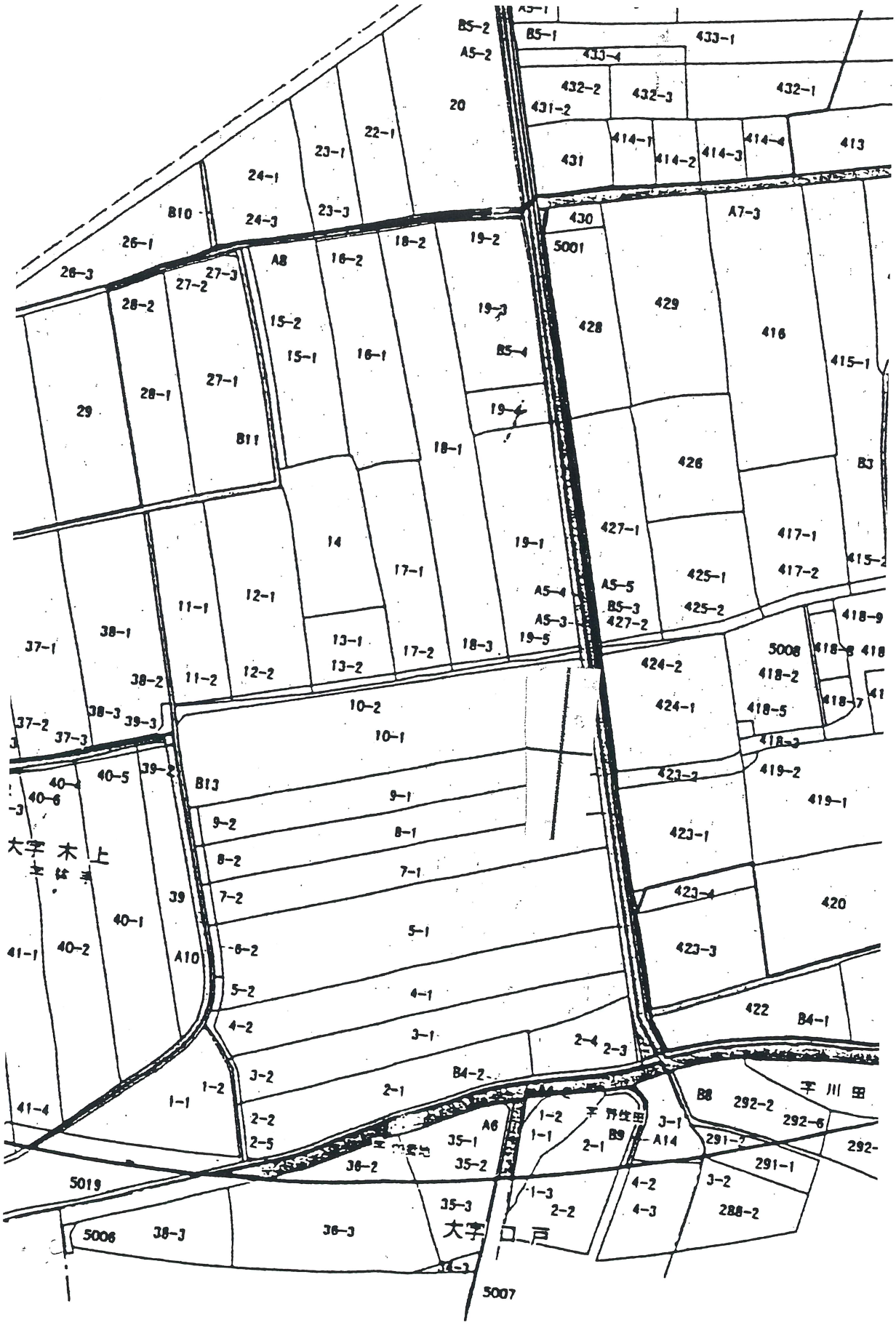
玉沢地区条里跡では大分市教育委員会による発掘調査で、弥生時代の小区画水田、古墳時代・古代の水田が検出されている（永松2004）。場所は今回調査した第５次調査区の北東数百ｍの所である。また、今回の第５次調査区から北東に2.3kmの六反田地区では古墳時代の水路が見つかっている。このように本条里跡では条里施行の前段階から水田耕作地としての利用が行われていたのであるが、六反田地区では時期不明だが条里地割りと平行な溝が９条検出されたと報告されている。報告書の図面によれば方位は北から西に13度振れており、一致している。

トキハ稙田タウンの工事に伴い実施した玉沢地区条里跡第２次調査では、条里地割りは中世のものだとする結果が出された。

第５次調査区付近に想定される条里制の地割りは調査区内を東西方向に貫通する道路が条里の一区画の南辺に該当しそうであり、10世紀代の遺物が出土した１区のＳＤ４の方向とだいたい一致している。ＳＤ４は直線的ではないが、あえて計測すれば東西方向から西側が南に18度振れていると言うことができる。13度ではない。水田



第44図　水田区画のわかる地図



第45図　前図の拡大図

4と5の北辺は条里に近い方位をもっている。

1区では古代と推定する水田跡を8枚検出した。一方、2区・3区では古代の遺構・遺物は全く出土しなかった。2区の溝ＳＤ１・ＳＤ２は中世末と近世の所産である。近年に測量された調査地区周辺の地積図（第28図）を参考にすると2区は2-1と1-2に該当し、両者の境界線が2区のＳＤ１（近世）あるいはＳＤ２（中世末）と重なることが分かる。3区は35-1と35-2に該当する。3区の東部で検出した水田西辺は、35の水田と西側の36の水田との境界に平行に走っていることが分かる。1区・2区の北側を東西に通る道路から南は、測量図を眺めてみると乱雑な区画しかなされておらず、条里の範囲外のように見える。発掘調査でも2区が中世末から、3区が近世から水田化されたことが判明している。

2面では50個の小さい穴を検出した。通常、水路内にみられる場合が多いが、玉沢地区条里跡第5次調査では水田の縁辺部に配置された状態が認められた。いくつかの穴に木の杭が残っていたので、本来は杭が設置されていたものと思われる。杭の目的としては水田への土砂の流入を防ぐ土留めか、現在でもちょっとした山間部には一般的に存在するイノシシ除けの垣を作った痕跡等が考えられる。

〈引用・参考文献〉

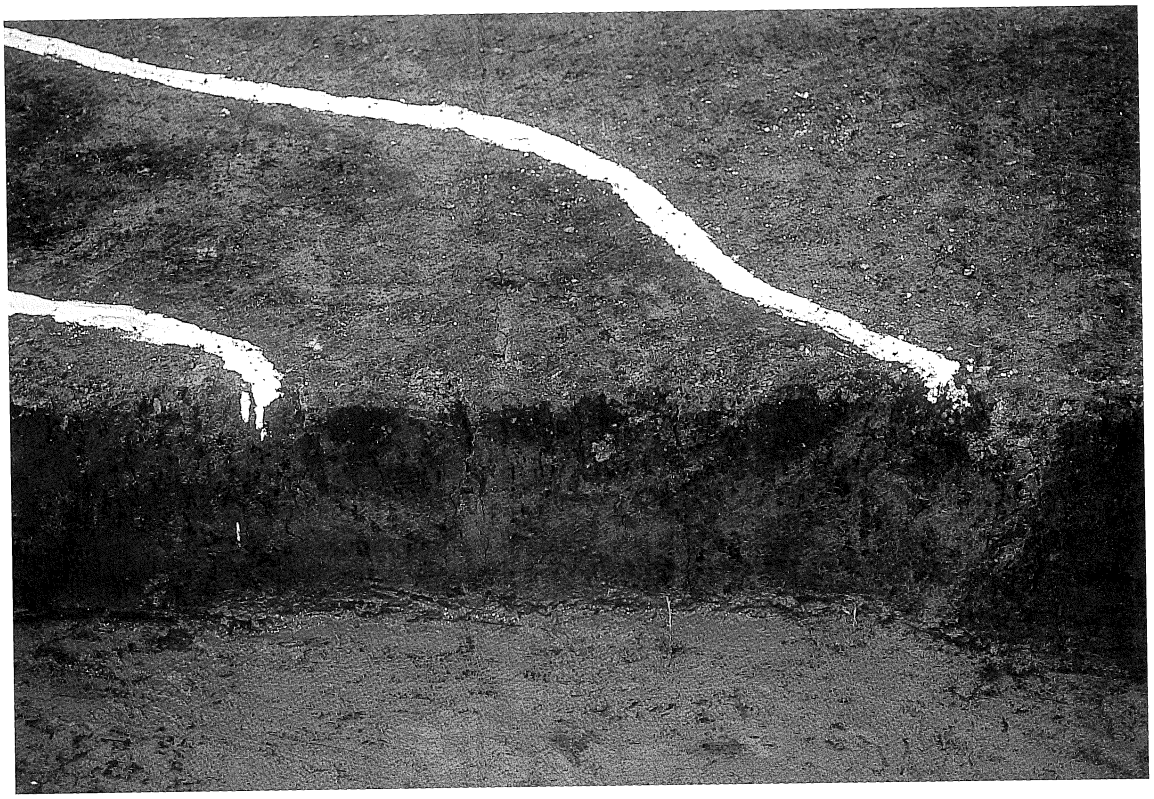
江田豊1999「玉沢地区条里跡遺跡群」九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（12）大分県教育委員会
後藤典幸・荻幸二・遠部慎2002「玉沢地区条里跡第2次発掘調査報告書」大分市教育委員会
永松正大2004「大分市埋蔵文化財年報2003年度版」大分市教育委員会

写真図版

第４図調査遺跡全景

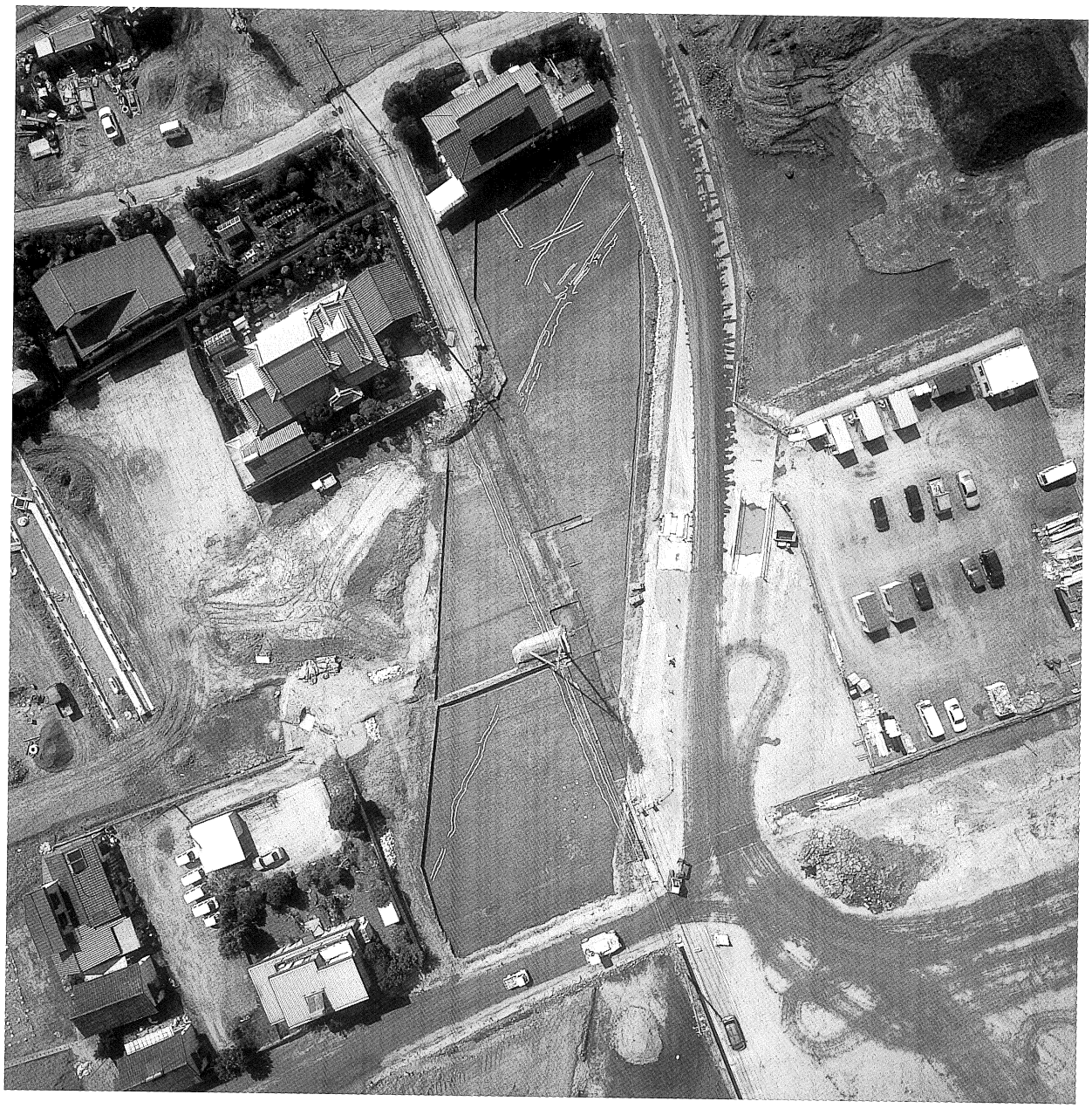
第４次調査１区全景

第４次調査１区畦畔状遺構

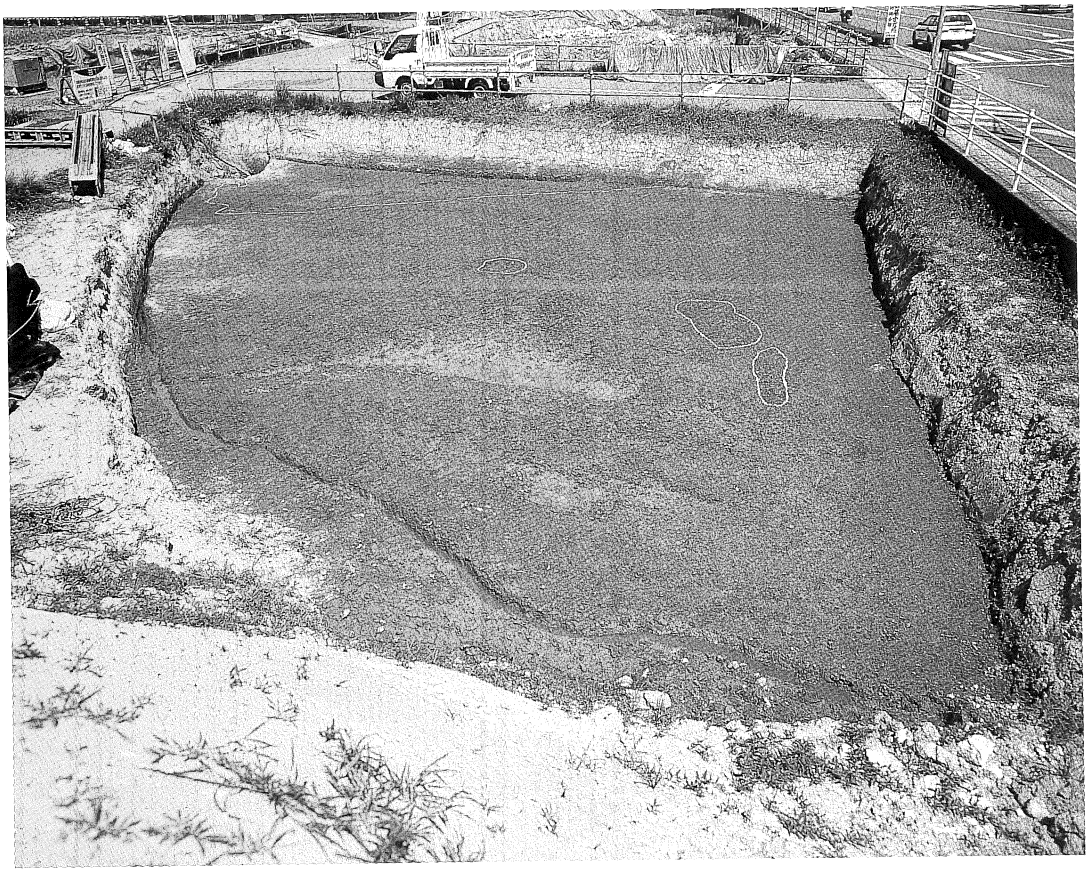


第４次調査畦畔状遺構

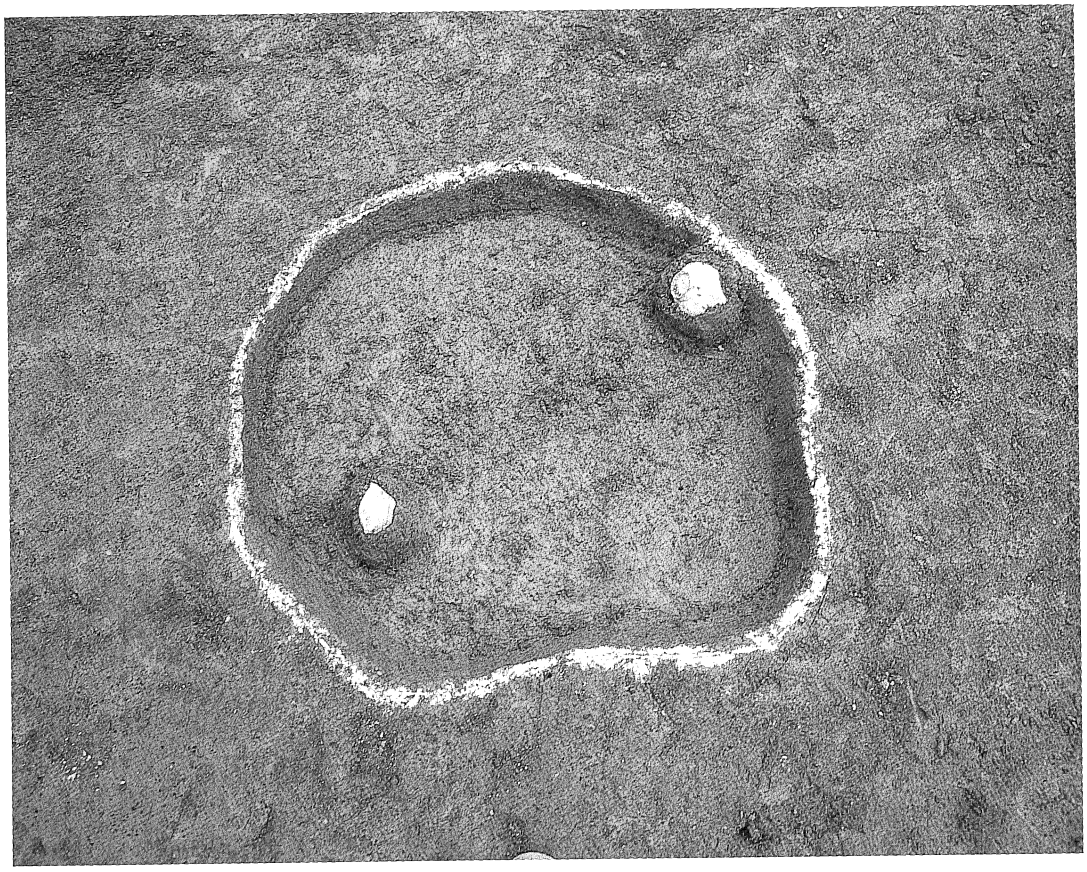
第４次調査Ⅰ区東壁図層



第４次調査Ⅱ～Ⅳ区全景

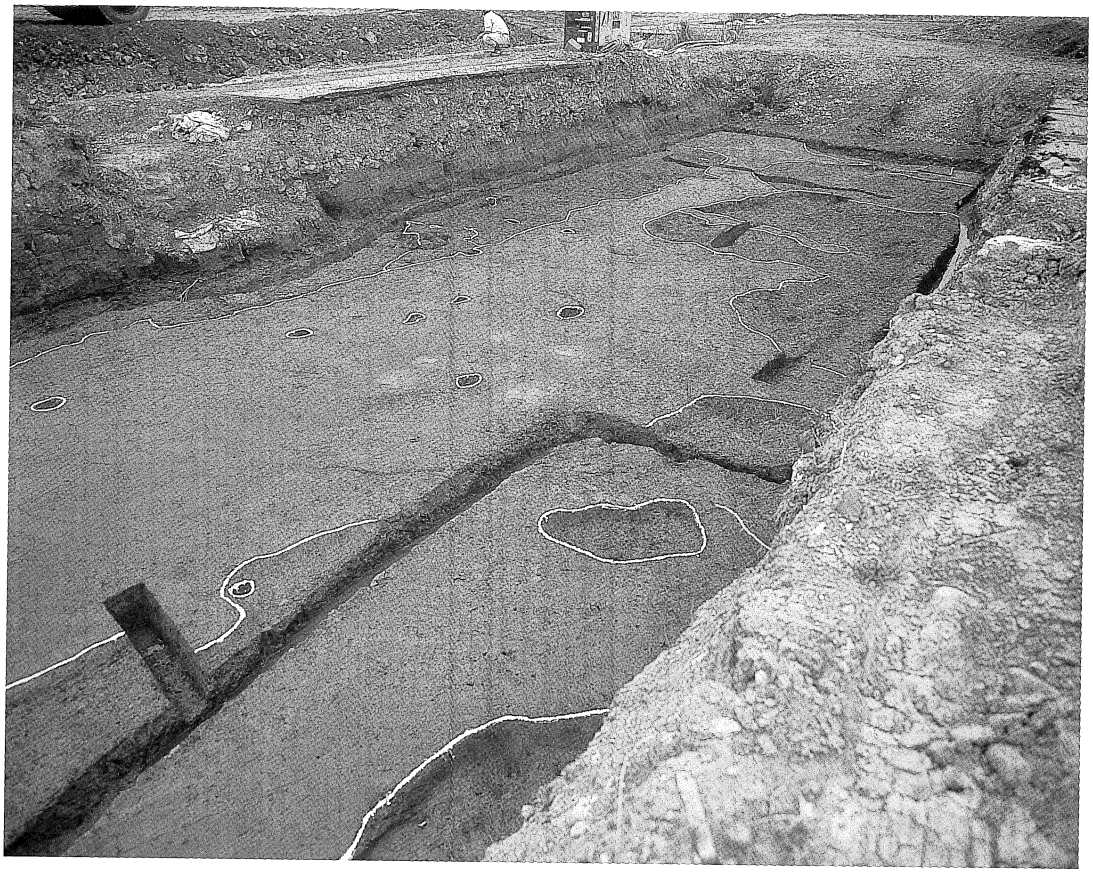


第５次調査　３区検出状況

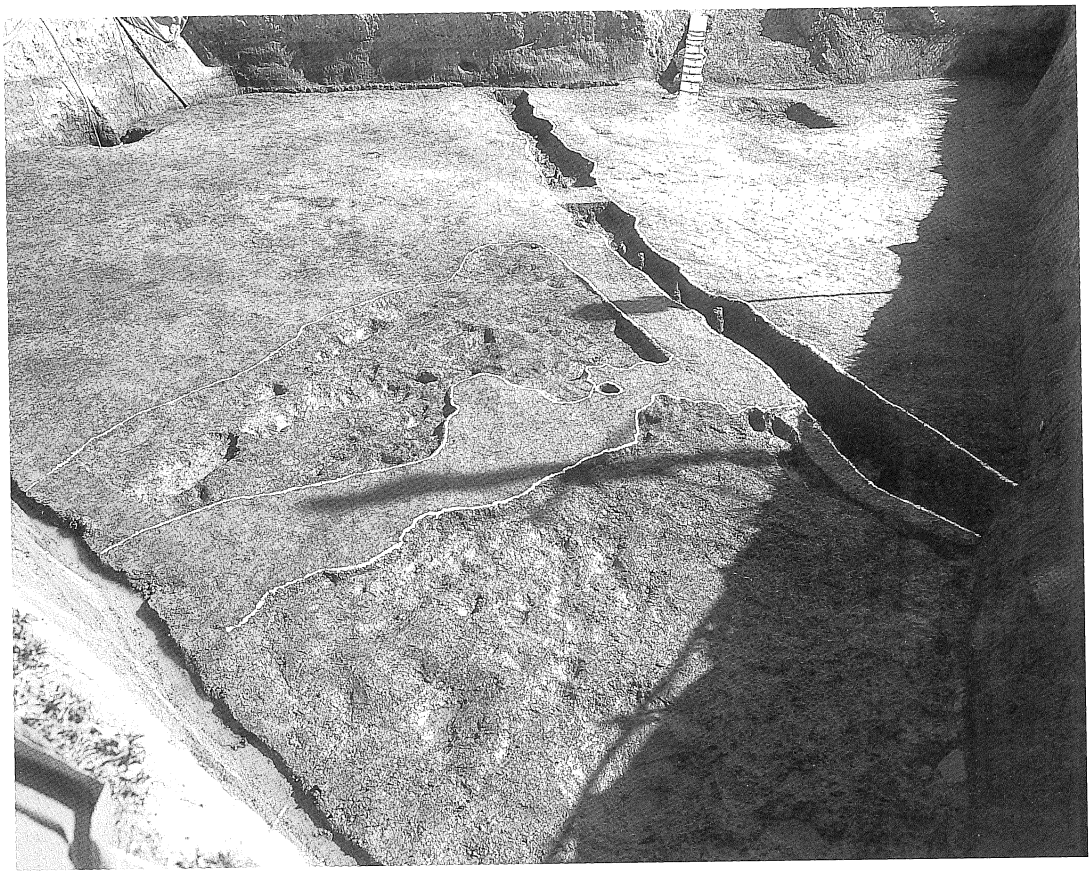


第５次調査３区　ＳＫ４

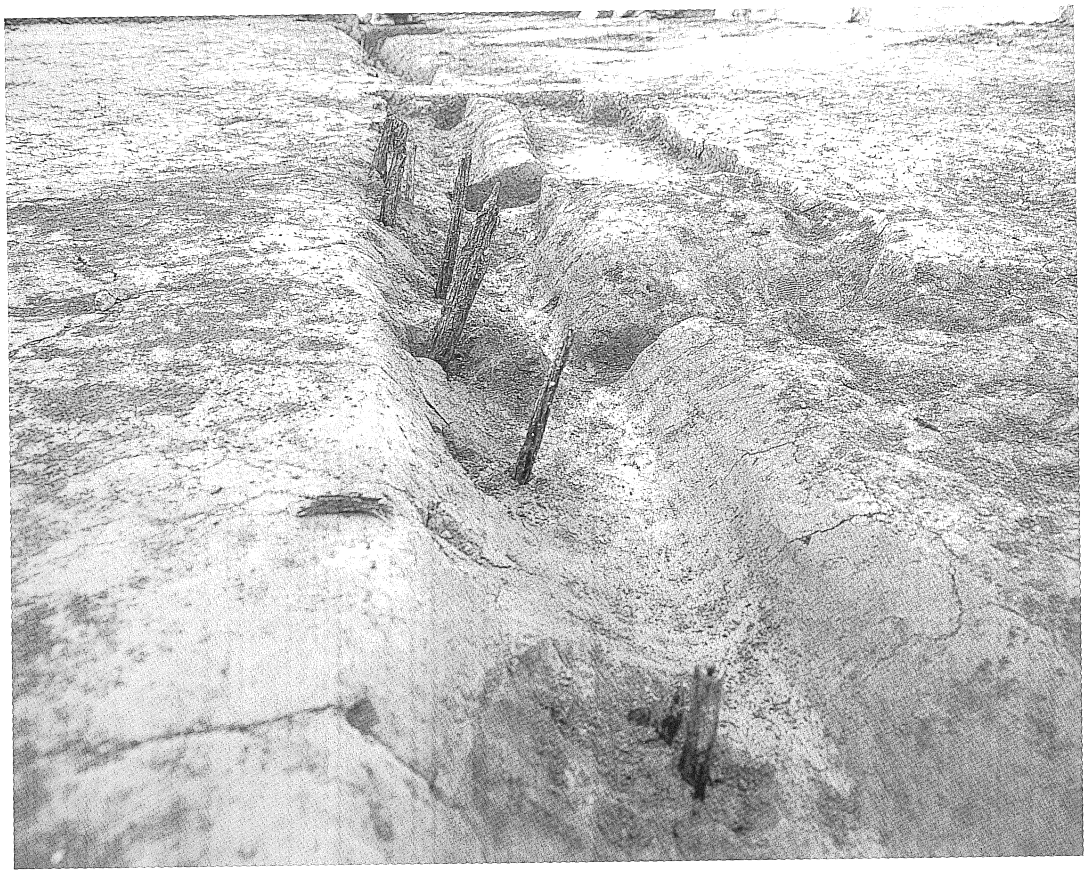
第５次調査　１区１面



第５次調査　１区２面



第５次調査　２区遺構状況



第５次調査　２区ＳＤ１

報告書抄録

ふりがな	たまざわちくじょうりあとだいよじ・だいごじはっくつちょうさほうこくしょ
書名	玉沢地区条里跡発掘調査報告書
副書名	国道442号道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	大分県文化財調査報告書
シリーズ番号	第168輯
編集者名	高橋徹・高橋信武
編集機関	大分県教育委員会文化課
所在地	大分市大字中判田字ビワノ門1977番地
発行年月日	2004年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
玉沢地区条里跡 第4次調査	大分市大字玉沢（おおいたし おおあざたまざわ）	44201	322111	33°10′55″	131°34′23″	2001.9.1 ～ 2002.3.28	5,750㎡	国道改良
玉沢地区条里跡 第5次調査				33°10′51″	131°34′21″	2002.7.8 ～ 2002.10.18	700㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
玉沢地区条里跡 第4次調査	水田跡	古代 近世	溝状遺構 溝・土坑	須恵器 肥前磁器	
玉沢地区条里跡 第5次調査					

玉沢地区条里跡

国道442号道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

大分県文化財調査報告書第168輯

平成16年３月31日

編集　大分県教育庁文化課（文化財資料室）
〒870-1113
大分市大字中判田字ビワノ門1977番地
TEL　(097)　597 － 5675

発行　大分県教育委員会
〒870-0021
大分市府内町３丁目10番１号
TEL　(097)　536 － 1111

印刷　㈱インタープリンツ
〒870-0945　大分市津守563番地の７
TEL　(097)　568－8123